



# あごら20年

女の20年  
——成人式の記録から——

ほか

● 高橋 ますみ

● 河野 信子  
大津 庄司

● 上木 謙  
リベラ 詩

● 田中 道子  
輪子 詩集

● 下村 謙子  
『リベラ』の限界

● 『リベラ』の限界  
鎌田 敏子

● 『リベラ』の限界  
『リベラ』の限界

● 田中 道子  
『リベラ』の限界

● 高橋 ますみ  
『リベラ』の限界

ようこそおいで下さいました  
1 重原惇子

田嶋陽子のおもしろフェミニズム  
5 良妻賢母フェミニズムなんて捨てちゃえ！

女の思いをリズムにのせて  
30 まのあけみ

AGORAボトム会議 マスコミの限界／ミディコミの限界  
32 下村満子・増田れい子VSあごら編集部

みんなで話そうⅡ女と男の言いたい放題  
103 河野信子・金住典子・外口玉子ほか

あごら二十周年に寄せて  
152 浅野美和子・井上輝子・上野千鶴子ほか

二十周年の集いに参加して  
184 畠山裕子・浜村匡子・半田たつ子・西口美佐子

あごらメイト みどりの風のように生きたい  
188 斎藤千代

あごら既刊リスト  
195 1972・3 — 1993・3

こんにちは。

お忙しいなか全国からようこそお出でくださいました。

一九七二年二月、戦後のフェミニズム雑誌の草分けとして誕生した『あこら』。

三号雑誌を覚悟していただいたのに、お蔭で九二年二月、満二十歳を迎えました。月刊の発行やら、相次ぐ運動やらに追われて成人式もののびになりましたが、

遅ればせながら、ささやかなつどいを持つ運びになりました。

厚くなったり、薄くなったり、質も量も千変万化。

皆様をハラハラさせ続けた『あこら』ですが、

不戦

不差別

不暴力

の『あこら』流ジャーナリズムだけは、

なんとか貫き徹したのではないかと思います。

『あこらの二十年』は、

『国連女性の十年』をはさむ画期的な『女の二十年』でもありました。

皆様の活発なご意見をうかがいながら、楽しく語り合いたいと思います。

例によって準備不足で不行き届きな点も多いかと存じますが、

どうぞ最後までリラックスしてご参加ください。

『あこら』は、どんな時でも、弱者と女性の味方でありたいと願っていますので。

(『あこら二十年のつどい・プログラム』より)

## 三百本の

## バラに包まれて



重原傳子さん こんにちは。お忙しい中を全国各地からお集まりくださいます。ほんとうにありがとうございます。〈あごろ東海〉の重原です。きょうの進行を勤めさせていただきます。

まだ会場にお着きでない方もだいぶいらっしゃるようですけれど、きょうはびっしりスケジュールがつまっておりますので、定刻どおり始めさせていただきます。

では、まず、〈あごろ〉の生みの親、斎藤千代がご挨拶を申しあげます。（拍手）

斎藤さん 斎藤です。きょうは道案内の地図が不十分でほんとうにごめんなさい。迷っているというご連絡をだいぶ頂き、お待ちしなければならぬのですが、田嶋さんのお時間はどうしても動かすことができませんので、始めさせていただきます。

〈あごろ〉が生まれましたのは、一九七二年二月十七日。年の初めに成人式をするところでしたが、忙しさにまぎれて今日になってしまいました。

二十年——長いのか短いのか……。先ごろ総理になって一年目を迎えられた宮沢さんは、「一年はあっという間とも思えるし、何と長い歳月だったろうとも感じられる」とおっしゃったよう



ですが、私も似たような感じがします。

二十年——なんだか亀の甲にこけむしたような感じもするし、エエッ、そんなに経ったの……という感じもするんです。考えてみると、ことし二十歳ということは、貴花田（現貴ノ花）と同じ年なんですね。わあ若い！ その若さで、これから行動したいと思います。

重原さんがおっしゃったように、きょうは過密スケジュールです。それで、時間をできるだけ短縮するために、壇上の方のご紹介などは、すべて省略させて頂きます。プロフィールはお手もとのプログラムをごらんになってください。

ところで皆さんは「アンビリ」ってことばをご存じですか？（バラバラと挙手）。さすが若いへあごろ……。これ、高校生にはやってる言葉だそうで、「予想外」という意味で使われるようです。へあごろは、いつも「アンビリ」です。きょうの集会も、計画なし、リハーサルなし、打ち合わせなし、何がどうなるか、私自身、全く見当がつかない状態です。でも、どんな時でも失敗をおそれないのがへあごろのいいところではないかと思っています。皆さんも、そのへ意外性」をどうか共有して下さい。

この会場、色とりどりのバラ、ステキでしょう！ これも「アンビリ」の一つ。今朝九時に、博多の朝市から航空便で、三百本のバラが届いたのです（拍手）。へあごろ九州」の皆様のお心づくしです（大拍手）。お帰りの時、皆さまに一本ずつ、お渡ししたいと思っています。（拍手）

では簡単にプログラムの説明を申し上げます。

田嶋さんのお話に続き、これも「アンビリ」で、今朝飛び入りが決まりました。名古屋からい

らしたシンガーソングライターのあのあけみさん、元氣溢れる歌で会場をわかせて下さると思います。

続いて「あこらボトム会議」。「ボトム」ってズボンのこと？　なんて聞かれましたけれど、サミット（頂上）ばやりの今、あえてボトム（底辺）と名づけました。テーマは「マスメディアの限界／ミディメディアの限界」。マスメディアの下村満子さん・増田れい子さんをお迎えしてミディメディア『あこら』制作者が問題提起した後、会場の皆さんを含めて討論します。

お願いがあるのですが、討論に入りましたら、それに加わりたい方は、ぜひ壇上に上がってください。日本人は謙譲の美德というのでしょうか、遠慮なさる方が多いのですけれど、外国の女の集会でいつも感心するのは、質疑応答とか会場討論に入ると、我先に長蛇の列をつくって発言するんですね。日本でも一度あれをやってみたいと思っていました。ぜひ、そのとば口を開いてください。「失敗するのは、決して恥ずかしいことではない。失敗したら恥ずかしいと思う心が恥ずかしい」と、「あこら可能性教室」では言い続けております。

ただ一つお断りしておきます。問題提起の後の討論は本当のいい討論をしたいと思っていますので、皆さんそれぞれこの機会に訴えたいことをお持ちでしょうけれど、それは夕食のお弁当と共にビールを召し上がった後の第三部でお願いします。

第三部の枕は、『高群逸枝研究』などで有名な、河野信子さんが、わざわざ九州からお越しになってご発言くださいます。最後までごゆっくりお楽しみ下さいますよう。

では三百本のバラに劣らずパワフルで美しい田嶋陽子さん、どうぞ！

# 田嶋陽子のおもしろフェミニズム

良妻賢母フェミニズムなんて  
捨てちゃえ！



★プログラムから★

田嶋陽子さんのお話——

法政大教授という以上に、いまマスメディアの超売れっ子として活躍の

田嶋さん。

おもしろおかしい絶妙な話術には定評がありますが、とてもデリケートな、やさしい方です。

何のお話が飛び出すか、田嶋さんには「とにかくいま一番お話しになりた  
いことを話して下さい」という以外、何の注文もつけていません。

私に与えられた時間は一時五分から二時五分です。短い？ ご安心ください。私は早口で、人の二倍話しますから（笑）。

今日のテーマは「マスメディア」と「ミニメディア」ですね。私は、ひょんなことから『笑っていいとも』とか、『たけしのTVタックル』とかの番組に出ることになってしまいました。そこで私が何を感じたか、そして今女の人にできることは何かな、ということをお話ししてみます。

『婦人公論』にそんなことをちょっと書いてみたんですけど、お読みになった方、いらっしゃいますか？（挙手パラパラと）。ああそうですか。斎藤千代さんにお聞きしたら「へあごろ」の会員で『婦人公論』を読む人は少ないんじゃないか」と言われたんですけど（笑）読む人いらっしゃるんだ。それは困ったなあ（笑）。でも、ま、そこで私が感じたことで、いまもって心に残っていることを、いくつかお話してみます。

## 「知らぬが仏」で出たテレビ

『笑っていいとも』に出たのは二年半前なのですが、そのころ私は、大学から一年間の休暇をもらって、軽井沢の家で仕事をしていました。その前に、日本青年館で樋口恵子さんが校長先生の「花婿学校」というのがありまして一般男性を対象とした授業をしたことがあるんですけど、「花嫁じゃなくて花婿だ」というんで、新聞だとか雑誌だとかでいろいろ騒がれたんですね。それで「笑っていいとも」のスタッフが、いま話題になっている花婿学校をネタにして、なにかやろうじゃないか、ということになって、そこで、ポツと押し出されたのが、私だったんです。で、何が何だかわからないままに、いきなり山の中からブラウン管の中に飛び出したというわけです。『笑っていいとも』なんか見たことがなかったものですから、こういう番組かわかりませんで、七月十六日に話がありました時に山を下りて知り合いの人の家に行ってテレビを見せてもらいました。ちょうど「テレホンショッキング」とかいいうのをやっていますして、政治家の柿澤弘治さんが出てらして、年格好が似ていたこともあって、あれに出るんだな、あそこで花婿学校のことを話すんだな、と思って、三日後、十九日に新宿のアルタに出かけてみたら、なんと別のコーナーに白板が用意してあって、「タモリの花婿アカデミー」とある（笑）。で、そこで話をする事になったわけです。それが一回目。一回で終わりだと思いましたが、一回が二回、二回が三回、と、とうとう全部で十回続きました。

一番最初出たときに、とても悩んだんです。津田のときの指導教官から、「おまえは大学教授なんだろう、あんなところで笑いモンになって、オレはもうおまえを弟子とは思わない」と。男

の先生でした。とてもショックで半ベソをかいて母に電話したら、母は沈黙したまま、ものを言いません。「恥ずかしい」とひとこと言って。それで今度はフェミニストに電話したら、また沈黙。そして「でもしょうがないよね。世の中いろいろ間違っているから」（笑）。非常にショックを受けました。でもその時、どういうわけか視聴率は良かったんですね（笑）。テレビというのは視聴率がいのちですから、視聴率が良ければある意味ではどうでもいいわけですよ。でも私は視聴率がよかったことなどきかされていなかったし、とにかく帰ってきて悶々と悩んで……。四面楚歌ですね。誰一人私を援護してくれる人はいないわけで、親から教師から友達から……。そんな中で私は本当に胃を痛めておかゆを食べていました（笑）。

でも、べつに、私は笑われるという気にはしていなかったんです。私のものの考え方では、フェミニズムというのは、クソ真面目に訴えたって誰も聞きやしない。私に言わせれば、ガレー船、すなわち「奴隷船」の船底にいる人間たちの声を聞くなんていう人は、よっぽど器量が大きい、心の広い奇特な人、ヒューマニストです。もしふつうの人に聞かせるとしたら、お笑いとか、芝居とか映画とか何かで聞かせなきゃだめ、ということを持論として持っていましたから、そういうことができる人を待っていたし、私自身、映画をつくりたいとも思っていました。まさか私がタモリさんのお笑い番組に出るとは、思ってもいませんでした。

で、そこで私が何を感じたかと言うと、けっこう楽しかったんです、やっている最中はね……（笑）。私はテレビのことなんかよくわからなくて、一緒に出ている人たちのこともよく知らなくて、名前も付焼刃で、一生懸命覚えたのに、「ウッチャンナンちゃん」は「ウンちゃんナンちゃん」になるし、鶴瓶さんなんかも「つるべいさん」と読んだら、違う、「つるべ」だと訂正さ

れるし(笑)、いじめられたり笑われたり。こっちもなんだかおかしくて涙を出して笑っていたら、あとでフェミニストに「あんた笑い過ぎだ」と怒られてしまいました(笑)。

でもあとで私が反省して悔しかったことは、私は言いたいことは何も言っていない、笑いモンにされてただけで何も言いたいことは言っていない、それが悔しかったんです。ところが、実はそうではなかったんです。最近、やっとそれがわかりました。

## 「言っていない」つもりが「言いまくって」いた

先週、『笑っていいとも』の「テレホンショッキング」に出たんですね。ちょうど『愛という名の支配』が出たので、本の宣伝をしてもいいってきいたもんですから、それじゃということだったんですが、そのときに二年半前、自分は何をしてたのだろうと思って、昔のビデオを見たら、言っていないじゃなくて言っているんですね。それなのに私は言っていない、言っていない、と悩んでいた。この自己認識のズレ(笑)。なんでそういうことになるのか、というと、私自身の中に潜んでいる、女らしさの残滓ですね。それは、完璧主義、反省主義です。こうありたい、と思ったらそのとおり表現しないと気が済まない。

全部言おうとするのはあきらめた、せっかく場所を与えてもらったのだから、一つ言えればいい、そうと思えるようになるまで二年かかりましたよ。学んで修行して。それまでは、あれも言えなかったこれも言えなかった、と毎回落ち込みました。実際、テレビ局の人は、私が言いたいだけ言っても、みんなカットします。でもなかには私の言おうとしていることをことばの端々か

らキャッチしてくれる人もいてくれる。そこに頼る以外ないんだ、ということがだんだんわかってきました。

余談ですが、『たけしのTVタックル』では、出演者がしゃべる時間は大体均等にしてあります。ですからあまりしゃべらない人の言葉は、つまらない言葉でも拾ってあります（笑）。

ただし、たけしさんは例外です。みんなは、彼の話が聞きたくてチャンネルを合わせるわけですからね。そのとき、ついでに私も見てくれるということです。

それからもう一つ、完璧主義と反省主義のほかに私を苦しめたのは、自分を受容する力がなかったこと。おまえはそこまでやったんだから、もういいんだよ、という、私の中で私を大目に見てくれる、もう一人の自分が弱かった。自己受容する力が十二分に備わっていなかった。だから私は、七転八倒して山の中で苦しんでいたのね。酒飲んで、おかゆ食べて（笑）。

ヒモから逃げられないしがらみで……

で、私は「フェミニストたちにフェミニズムを笑いにしたと怒られたし、何でああ言わなかった、こう言わなかったと怒られたし、もうイヤだァ」と言ったのね。で、その時にそういう私にテレビ局の人がどう言ったかと言いますと、あの人たちは人の心理をよむのがとても上手です。私が悩んでいると、「先生、今度はみんなにも言っちゃってちゃんと言えるようにしますからね」って。そしたらほんとうに二回目の時、言わしてくれましたよ。でもあとでなんて言われたと思いま



す？「先生あれじゃ客が引きますよ」（爆笑）。わかります？要するに私一人がしゃべっちゃったから、客はおもしろがっていない、だから笑わない、というんですね。

ところが最近そのビデオをはじめて見たら、結構客は笑っている。でも当時私は自分を客観的にみれなかったから、「そうですか、悪うございました」と言って……。その時も視聴率は良かったらしいんですけど（笑）。で、向こうは、「先生、今度はもっとうまくやれますよ、バランスをとって劇画風でやりましょうか」とか言うんですからね。で、私は受け身でしょう。芸能界を知らないしテレビも見てこなかったから、何がおもしろいのか、つまらないのか、そういうセンスがないわけです。今の若い人にはそういうセンスがあつて、パッと見てこの番組がおもしろいかどうか、いっしょに三つか四つ見ているのかわかる（笑）。すごいですよ。でも私は本を読むのも下手ですけど、テレビを見るにもじっと見てしまふ。かぶりつきになっちゃう。

だからいろいろ言われると、向上心は一人前にあるわけだから、ああそう、じゃ次はちゃんとやる、となる。こうなると罍にはまったと同じ、もう出られなくなる。売春婦と同じ（笑）。

アメリカの女性学会で売春婦のセクションに出ました。どうして女の人は売春をするのか、どうしてそういう状況に立たされるのか。一度売春をした人はどうしてそこから抜けられないのか、どうして売春婦がヒモに頼るのか、彼女を働かせ搾取するヒモからどうして離れないのか、という話がでた。それは、世界中でそのヒモだけが彼女に関心をもってくれたから、というんですよ。寄るべのない売春婦にとって、親からも兄弟からも見捨てられ愛情をかけられなかった売春婦にとって、たとえ、自分のセックスやお金を搾取されても、自分に関心をもってくれるヒモだけが

頼りだと……。その話を思い出してドキッとしました。私の状況と同じじゃないですか（笑）。

まさに『笑っていいとも』のスタッフと私の関係はこれだったんです（笑）。ディレクターからは逃げられない。指導教授もフェミニストもみんな私にアンチのとき、ディレクターやそのスタッフだけが、視聴率のためとはいえ、私に関心を持ってくれた（爆笑）。それで十回も続けちゃった（笑）。

### わたしを励ましてくれたお母さん、お兄さん、子どもたち

でも私を励ましてくれたのは、実は、ディレクターやそのスタッフだけではなかった。私の一番身近な人たちが、みんな沈黙を守ったり、悪口言ったり、批判したりしている時に、私をおもしろがって応援してくれてた人たちがいたんです。電車に乗っている子連れの主婦たち、男の子たち、パンチパーマのお兄さん。——一番最初に出たとき、夜、国分寺のパチンコ屋の前で「ああ、その声は先生だァ」という黄色い声が聞こえた。「田嶋先生でしょ、今度何言うの？ おもしろかったよ」って、十四、五歳の女の子たちが言ってくれたんですね。少なくともこの世代の人たちは、わかってくれた、おもしろいと言ってくれた。軽井沢に電車に乗って帰る時、夏休みで旅行中の男の子たちが、足を開いて座ってた。一人が私を見て「おい、ヤバイぞ」と足をついている（笑）。番組の中で「電車の中で大股ひらいてすわる男は——」って私が言ったのを、そういう子たちはちゃんと覚えていて反応してくれたんです。

全国遠いところからもハガキがきました。自分が普段思っていたことを言ってくれてスッキリした、とか、元気になった、とか。

電車の中で真っ白い靴履いて、真っ白いズボン履いて、角刈りにした、ちょっと変わっている人たちが席をゆずってくれるとか、全然縁のない人たちが、私の話を聞いて、どこをどう感じてくれているのかわからないけれども、そんなふうにして応援してくれていたわけです。

もう一つとても助けられたのが、ディレクターやアシスタント・ディレクターのお母さんや、奥さんだったんですね。一番最初に出たとき、局の別の番組のディレクターがシャワーを浴びていたら、いつもデンと座っている七十近くの彼のお母さんがわざわざ風呂場まで呼びにきて「あんた早くきて見てごらん。おもしろいのやってるよ」って言うんでびっくりしてテレビを見にいった。あのお袋がおもしろがったんだから何かあるだろう、と（笑）。もう一人は直接私と関わってくれたアシスタントディレクターの奥さんで、私の話を聞いてから、さあここぞとばかり亭主を突つき出したんですね。私だって、ほんとにはあんなことを言いたかったんだって。亭主はビックリしちゃって、で、番組をやめるかというところでなくて、「そうか、女の人たちがこんなふうにして聞いてくれるんだったら、あのお化けみたいなもの（笑）もう少し使ってみようか」って、恐らくそういうことになったんでしょね。

その奥さんとは話をしたり、本の交換をしたりもしました。時代の先端をいくディレクターの奥さんというと羨ましがられたりするけど、やっぱり自分の人生は生きていない。一応フリーのライターなんだけれども、亭主の匙かげんで生きてる。そういう鬱々悶々の話を聞いたりして結婚した女の状況はやっぱり大変なんだなと思いました。

そうやって結局、私は周りの人たちのそれとない援護で今もこうやってテレビに出ているって感じがするんですね。例えば『笑っていいとも』でも言いたいことが言えなくて悩んでいた時、鶴瓶さんがいろいろとそれとなく助けてくれました。番組中も私の言うことがよく聞き取れないときは、繰り返してくれたり、早口すぎたときとか、ゆっくり言い直してくれたりして。タモリさんもそうなんですけど、一緒に出ている人たちがいろんな意味で助けてくれました。

最後の日、私が美空ひばりの歌をうたったとき、鶴瓶さんとタモリさんがうしろで突然、ひっくり返ったんです。母に言わせれば、そういうときは知らん顔でいればいい。私はびっくりして歌をやめて助けに行ったの（笑）。そしたら鶴瓶さんが、あとで、あの時は申し訳なかった、先生はそのまま歌って下さりやいいのに、それを言っておかなかったって。また番組の終わりに私は田嶋音頭を披露したんです。「男はパンツを、女はパンを。鬼の居ぬ間に命の洗たく、バパンがパン」って。そしたら私が早口すぎたもので、鶴瓶さんがそれをゆっくりかんでふくめるように繰り返してくれたんですね。何日かして、銀行に行ったら、若いお母さんに呼びとめられて、「うちの子どもたちが『男はパンツを、女はパンを』って、みんなで踊ってるんですよ」って。子どもたちが言えるようにしてくれたのは鶴瓶さんが私の早口をゆっくり言い直してくれたからなんですな。

## 「たけし」は鋭い感性の人

『おはようナイスデイ』などの朝や昼のワイドショーのたぐいに出て私がものを言ってもなに

か番外れなんです。言ったことを言い直されたりして。むなしくなって、「ここは私のくるところではなかった」と、とてもいやな思いをして、こういう番組にはもう一切出ないようにしよう、と思ったんです。

そして、『たけしのTVタックル』から話がありました。たけしなんて知らないからイヤだ、と言ったら、局の人が一度だけでいいからって。そのあと、レギュラーにならないかという話があつて断ったら、プロデューサーが、私の行くところ、ついてくるんですね、電車の中まで（笑）。まるでセールスマン（笑）。で、根負けしてもういちど山の中から出てくることになるわけです。

最初ゲストとして『たけしのTVタックル』に招かれたとき、たけしという人も知らない、番組も知らない、どうしよう、と思って電車の中でパッと見上げたら『微笑』という雑誌の中吊り広告が下がっていた（笑）。彼が女の人について何か書いてるみたいなので、どんな考えの人かな、とキオスクで買って読んだら、「女なんて一発やればこっちのもんだ」と書いてあるんだよね。頭に來たなア（笑）。で、コピーにとって収録場所に持っていくって、そこで「たけしさん！」と、ケンカを売った（笑）。「たけしさんが書いてることはホントです。一発やればおしまいだっているのは。男は甲板の上において、女は船底で飯炊きやってる、そういう構造の中でセックスやるってことはそういうことなんです。だから昔はセックスしたら、女だって、私を養って、すがったわけですよ。一回されたら、女は男の占領地になるということ。だからそれは事実なんです。女なら誰も認めたくない事実ですけどね」と私は言いました。

たけしさんという人は鋭い感性をもった人です。しかも感じたとおりを言える人です。普通な

らこんなこと言えませんか。「てめえ食えねえんだろ、食わせてやるから一発やらせろ」というのは、男の人の本音ですよ。私は言ったんです、「だけど」って。それから議論になって二時間半、テレビなんかそっちのけで（爆笑）。だけど四十五分に編集された時には私が反論したところは全部カット（笑）。彼のことはで終わったら、見ている人は彼が正しいと思う。あるいはそれが番組の主張だと思う。そうでしょ？ 見る側によほどしっかりした知性やしっかりした個性がないと、疑問を差しはさむのがむずかしい。そしたら案の定フェミニストの人たちからファックスが入って「なんでもっとはっきりものを言わないの」って（笑）。そりゃあ、あたしあ頭にきたよ（笑）。文句ばかりつけて。そんならあんたたち、あそこでやってみな！って思いましたね。で、くやしいからテレビ局にねじこんだんですよ。私が言った証拠になるもの、録画をみんな出してくれて。そしたらプロデューサーが大事なものだから出せない。こちらに取りに来してくれるんだったら、っていうんですね（笑）。借りて持って帰れば同じなのに、へんなこと言うなと思っただけ、でも郵送中の紛失をおそれからかな、とも思っただけ、それでビデオ欲しさに、またのこのこ軽井沢から出て行って。そしたら、来たついでに一本出て下さい、ということになって（笑）。私、そのビデオ欲しいばかりに出ましたよ（爆笑）。

### 「たけし」だけが認めてくれた

それはとてもおもしろい記録です。そのとき思ったことは、テレビの良し悪しは編集なんだな、と。テレビを作っている人たちは、優等生とちょっとズレているから、魅力的で知的で、ものの

見方がおもしろいし、人間的にも練れているし、個人的に付き合ったらとてもすてきな人たちです。だけど番組をつくるとなると視聴率という宿命があるから、どうやって人にみせるか、それと同時に誰がこの番組の主人公かということを大事にします。これは『たけしのTVタックル』ですから、たけしさんをおとしめるような部分は出せないわけです。人は彼の話を聞きたいわけですから、番組も彼を立てる、彼を王さまにする、主人公にする、それが編集なんですよね。

そして結局私がまたフェミニストの人たちから怒られたのも、その編集の犠牲になったからなんですよ（笑）。で、二月、三月とポツポツ、ゲストで出ていて、そのあと四月からレギュラーになりました。

その時条件を出したんです。一つは編集は公平にすること。また私が出るとしたら、それは女のことを言いたいから出るんだ。けどただ訴えても誰も聞いてくれないから、私はやっぱりたけしさんの胸は借りなければならぬ。その場合、最初に一分でも二分でも、できれば十分間コーナーを設けてほしい。そこで私とたけしさんだけで話をさせてくれ、と言ったんです。私はそれまでにもいろんな番組に出たけれど、対等に話せる人はたけしさんしかいなかった。みんなきちんとしてこれないし、私もついていけないし。みんなはぐらかすし、受け皿がない。でもたけしさんとなら展開が可能なんです。あの人はちゃんと対応できるんです。鋭く切り込んでくるから話していてもおもしろい。

じゃあそういうコーナーつくりましょうというので、それならやりましょう、ということになったんです。ところがせっかく作ってくれたコーナー、二人がだんだん興奮して、私が言いつのっちゃってけんかになっちゃった（笑）。で、そのコーナーは一回でとりやめ（笑）。だけど私

のアイディアだけは残って、今でもやってるじゃありませんか。『TVタックル』がはじまってすぐやってますでしょ？ たけしさんを囲んで竹下景子さんと東ちづるさんの三人で。あれが私の提案したコーナーで、私の失敗で乗っ取られちゃった。でもあそこでたけしさんは言いたいことは言えるし、彼女たちも言ってるから、提案したことは良かったと思ってるんです。

それ以後一年半たちました。この前百五十回記念とかをやってくれたんですが、番組が始まる前にたけしさんは言ってくれたんですね。「パンツ論争には参ったな、パンツを自分で洗わなくていい、と思ってる男はもういないんじゃないかな」と、ね。これは彼からもらえる最高の評価ですよ。誰も私にはそういうことを言ってくれなかったけど、一緒に出ているたけしさんだけが唯一評価してくれた。そして百五十回記念の中だったか、「もうおれのテレビじゃないよな、田嶋先生のテレビだよな」、って私を立ててくれた。めったにないことですよね。私は自分ではそうは思えません。忸怩たるものがありますからね。でも私のこと、女のこと言いたくて破門されながらも頑張ってるんだな、と感じてくれてるし、彼自身頭のいい人ですから何が問題なのかわかりはじめた、そういう感じなんですわ。

ただ、たけしさんはこう言います。「先生、差別差別って言ってないで、男だって勝ち取ってきたんだから、女だって勝ち取らなくちゃ」って。私、それ、女に言われるんならいい。だけど、男に言われると怒るんですよ。「じゃ、あんた、その足どけてよ」って言いたくなる。女にパンツ洗いさせて、メシ作らせて、子守させておいて、だから自分たちは甲板の上で好きなことやるわけでしょう。だから女をふんつけているって「その足どけて！」って言いたい。



## やっと「上に立つ」女が出てきたおかげで

このあいだ竹内宏って人と対談した時も、「差別差別って言ってないで勝ち取れ」って言うんですね。で、「じゃ、その足どけて」って言ってやった。女には能力がないとかいうけれど、違うんだ、あんたがその足で踏んづけている限り、私らは跳ぶのに倍の力がある。だからまずその足どかしてよ、ってやっぱり男には言っていかなくちやいけない。たけしさんにも「その足どけて」って、言いました。「だからまだ当分の間、私は差別差別って言うよ」って。「だってみんな何が差別か分かっていないし、女だって何が差別かはつきり分かっていないよ。だから、何が差別かよく分かるまではまだ私は言うからね。もう少しのガマンだよ」って(笑)。

でもね、私は、女の人には、「差別、差別って言いながら勝ち取れ」と言いたい。何が差別か見極めながら、自分でそこから飛び立つ準備をしなくちゃ、ってそういうふうに言うんです。結局私がテレビ局の中で感じたことは、男の人にはとても力がある、ということです。何十年も甲板の上でやってきたんだから力があって当然です。元来女の人にも力があるのに、やらせてもらえなかった。パンツ洗いとメシ炊きと子育てでエネルギー使い果してきた。でも、近ごろテレビ局をみても、やっと女のカメラマンが出てきたし、女のディレクターが出てきた。NHKで『はんなさむウーマン』が出来たのは、伊東律子さんが部長になられたからです。要するに企業の中でいっしょうけんめい頑張ってきた成果です。あの司会の山根基世さんも、いつやめようかいつやめようか、と苦しんで、それでも頑張ってやめないで続けてきたから、それが少しずつ形になってきた。やめないで頑張ったから形になったというのは、すごくうれしいですね。

でも一般には、私の学生も、女子は、子育て云々とかで、経済効率からなかなか企業に採ってもらえない。なんだ先生、女は採らないじゃないか、と言われるんですけど、まあまあ焦らないで少しづつやっていこう、としか言えないですね。だけど現実には女性のライターが出てきて、女性のカメラマンが出てきて、女性のアシスタントディレクターが出てきて、お昼の番組なんか女性のディレクターがやっているわけです。

でも結局、番組を買うのはスポンサー。全部金持ちの男、企業なんですね。せっかくいい番組を作っても、その番組を買ってくれる人がいないとしょうがないんです。女のお金持ちがいないんですよ。女は貧乏で。しかもインテリ女には資本主義が悪で、貧乏が正義みたいなのが多かったでしょう。だからそういうところに指導性を発揮できる女の人がいなかったんですね。それでもやっと女の人番組を作る側にまわってきたんです。そしてそういう人たちと、私はテレビに出たがゆえに出会うことができました。

〈電通〉というところから新人社員のための講演を頼まれたんですね。じかに番組とかCMを作っているところだから、言ってみてやりましたよ、思いつきり（笑）。もうこれでテレビに出ないからって腹くくってね。というのは、CMの一つで、きんさんぎんさんに「女はラクでええなあ」「みたいなのを言わせてるのがあったんですね。それで「確かに。きんさんぎんさん」「百歳まで生きてありがたいよね、うれしいよね、元気出るよね。でもあの人たち十一人子どもを産んで育てて、肥え樽かついで、きんさん働いてきたんでしょう？ ラクしてたわけじゃないでしょう？」でもこのCMじゃ、まるでラクしてたから百歳まで長生きしたみたいじゃない。女はラクでええなあ」と、そういう言わせ方はないよ」（拍手）と、言ってみてやりましたよ。

”フェミニスト嫌い”が、フェミニストに関心を持ち始めた

そしたら反応が出てきたのは、そこで新入社員と一緒に私の話を聞いていた女性社員だったんですね。「実は自分も女ということで苦しんできた。だけど、フェミニズムとかフェミニストとかが嫌いだった。例えば企業で働いているのに、企業に就職するのはだめだとか、商業主義はだめだとか、資本主義はだめだとか、そういうことを言われると立つ瀬がない。そういう状況の中にいてどうしたらいいのかわからない。今までのフェミニズムは女の足を引っ張ることはあっても決して女の味方じゃなかった」と言うんです。で、いろいろ話しているうちに「じゃ一緒に何か番組をつくらうか」という話になった。

その前に、フジテレビに『迷い旅』という番組があって、それに出て、「嫁取り」ということばの意味を調べに飛騨高山まで行ったんですね。一日半かけて。「嫁取り」というのは「芽を増やす」ということで、例えば米がたくさんとするように、って、田んぼの角の小さな面積にも稲を植える。セクターを編むとき目をふやすのも「嫁取り」って言うんだそうです。だから嫁は歩く財産、歩くトラクターです、「男」や「家」にとってはね。ただ働きさせて、財産は全部男名義でしょ。子どもだって「家」のもの。自分だって嫁にいけば他人名義でしょ(笑)。逆に嫁をとれば一家の財産は増えるわけです。

で、その番組の製作会社の社長が女の人だったんです。その人も、やっぱり、「フェミニズムとか女のことはやりたくない。聞いただけで世界が小さく小さく狭められる、あれしなきゃいけないこれしちゃいけない、そういう感じがあった。フェミニストというと自由になるところか窮屈

でしょうがない」と言うんですね。

で、この社長と電通の人はたまたま知り合いで、私が間に入って、もういちどフェミニズムという女の視点を持ってなにか女の人が本音を言えるような番組を作ろうじゃないか、という話になって、それから一年がかりでやっています。台本を書いているのも女です。だけどとてもむずかしいですね。

フェミニズムをくそ真面目にやって誰もお茶の間で聞ってくれる人なんていません。おもしろくやりながら、しかも真意をちゃんと伝えるなんて、これまた至難の技ですよ。女の問題の根本は性とジェンダーですから、なにかとすぐ差別用語にひっかかるし……。それに、出来たにしても、番組を買ってくれる人がいないと困る。企業は視聴率を求めているから、ただ人権意識や正義感だけでは買わない。いざというとき、もし視聴率をとれないと困るから、それなら従来のままでやろう、となる。

そんな時に番組を買う側にも、意思決定の場にフェミニストの女性が一人でも二人でもいるとか、あるいはフェミニスト的な発想をもった男性がいたら違うと思うんです。「男の人が炊飯器の蓋をあけたって、もう、人はおかしいと言わないよ」と言える人がいればいいんですけど、言える人がいなければ、また従来の広告、そして従来の番組になってしまう。

実は、さっきのフェミニズムが女の足を引っ張ってきた、と言った人が、あたしたちの番組づくりを始めたら、さっそくその壁にぶち当たったんです。ですからこの四月からその番組ができるかどうか非常に危ない状況です。でも私がとてもうれいのは、今までフェミニズムとかに関係なく企業の中で働いてきた人たち、そういう人たちが、私の話をきいて、あれなら私にもわか

る。ああいうのならやってみようか、と言ってくれたことです。わかるどころか、今までさんざん企業の中で苦勞してきたその苦勞は、結局そういうことだったのか、と言い始めた。そういうことがわかりはじめたらその人たちの力はすごいです。さんざん企業の中で鍛えた力ですからね。実力があるんですね。これまでだってその人たちは番組を作ってきたんだけど、それはある意味ではスポンサーの言いなりだったし、女の立場というより男性と共通の立場に立てる、いわゆるヒューマニズムの立場からのドキュメンタリーなんかだったわけで、それはそれで素晴らしいわけですが、今度はそれに加えて、じゃ思いきって、今度は、女の視点を入れたものも作ってみようか、という動きが始めた、そういうことです（拍手）。

いやがらせは後を絶たないけれど……

二年間ですけど、私は私で、与えられた場でやってきました。その結果は時間が経たなければわからないことですけど、少なくとも『TVタックル』だって、はじめは、あんなマッチョな番組と言われながら、それでもだんだん女の人たちが見てくれるようになった。「いつも見てますよ」と道端でニコニコしながら声をかけてくれる人たちがいる。でも、その裏がわで半分以上が、「生意気だ」とか、「男の人を前にしてちょっと言い過ぎですよ」とか言いますから、半分以上の人が喜んで見ていないってことですよね（笑）。『はんさむウーマン』に出たとき、しゃべったのはたったの五分でしたが、思いきり言いたいことを言いはじめたら、すぐファックスが入り出したそうで、「あの生意気な女、すぐおろせ。日本がこんなに豊かになったのはオレたち男が

働いてきたからだ」って。

七〇%ちょっとが、怒った中年男性からのファックスでした。あとの一五%が中高年女性で、「良妻賢母こそ女の生き方です、あなたの考えは間違っています」（笑）、というもの。あとの一五%が「女の人が少しでもそういうことを言ってくれと息がつかまず、陰ながら応援しています」というものでした。

翌日、群馬に行くとき、棚の上にオーバーを置いたのに、ないんですよ、降りる時に。ああこれは、七〇%の人だな（笑）、と思って鉄道公安室に電話したら、捜しておく、ということで、翌日電話がかかってきました。ベンチに捨ててあった、というんですね（笑）。本当に私の話を聞いた人がしたのかどうかわかりませんよ、だけでもそんなふうに思うくらい、女が本音を言っていると怒る人たちがいるんだな、とそのとき思いました。

### 視聴者が発言すれば、テレビは変わる

ですけどテレビを作っているのも一人の人間です。見るのも一人の人間です。そして企業が一番こわいのは評判です。テレビであれば視聴率です。『タックル』では、私が女のことを言っても視聴率は上がるけど下がらないということがわかった。それからまたどんどん投書がきます。賛否両論。なかにはこういう番組をやってくれとか、田嶋陽子はいつでも孤軍奮闘でかわいそうだから、人を増やせとか、いろんなのが来る。テレビ局はけっこうそういう要望と反対のことをしたりもするらしいですね（笑）。それでも、はじめからあの番組をこらんの方はおわかりかと

思いますが、番組が少しずつ変わってきた。それは、番組を作る人の態度が変わってきたからなんです。以前に比べて女のことをとにかく取りあげるようになった。NHKの『英語会話Ⅱ』に出ていたときテレビ局の人にきいた話で、投書一通が一人だということですから、むしろは投書に対しては無関心ではありませんよね。

企業だって評判が命ですから、投書があれば消費者の要望に合わせて製品を変えますよね。番組づくりも同じことです。番組を作っている人たちは視聴率が命ですから、視聴者はもっと意見を言っていくべきです。そうすればもっと活気のある番組が生まれるんじゃないか。

はじめのころ私がたけしさんをやっつけたときに、伝え聞いた話ですが、ディレクターの一人が「あの女は誰のテレビに出てると思ってるんだ」と言ったそうです。すごくショックでした。そうか、でも、わたしやあ何もあんなたちに食わしてもらってんじゃないよ、ってハラをくって持論を変えませんでした。そのうち私を応援してくれる投書がきたりファックスがきたりして、そしたら「ぼくたちは先生の味方だよ」(笑)って。その後ディレクターが変わりました。それからこの四月、また、ディレクターが変わりました。そしたら、そのディレクターたちいわく、「先生、バンバン言っして下さい(笑)、バンバン」って(爆笑と拍手)。

たった一年半のこの間の変化は何でしょう。それはやっぱり世の中がそういうふうに動いているということですね。一年半前だったら私の言っていることに、ほとんどの人が「何さ!」と反発したかもしれないのだけど、やっぱり時代が動いている。みんなの気持ちが熟しはじめています。少しずつ考えるゆとりがでてきて、そしてへあへあみたいは何十年も活動している人たちの力

が浸透してきている。いろんな女の人たちの運動とか重層的に効果を出してきて、世間全体が、ここまでできている。さっきの企業の中の女の人たちも、自分だけが苦しいんじゃない、こういう構造の中で女たちみんなが苦しんでいる、じゃ頑張ってみようか、という、そういう時代の流れみたいなものがあるのをつくづく感じるんですね。

### 「平場主義」の呪縛から自由になろう

最後に私が言いたいこと。私などがちょっと前までよく耳にしたフェミニズムは、やれ、企業は悪だ、マスコミは悪だ、資本主義は悪だ、というようなフェミニズムだったんですね。日本のフェミニズムには、男社会から受け継いだこうした左翼的なメンタリテイが濃厚です。でも、なんだか、こういうフェミニズムって、もう窮屈じゃありませんか。

私は、八〇年代後半に日本女性学会の代表幹事だったんですけど、そのころ、こういうフェミニズムを「冠つきフェミニズム」と呼んで批判しました。でも、学会のなかでも、ほとんどの人がこういうフェミニズムを信奉してましたから、反感を買って無視されました。結局、いま女を分断させてはいけなとかなんとか、わけのわかんない意見が主流で、キチンとした議論なんかないまま終わりました。でも、こうして世の中の流れを見ると、自分たちを活かしてくれるフェミニズムってどういうフェミニズムか、だんだん明らかになってきたんじゃないですか。

私は、この「冠つきフェミニズム」のことを、一方では「良妻賢母型フェミニズム」とも呼んでるんです。で、日本でフェミニズムがなかなか浸透しなかったのは、この良妻賢母型フェミニ



ズムのせいなんです。このフェミニズムは、相変わらず、企業は悪だの、マスコミは悪だの、ステレオタイプの発想から抜け出せないまま、むかし歌った歌ばかり歌ってる。

男たちは結構そこは通過しちゃったんですね。なのに、女だけはいつまでも男の思想の後継者になって、良妻賢母やりながらそれを生きて、結局は男社会に仕えてしまってる。男たちは、そんなフェミニズム、怖くないですよ、いくら企業が悪だ、資本主義が悪だ、なんてさわりでも、社会の方がとくに先に行っちゃってるんだし。怖いのはパンツ洗えと言われること、あるいは女房に家出されること。でも女たちも食えなくなるのが怖くて、それが言えなかったんじゃないですか。

良妻賢母って何か。これは『愛という名の支配』という本にも書いたんですけど、なぜ男が自分たちの支配する奴隷船に女を連れてきたかという、女が子どもを産めたからなんです。男にとって女を必要とするのはそこだけ。あとはみんな男同士で間に合ってしまう。でも女には、子産みのついでに家事労働させてセックスの相手までさせればもっと便利。つまり結婚制度ってのは、奴隷船の船底の女を一人ずつ男に縛りつけておく制度。養う代わりの条件が良妻賢母。良き妻、良き母。「私」があつては困るんですよ。実際「私」があつたら、奴隷船にはいられないですからね。女たちは生き残るためには良妻賢母になるしかなかった。だけど、「私」が抑圧されてる人は、自分の人生を生きられないから、生きてるひと見ると何とか自分のレベルに引きずり降ろそうとする。だから女は女の悪口いうしかない。もうウルサイ、ウルサイ。ホント良妻賢母をやっている人はみんな正義の味方いい人です。身銭切っていないから、簡単に正義がとなえられるんだよね。

平場主義なんて言い出して、話をするときにも演台がなかったりして。聞くほうは聞きにくい、見にくいというのに。また演台があるのにわざわざ壇上から降りて話をする人もいると聞く。平等になるって、そういうことじゃないんですか。もうそろそろそういう子どもだましの偽善はよしたほうがいい。また、お金がなければ善みtain、社会的地位がなければ清廉潔白みtainな、そういう偽善もよしたほうがいい。均等法が女を分断するって言う人がいる。たしかにそういう面はあるけど、でも、女に選択のチャンス差し出してるだけでもいい。

女を分断するというなら、結婚制度こそ、女の分断の原点なのに、だれもキッチンと制度としての結婚は批判しようとしらない。もうそんな役割分担反対なんて古いわよ。女、女なんて言っていないで、大事なものはPKOよ、平和よ、エコロジーよ、って。だけど女は奴隷船の下にいて、甲板の上になくて、ものごとを決定する機関にいないで、なんで戦争が止められるの。やっぱり女の人は、一人でも二人でも数多く甲板の上に出ていって、指導性が発揮できる状況になったほうがいいんじゃないの。

平場主義なんて言っていると、甲板の下の方は、終生奴隷のまんまだよ。女はすぐ、「私、能力ないから」なんて言って逃げる。さすが男はそんな甘ったれたこと言わないよ。自分で自分のパンちゃんと稼いでるじゃない。能力があるなしを自分で決めるなんておこがましいよ。自分で勝手に決めつけないで、ちゃんと働いて、自分を試して、なんども聞いって、自己発見して、他人にも助けてもらって、甲板の上に出るしかないじゃない。そこで、ふつうに、社会の一員としてちゃんと働いて、ちゃんと税金払って、市民になって、はじめて発言が重みを持つんですよ。そうなれば、うるさいオバサンの繰り言で終わらないんじゃないかな。

良妻賢母型フェミニズムって、「私」なしのフェミニズムだから、偉そうな思想にすぐ飛びついてすぐ飲み込まれちゃう。これまでフェミニズムに関心のある人は、良妻賢母型で優等生タイプの人が多かったから、エライ人の言うとおりに、杓子定規にフェミニズムを生きてしまう人が多かった。私をいじめたのは、そういう良妻賢母型フェミニズムを信奉する良妻賢母タイプのフェミニストたちなんだよね。

フェミニズムなんて生きちゃダメなんだよ。自分を生きるにあたってフェミニズムを利用すること。優等生にかぎってこういう良妻賢母型フェミニズムを生きちゃってる。そしてその生半かなフェミニズム思想にがんじがらめになって、窮屈している。窮屈なら窮屈してみとめればいいのに、それさえしないのが、自分なしフェミニズム。結局は女らしさを生きていたときと同じで、小さく小さくアリさんになっちゃってる。完璧主義で、人のやることにいちやもんばかりつけて、そんなんじやまた連赤事件だよ。平場主義なんて持ち出したのも、そういう古い体質の補正のもりだったんだろうけど、そういうインチキはもうダメ。一般の人たちってとても敏感だから、そういう日本型発展途上のフェミニズムの体質をイヤがって近づいてこなかった。みんならしくなりたくてフェミニズムに関心あるのに、飛んで火に入る夏の虫、じゃしょうがないものね。私は、もうそろそろ個人を大事にした、イデオロギーに寄生しない、自立したフェミニズムを生きてもいいころだと思う。ヘンな平場主義なんて、やめちゃおうよ、ねッ！（拍手）

時間がきちゃった。終わります。（大拍手）

（割れるような拍手の中、田嶋さん退場）

重原 それでは続いて今日の「アンビリ」の一つ、まのあけみさんをご紹介します。いま名古屋を中心に東海地方で爆発的な人気のシンガーソングライター。主婦の気持ちを心の底から歌って下します。

まのあけみさん 名古屋の東隣、日新町というところに住んでいます。今度東京で初めてリサیتالをしますので、二十周年に歌わせて頂いてもいいですか？ ということで参りました。田嶋先生のパンチのあるお話の後で歌わせて頂くのは気がひけるのですけど聞いてください。

私の夫は、留守番もしますし、留守番しながらパンツも洗ってくれますが、主婦には、いろいろな問題がありますね。じゃ始めます。

#### 〈布団〉

1 ギターが ひける

布団が しける

ごはんが たける

手紙が かける

サラ金 さける

浮気も さける

私のわがまま きける

一度っきりの人生 男と女  
どうせ 暮らすんなら

二人が 気分よく

あなたに めぐりあえて

私 最高！

まの あけみさん



#### 〈パートナー〉

1. いつかはきつと こんな日が来ると

心のどこかで感じていた

せわしい日々の 流れの中で

小さな幸せ感じていた

幼い子どもたちとの生活は

大変だけど満ち足りていた

子どもだった私を  
母親らしくしてくれた

2.

洗たく できる  
子どもと 遊べる

木登り できる

虫とり できる

けん玉 できる

手品も できる

子どもに宿題やさしく教える

一度っきりの人生 男と女

どうせ 暮らすんなら

二人が 気分よく

あなたに めぐりあえて

私 最高!

3.

お酒に 逃げない  
仕事にも 逃げない

テレビに 逃げない

実家に 逃げない

世間に 逃げない

お金に 逃げない

私のグチにも 逃げない

一度っきりの人生 男と女

どうせ 暮らすんなら

二人が 気分よく

あなたに めぐりあえて

私 最高!

\* だけど

あなたの姿が 見えない

あなたの心が 分らない

あなたは何を 見つめているの

あなたにとって 私は何ですか

2.

あれも話したいの 聞いてほしい

あなたは憂鬱な顔をするのね

疲れているのね 分かっているけど

テレビの野球で笑顔を見せる

ポットにさした草花も

季節で替えたカーテンも

工夫をこらした料理にも

あなたは無表情

だから

\* くり返し

3.

ささいな気持ちの すれ違いと

自分で自分をなだめてみても

何かが違う 寄りそいあえない

愛しい結ばれたはずなのに

結婚って何ですか

夫婦って何だろう

二人で生きる

手こたえが欲しいのに

だけど

\* くり返し

ライライライラ……



あこらボトム会議

# マスコミの限界・ミディコミの限界

下村満子  
増田れい子

VS

石原豊子  
奥川 睦  
斎藤千代  
福田光子

司会 しま ようこ

しま・ようこさん 第二部の司会をさせていただきます しま・ようこです。

今日のテーマは「マスコミの限界／ミディコミの限界」ですが、「限界」を視つめるなかで、「無限」を語りたいと思っています。

では、壇上の方々のプロフィールはプログラムにまかせて、さっそくお話を伺いましょう。最初に下村さん、増田さん、斎藤さんのお話。その後、私たち壇上の者たちで整理を兼ねて簡単に話した後、会場の方もまじえた討論に入りたいと思います。では下村満子さん、どうぞ。



## 巨きいゆえの哀しみ——下村満子さん



こんにちは。最初から弁解で申しわけないんですけど、先週から今週の初めにかけて東南アジアを四か国、一日一回で四回連続講演ということで、ジャカルタ、シンガポール、クアラルンプール、バンコクと強行軍でやってきて、声が出なくなっていました。今ここに梅干飴をもってきます（笑）。さっき田嶋陽子さんの元気なお話を聞いていて、ああ、思ったのですが、私の話はあまり元氣の出ない中身の話になりそうなんです。ね。

「マスコミ」といいますと、みなさんはとてもない巨大な力を持った「集団」ってよくいわれますね。だけどその中にいる人間にとっては、そういう話を聞くとちょうど「経済大国日本」といわれて、えっ誰の話？ 私のこと？ というのと同じで、中にいる人間にとっ

では誰の話？　っていうくらい、みなさまが外から考えていらっしやるのとは様子が違います。特に朝日新聞とか毎日新聞とか四大新聞などのプリントメディア、或はNHKなどのテレビ、そういうメディアの中にいる人間は一体誰のことかと思うくらい、内部の人間であるが故の限界、自由のなさ、非常にコントロールされた状況、さきほど田嶋さんが「個」が大事なんだとおっしゃった、その「個」になれないフラストレーションを感じているんですよ。具体的にどういふことか話し出すと長くなるのでかいつまんでお話ししますと、七月末までたまたま私は、マスコミでもない、ミニコミでもない、ミディアムの雑誌、マイナーでもないメジャーでもないへんな雑誌の編集長をやっておりましたが、残念ながら朝日新聞という大マスコミの本体の危機ゆえに子どもが潰されたのです。そういう状況のなかで、まさにマスコミの虚弱さというのか、マスメディアといいながら、その脆さのようなものを目のあたりにしたわけです。

そして二年半ぶりにまた編集委員という立場で朝日新聞に戻ったんですね。新聞には十年くらいいて分かっていたつもりですが、帰ってみるとさらに状況が悪化しているんです。私はマスメディアの中でこのまま仕事をしていくことに意義があるのか、という悩みに実はぶつかっているくらい、考えさせられています。一つはマスであるが故の、つまり八百万部という部数、これによる手枷足枷。つまり部数が多いから影響力が大きいというように思いますけど、逆に多いから一体私は誰に向かってメッセージを発しているのか書いているのかわからなくなる。朝日新聞のトップ層は、読者は小学生から八十歳のおじいちゃんおばあちゃんまで、職業はもの書きからタクシードライバー、会社の社長、総理大臣、と読者層がある、とかっこいいことを言いますけど実際そんな記事を書くことが可能でしょうか。パブリックオピニオン、世論なんてものが本当に



あるのでしょうか、「平均値」なんてものが。個性豊かな、それぞれ違う考え方をもった個人の集団であって、数が多くなればなるほど、「平均値」というとても抽象的な、顔のよく見えないものに向かって毎日一生懸命書く。要するに世論というのは誰でもない、ということです。

ミニコミの強さというのは、はっきり読む人の顔を対象化できる、顔がわりとクリアに見えてる。誰に向かって書いているのがわかるのがミニコミだと思うんですよ。しかも手ごたえがある（手ごたえというのは、先程田嶋さんがおっしゃった一種の投書マニア、そういうことを生きがいに行っている人からもへんてこな手紙がきたりしますが）。

マスコミのそうした空しさみたいなのがかって手枷足枷になっているということなんです。したがって過激なことを書かない。そこそこの平均値になると、インパクトのないままア

#### あこらボトム会議―マスコミの限界／ミニコミの限界―

一九七二年二月、日本初のフェミニズム雑誌として誕生した『あこら』は、創刊号（A5 九六ページ）から発行部数二千部。あえてミニコミと名乗らず、ミニコミ、ミリコミと自称しました。独語的なミニコミよりは、社会的発言としての「ミニディコミ」を、そして、一年一ミリでも動く「ミリコミ」でありたいと……と自主独立、絶望的な経済難と、あらゆる非難中傷の中の二十年、何度も廃刊を思いながらも、今のマスメディアにはないミニメディアとしての思い入れの深さで何とか続けてきたように思います。

今日はマスメディアで大活躍の代表的女性ジャーナリスト、下村満子・増田れい子さんを迎えて、それぞれの役割と問題点を語り合いながら、マスメディアとミニメディアがどのように連帯して女の流れを進めていけるかを語り合いたいと願っています。

サミット（頂点）会議はやりの今、ボトム（底辺）会議と名づけました。会場の関係で問題提起者は壇上に座りますが、ご意見・ご質問、皆様もどしどし壇上に上がって、活発にご発言ください。

のことになる。新聞がおもしろくない、といわれるのはそういうことだと思う。ますますそういうことになりつつある。

もう一つは新聞のパターン化です。先の一点と関連しますが、ノウハウの点で。新聞の文章をお読みになつてわかると思いますが、ほんとにつまらない文章ですね。血も涙もない、というか、要するに形式的な文章になつてゐる。ニュース記事といつたら全部パターン化されていて、事件の名前、人の名前を入れ換えさえすればいい、と。しかも儀式化されている。生きたことばというのが新聞から消えつつあると思うのですが、それはどうしてかという、やっぱり八百万読者から何も言われないためには、無機質にならざるをえない。というより、それが一番安易な方法なんです。

若手記者は入社した時には張り切りますから、いい記事を書こうとワッツとかけずり回つて書くわけですよ。上の人も、お前の目で見て足で稼いで、お前の感じたことを、なんて調子いいこと言つておだてるわけです。その氣になつて書いて持つて行くとメタメタに直されて、これはお前個人の目が出過ぎてゐる、もっと客観的でなければいけない、とか、新聞の文章になつていない、とか言つて、つまらない文章に直されて、これがプロフェッショナルの書く文章なんだ、と直されていく。

若い記者が少しでもおもしろい表現、自分らしい新しいことばを使つたりすると直されていく。そうすると段々萎縮してしまつて、はじめからデスク好みの原稿を出すようになる。それがシステム化してしまふ。

私たちのように編集委員とか一部の署名原稿を書く人間は、一応署名ですから、責任を持って書くことになっています。今回週一回〈週間後記〉のコラム欄を担当させられて、「そこはもう好きなことを書いて下さい、新聞に個性がなくなつてつまらないから、私、私、を全面に出して書いてください」とおだてられてやってみたんです。ところが、例えば《ぶっ飛んだ》と書いたんです。《驚きました》、ではないんですね。そしたら、《驚かされた》に直される(笑)。朝日新聞があんなことばを使って、と言ってくる人がいるのを恐れて。そんな投書は必ずくるんですね。いいじゃないか下村さん、この驚きとショックはこう表現するしかないんだ、と言いつ返すだけの力は、デスクやトップにないんですね。

うちの新聞社での最近の傾向は、極力キャンペーンと思われるようなことはやらない、朝日新聞が何か特定の方向に向かつてのキャンペーンをしている、或は特定のグループを支援している、或は特定の考え方を全面に出していると誤解されるようなキャンペーンはいいしないことだと思っています。

どういふことかと言いますと、PKOにしても、あらゆることをやりますよ、当然。一応形の上からは。Aさんの意見、Bさんの意見、Cさんの意見、とまんべんなく取り上げている。賛成意見も反対意見も。それは一見、正しいやり方のように思える。だけどそうしなければいけない時と、断固新聞社としてこれはおかしい、と言うべき時があるわけですね。

佐川急便事件なんかみても、新聞社が全体的に腰が引けて、読者のパワーというか、市民とか、それこそ世論というかな、そういう人たちに押されてここまでできたという気がしますね。リ

クルートの時と大分違うんです。そういう、キャンペーンと思われるようなことをしてはいけない、朝日が反権力だと思われるようなことをしてはいけない、極力バランスをとってあらゆる人の意見を取り上げて、万遍なく出していく、と。これは一見正しいようにでてっぱりおかしいんじゃないか。それは単なるニューズレターですね。情報だけなら。やっぱり情報に強弱をつける、その価値判断が正しいかどうか、という議論がどんどん行われるべきだと思うんですが、そのタネさえ出さない。撒かない。そのために新聞社全体が非常に澁んでいるんですよ。無力感、無気力感。

そして典型的な管理主義ですね。失点主義。間違えると謝罪文を取られたり、訂正記事を出しますね。それは私はいいいことだと思いますが、「訂正記事を出すような記事を書いた」とレッテルを貼られるのがいやで、極力みんな無難な記事を書く。

思ったことを言ったら反対意見がくる。当たり前なんですよ、マスコミというのは。とんがったり、出っぱったりしてそこでいろんな意見を出し合う、それがジャーナリズムなんですよ。ニューズレターじゃないということをお忘れている。

それは一つには読者の意識が高くなって、人権問題、あるいは名誉毀損とかで訴えられることが多くなった。前はそのまま通っていたことが最近では訴訟問題とかが多くなった。そのためにビビっちゃって、なるべくそういうことにならないために強弱のつかない記事を書く、ということになる。

その最悪のケースが政治危機問題です。今度のスキャンダル、腐敗の問題に関しても、政治家がそういうマスコミの弱体化を敏感に感じとってそこをついてくる。何かというと人権とか名誉

毀損で訴訟を起こす。スキヤンダルを取り上げると政治家から内容証明付きの郵便が編集長である私宛にきたこと、何回もありますよ。それをこわがっていたら、何にもできないんです。もちろん、取材がいかげんであつてはいけないのは当然ですが。

スキヤンダルの取材というのは本当に危なくて、間違えたら名誉毀損になるけど、若い記者が必死になって取材してギリギリのところまで書く、そういう時にバックアップしてあげないというがない。そうしなければ彼らは前に進めない。ところがそこまで腰をすえるケースが少ないんですよ。

もう一つ、アメリカと日本の決定的なシステムの違いは、書いたことが事実かどうかかわからないのに名誉毀損で訴えられた場合に、日本の場合、それが正しいということをこちら側（書いた側）が立証しなければならない。そうしますとね、……に電話しました、とか、お金のやりとりが行われた現場を見ない限り周りの人の証言だけじゃだめなんです。或いは電話の盗聴でもない限り。百分の証明は難しいんです。ところがアメリカは逆で、疑惑をもたれた人はその疑惑がウソだということを政治家自身が立証しなければいけない。日本は政治家が立証しなくてもいいんですよ。そういう点でも日本の法律の弱さもあるんです。そういうことでトータルに私はマスコミの危機だと思っています。

じゃ、どうするかということなんです、さっき田嶋さんがおっしゃっていましたが、新聞社も読者とか世間とかまわりとか、外の反応が怖いわけで、とても神経質になる。

したがっておかしいじゃないかということ、現場の人にでなく、トップ、編集局長レベルに向かってジャンジャン手紙攻勢をかける。それも記事が間違っていると、今日の記事がフェミ

ニズムに反して女性蔑視であるとかいう投書も大切ですが、ひとつひとつ取り上げて投書するとそれはそれだけで終わってしまうので、枠を広くして、新聞社のスタンスとか論調に対して、腰が引けてるじゃないか、とか、大所高所のところで書くとか意外と脆いんですよ。みなさんが思う以上にそういう投書に一喜一憂している。内部は敏感です。大いにそういう具体的な形のキャンペーンをしていたきたい。私も頑張りますが、外からの支援を期待しています。とりあえずここまでにして、後で続きをさせていただきます。

しかし本当に危機です。このままですと、新聞はニュースレターになります。支えるのは読者で、読者なしの新聞社はあり得ません。マスコミュニケーションですから「マス」の人たちの支持をえないで新聞は成り立たない。マスの人たちが怒ったら新聞社は怖いわけです。マスコミなんてとても太刀打ちできない、なんていうのはとんでもない話で、内部にいる人間の方がむしろ弱いんですよ。自分の記事を一生懸命書くことができて、新聞全体を握っているわけではないですね。我々は何千人という記者の一人として、紙面のほんの一角を担当しているケースが多くて、編集局長とか、編集担当重役とか社長にならない限りそこは掌握できない。しかしへんな話なんです。日本の会社の社長が全権をもっていないのと同じように、日本の新聞社の社長も現場からのコンセンサスで動く部分が意外と大きい。だから可もなく不可もない、なるべく文句を言わない無難な新聞、優等生の新聞になる。だからおもしろくない。インパクトが弱くなる。幕の内弁当みたいに細かく区切ったチマチマした新聞になっていく。思い切って一面全部ドーンと使って、というのがない。

では、このくらいにしまして。（拍手）

ミニコミを読むと世の中が見える——増田れい子さん



増田です。今、下村さんのお話を聞いていて、おや、いつの間に朝日新聞が毎日新聞になったんだな（笑）と。毎日新聞も今大変な不況に喘いでおりまして、私はもう卒業して退職しましたし、退職金もいただけるものはいただき尽くしまして（笑）、何の関係もないんですが、だからといってほっておくわけにもいかないと思って。大事なものの一つとして。新聞が何をどう書くかによって世の中変わる筈ですから、とても大事に思っているわけです。

毎日新聞は今四百万部を切ったんですね。朝日は八百万部、読売は九百万部だと言っているようですが。四百万部を切ったことは大変なことで、『あごろ』が二千部だそうですから、四百万部というのがいかに大きいかがわかるのですが、大変大変ということではこれから七百人首きりをする、そこまできています。かつては首をきるときは、女性とか、年をとって役職にならないとか、体が丈夫でない人とか、それから妻が働いている人とか——男の人の場合は（笑）ね。私の夫などそういう意味で対象になりやすかったのです。今は違いますね。若い人がいてくれないと感性が違ふ。デスク以上になるとペンを持たないでうろろ右往左往していて人事のことばかり一生懸命で（笑）本当のところ紙面作りには直接携わらないんですよ。ですから今度首きりの対象になるのは、若い人ではなく、何でもない人、役職についているけどそれほど主要でない人（笑）で、そういう人が何となく首を洗っているような感じがするんです。ですから違った意

味で毎日新聞も萎縮している真っ最中です。でもまあ四百万部を切ると少しは度胸が出てくるみたいで（笑）、クオリティペーパーに変わらなければいけない、と暗中模索はしていますけど、いくら題字の色を変えてみてよね、どうなのかな（笑）というのが意地悪な卒業生の見方です。

私は、朝第一番に毎日新聞が何をどのように報道しているかというのを点検しまして、次に朝日はどうかと見まして、それからもう一つ赤旗は何を言っとるのかというのを見まして、それぞれ三十分くらいずつで一時間半。それから切り抜きをします。今日切り抜いたのはやっぱり朝日が一番多いんですね。今日も「右翼の研究」を切り抜きました。切っても切れない日本の政治と暴力団、右翼の関係、極めて明快な記事です。

そんなことをしているんですけども、ある方の研究によりますと、一九八五年の時点で、平日に普通の新聞を読んでいる人は五一％なんです。ここにいるみなさんはどうでしょう。新聞も高いですし、読む時間もない。全体でみると大変な量の新聞が出ている。テレビもものすごい量で、そんな時代にみんなが新聞に目をおしている暇がない、という不思議な時代なんです。読まれないからこそあんなに出ているんじゃないか（笑）、もっと読まれたらあんなに出ないと思うから、読まれていない、ということが経営を支えているのではないか（笑）という気がするんです。

今日はその後何を読みましたかといいますと、『あごろ』の最新号を改めて読みまして、宇都宮徳馬さんのところで出している『軍縮』、今回ののはすごくいいです。是非読んでいただきたいと思いますが、それを読みまして、あと『草の実』を見たりして。



通常私はミニコミといわれているものを非常に熱心に読むことにしております。まさに新聞だけでは世の中のことにはさっぱりわかりません。昨日のことはある程度わかるわけですね。テレビと殆ど同じことが書かれております。それに、社説とか「記者の目」とかが加わっている程度です。だからいかにみんなが新聞を読まないかは当然だなあと思ったりするのですが、ミニコミを私は尊敬よりは実用的な意味で評価しています。考えたり、書いたりしますときに一番役に立つ。古くならないというのがまたいいですね。新聞はすぐ古くなりますから。

今のマスコミが一番得意とするところは、貴花田とりえちゃんの結婚とかの報道です。PKOがどうなっていると、アメリカの世界戦略が今どのように変化しているのか、というような基礎的な情報は実はミニコミにバッチリ載っているわけです。それから女性たちが今何を熾烈に望んでいるか、とか、どう運動しているか、新しい思想をみんなでどのように編み出していくかは、『あごろ』を見ればわかるという具合で、本当の現実はずいぶんはなかなか映らない仕掛けになっている。なぜだろうかという点、おっしゃるように、あまりにもヘマスVになり過ぎた。それから新聞の歴史をみると、明治の頃からですけど、政府の批判はやってはならない、というきまりから始まった。だから戦争中はまさに大本営発表だけを載せる器となったわけです。そういう新聞の歴史というのは日本の場合には非常に暗いんですね。政府の擁護はいいけど批判はだめだよ、と。だから日本に民主主義が育たなかったのはそういう明治政府の方針もあるし、またそれを受け入れてしまった新聞の側にもある。もちろんいろいろ闘った新聞もありますけど大筋では政治批判はやらないほうがいい、やるな、と。この体制が今も、敗戦を過ぎましても日本のもうひとつ大きな政治的風土といえますか、私たちが作り上げてきてしまった「横並び」「なァ

なア」「お上大事」「自分は後」と。「私」の意味なんてのは田嶋さんがいうように、ようやくと女性気がついたんですね。

戦争中のお上大事が戦後も居座ったまま。そういう体質がマスコミの中にも拭いきれずにあるんですね。マスコミに入ってくる人は殆どエリートですし、政治部だとか経済部だとか社会部だとかに配属されて、一般の人とは違うんだ、というエリート意識をもつ。それでいてさっき下村さんがおっしゃったように、書いたものがメタメタにやられるという鞭も加えられる。何ていうんですか、自分が一体何なのか考える暇もないくらいに、バタバタやっている。そういう風土で、そういう人たちが作っていく新聞というのには、どうしても、「読者は大事だ」というのはどこにあるのかもしれないけど、日常はそんなことは言っていられない、という状況がある。今のニュースが中心だといえど、我を忘れてただただそれに集中していくというのが、それぞれのメタリテイだと思うんですね。

あつという間に私も三十数年過ぎまして、今どんな気持ちでいるかといいますが、とてもせいせいたい気持ちなんです。そして『あごろ』にもものを書かせていただきますが、私はこれから自分が書くものはミニコミにしようと思っているわけです。いま、取りかかっているものを活字になされば、と言って下さったのはただひとつ『あごろ』ですよ。だから私はへあごろに寄り添ってこれからの自分の人生を生きて行きたい、と思ってるんですね。たぶんこれは間違いない、と思ってるんですよ（拍手）。

本当の意味で日本のマスコミが、マス、大衆、市民、ごく普通に生きている人々の側に立った

ということはまだかつてない、ということですね。しかし、ミニコミはその場から作り上げてきたメディア、私たちのメディアなんです。それをもっともっとしっかりしたものにしていく、そしてあちらこちらにさまざまなミニコミを育て上げていくのが私たちの仕事なんじゃないだろうか、と思っています。

もちろん私も毎日新聞の記者であった時には、それはそれで悩み苦しみ、時には敗れる、その繰り返しでありましたけど、考えてみますと、私のやってきたことは、毎日新聞というマスコミの中のミニコミの部分を、例えば「女のしんぶん」というようなことでやってきたんだなあ、と、マスコミの中でミニコミの部分を担当した、ですからあまり誰も文句を言わなかった、ということもあるんですけど。

「女のしんぶん」も百号で終わりました、私の年齢も六十何歳になったもんですからもう時間切れということ以外に出たんですが、「女のしんぶん」がなくなったのは多少寂しいんですけど、もっと時代が転換していけば、また新しい「女のしんぶん」が、もっともっと女性のことを考えたものが、生まれると思います。

この間、『サンデー毎日』の広告を見ましたが、これからは女性をターゲットにした週刊誌になり変わるんだ、と書いてありまして、目次を見たら、全然男性誌向きで（笑）おやおやと思っただけです。マスコミは女の人を考えているのか、それに合わせて「女性さままま」にならないと四百万部も維持できないな、と……。かなり変わっていけそうな雰囲気も全くないわけではない、ということです。どうもありがとうございました。（拍手）

しまさん 皆さんあちこちでお二人に質問したいと思っていらっしやる気配が感じられるのですが、一応壇上の人がお話したうえで意見交換に入らせて頂きたいと思いますが、よろしいでしょうか。（拍手）。それでは斎藤さんどうぞ。

## マスメディアとは違うからこそ——斎藤千代さん



今マスメディアのピカピカのお二方からお話を伺って、たしかにマスコミとミニコミは違うなあ、と改めて思いました。『あごろ』は創刊号からA5九十六ページ二千部。敢えて、ミニコミならぬヘミディコミと称してるんですが、区分けをすれば、もちろんミニコミ。ほんとに決定的に違いますね。発行部数からして『あごろ』は一億分の一ぐらいと思っていたんですけど、いま計算したら四千万の一なんです、『朝日』の。だけど社会を動かすインパクトは、一億分の一。何をやっても、ごまめの歯ぎしりです。

それでもなぜ『あごろ』を始めたかといえば、女の情報というのは、本当に特定の、管理された情報しか流れていない。やっぱり私たち自身が動いて歩いてつかんだもの、それを集めて伝えることが大事なことでないかと考えたからです。

私は戦中派で、へあごろを始めた動機はまさに戦争なんです。あの戦争の中で国民全部が目も耳もふさがれて戦争が遂行された。その構造は当時は分からなかったんですけど、あの戦争がなぜはじまったのか、戦後調べれば調べられるほど、情報と深い関わり合いがあることが見えてき

ました。女の運動には、いろんな形があるんですけど、情報をテーマにやっているところはあまりないように見受けられて、その情報を集めたり送ったりすること、何よりも一人一人の女が発信者になることが大事じゃないか、と考えたわけです。マスメディアの情報の流れをみますと、常に川の流れのように、上流から下流に流れているわけですね。私たちは横から横に流れる情報でありたいと「志」だけは立ててきました。

お二人のお話にもありましたけども、マスメディアには整理された情報がある。しかし私は情報の中で重要なのはむしろノイズじゃないか、と。ノイズにこそ真実があるという気がするんです。マスメディアは、それをどうしてやらないのか。——はっきり言う、と、採算に合わないんですね。たとえば下村さんや増田さんのような方々から原稿を頂いて、それを編集するのなら、三日で出来上がります。でも、私たちの所に送られてくるのは、まさに玉石混交。じゃ石を除けばいいのかというと、それがそうではないんですね。チラシの裏にびっしり書かれたような読みにくい原稿。そういう中にピカーツと光る宝石がある。

たとえば高橋ますみさんが最初送って下さった原稿がそうでした。でも、光ったからといって、それがすぐ雑誌の原稿になる、というわけではありません。中には五十回くらい読み返しても意味がわからないものもある。それでも、何かあるぞ、あるぞ、と辛抱強く読むうちに、ハハンとやっとわかる。そういうものこそ、ピカピカのピカということが多いのです。でも、活字にはしにくい。それを私の文章でリライトするのなら、多分、十分もかからないでしょう。でも、その一見あいまいな部分にこめられている切々とした思いを、その人の文章で……と思うと、時には十時間かかることもあります。

ほかのグループの方に、「へあごろ」は原石を掘る仕事ね」と言われたことがあります。やっ  
と見つけた原石。そうして苦心して紙面になると、アツという間に大出版社にさらわれてしまう  
ことが多い（笑）。なんて割りに合わない仕事でしょう。でも、それでも「いいじゃない、一人  
でも二人でも羽ばたけば」と思うのは、多分、私たちミニメディアの人間は、見つける楽しみの  
ほうが大きいからでしょうね。それに、一人ひとりが「発信者」になることを理想としているか  
らだと思います。

「横から横へ」の意味は、「双方向の発信者、そして受信者」ということです。その媒体として、  
七七年から『あごろミニ』をつくり、拠点の持ち回り編集を続けてきました。女性とはかく受信  
者オンリーになりがちですが、自分が発信することによって、女の状況も伝わるようになる、と  
いうことが一つ。もう一つは、自分が発信者になったとき、「発信者」の意味が見えてくる、と  
いうことです。

形になった情報というのは、決して無色透明なものではなく、発信する人間の目、耳、感性に  
よって切り取られ操作されている。この怖さを体験することに意味がある、と考えたからです。  
現在も、まだ拠点の発信がすべて目的どおりの理想に達しているわけではありませんが、これだ  
け多くの人がつくり手の経験を重ねてきたのは、すばらしいことだったと思います。

十五周年記念の時の号を読み返してみると、私は引退すると言っているんですね（笑）。これ  
は、ほんとにそう願っていたんですが、残念なことに、ここにまだこうして座っています（笑）。  
お金もない名誉もないこの仕事。さて現実を引き継ぎの話が始まるとみんな逃げてしまう（笑）。  
実は私の仕事の九五％はお金つくり。これがミディコミのつらいところです。ミニコミなら、赤

字が出てまあそこそこですが、ミティコミとなると、やっぱり個人では背負いきれません。私も、編集者でもありライターでもあるわけで、自分にとって全く苦手な仕事にエネルギーの九五%を使い果たし、残る五%で編集したり書いたり……は、ほんとにつらい。これはマスメディアの皆さんには、多分想像もつかない苦しみです。

私たちは小回りがききますので、特ダネみたいなものにも割りに早くアクセスできる利点がありますが、それを風のような早さで原稿にしても、印刷までに一か月……（笑）。原稿が、翌日どころかその日のうちに活字になるマスメディアとは、とても勝負になりません。

そんなわけでお金がほしい！ その一念で、六月に厚かましくも日本ジャーナリスト会議の賞に応募してみたんです。『あごら』も二十年続いた、ということ。そしたら最終選考に残ったという連絡がありました。電話口で思わずバンザイ！ と言いましたら、「まだ決定ではありません」（笑）。さて、発表の日。審査委員長の新井直之さんが、わざわざ『あごら』の名をあげて、「これはたいへんユニークな雑誌ですが、いかんせん、出来、不出来が激しすぎる。それで賞には値しないということになりました」（笑）。ま、応募するのが厚かましいとは、よくよく承知していたのですけど、これで読者がふえないかなあと、空頼みしたのが、やっぱり無理でした。なまじ最終選考に残ったので、応募したことはバレちゃうし……（笑）。フェミニズムの立場で言えば、厚くなったり、薄くなったり、おもしろかったり、つまらなかったり、でもそこが『あごら』のいいところではないかと、私は内心思っていたんです。力のある拠点もあれば、まだピヨピヨも……。それぞれその等身大の『あごら』であるのが、ま、いいんじゃないか。読者の方は多分毎号、目を白黒させていらっしやるでしょうけど（笑）……なんて。

だけど、たしかに「賞」はムリでした(笑)。

それにしても生き延びるのは大変なことですね。下村さんの『朝日ジャーナル』のご苦勞もつぶさに見てきましたし、生き延びるのは、大小を問わず大変だと思います。ただ私たちにとってありがたいのは「親会社」なんていうものがなく、思いっきり言いたいことが言えることです。ま、その結果、お巡りさんが張り込みにいらしたこともありましたが(笑)。建物に爆弾が仕掛けられてるんじゃないかなんて本気で思うこともありましたが、「女は度胸」なんてカラ元氣で何とかやっています。初め、「つぶれるべき雑誌」と思って始めた『あごら』ですが、この頃は、マスメディアのジャーナリズムがあんまりひどいので、せめてミニメディアは……なんて、「つぶす」方向どころか、朝日がつぶれても毎日がつぶれても生き残る……などと意氣込んでいます。

内輪話を一つしますと、創刊号が出来たとき、うれしくてうれしくて、銀行のベンチの上に一つずつ置いて歩いたんです(笑)。週刊誌が置いてあるから、まあいいだろう……と(笑)。ところが、その銀行に親しい人がいまして、あとで大目玉。……二十年前、私も若かったですねえ(笑)。こうなったら、「銀行が置いてくれる雑誌」ではなくて、「銀行が絶対置かない雑誌」を目指します(拍手)。こんなカラ威張りをするのも、しょせんは己が力を知っているからです。マスメディアが何千トンものタンカーだとすると、ミニメディアは、せいぜい一人乗りのカヌー。でも、だから、入江の奥深くまで入って、民衆に密着した情報を集めることができます。こう言うミニメディアの生きた情報と、良心的なマスメディアがいい形で手を結べないものか……。田嶋さんがおっしゃったように、最近マスメディアの重要な位置に女性がどんどんついてますね。そういう女性たちをバックアップして、何とか世直しができないだろうかというのが、今の私の



気持ちです。日本はある意味で今チャンスだと思っんですよね。これだけ墮ちて、今ここで世直ししなかったら、もう日本どころか世界が……。私は湾岸戦争以来怒り狂っているんですけど、巨悪の構造ががっしり出来てしまった今、私たちの、か細い、心だけの運動で何ができるのか、今こそ、大企業に働く人も、個人でシコシコやっている人も、その垣を越えて手を結んでやるほかないと思います。まだ申し上げたいことは山ほどありますけど、ひとまずこれで。(拍手)

## 松山くらの規模の『あいら』を目指そう——奥川 睦さん



最終選考に残ったのはいいけれど、出来不出来があり過ぎて、というその不出来の部分は何冊か作らせてもらった、新参者の奥川です。松山から来ました。

私も斎藤さんと同じしっちゃんかめっちゃんかですから、逆にそのしっちゃんかめっちゃんかのところは田嶋(陽子)さんにも似てるなと思って、話が通じるような気が勝手にしてまして、しっかり対で話したら絶対嫌われない、というめちゃくちゃな自信をもっています。亭主は「そう思っていればいいわ」と言っんですが(笑)。でもなかなか、この女の病というのは、反省主義と完璧主義が抜けなくて、私も典型的な重症患者の一人ですから、その私がこう思える、というのは、すごい、と勝手に思っているんです。

会場の方にも沢山お話を聞きたいので、私の話は三点だけにしぼろうかと思っんです。

今私が住んでいる松山は人口が四十五万です。この辺で横這いかな、という気もするんですが、

これを越えると住みにくくなるかな。このくらいの規模だと、ある程度の音楽会や、イベントもやろうと思えばパツと思いつきでできるし、行政に働きかければ行政の堅さにもある程度溶けてもらえるかな、というようなところもあります。

この四十五万という人口は、マスメディアとミニコミの中間のミディコミという感じの場所に当たるかナと思います。ある程度ゲリラ的にイベントを組もうと思えば組めるし、あまり規模が小さいと不可能な行事も、そこそこやれる大きさではないかという気がします。例えば今のようにテレビばかりの時代に、そこから干された人たちが友達のなかにもいます。その人たちが「テレビほど管理されないし視聴率などにも翻弄されずに、自由にやりたいことがやれ、言いたいことが言える」って言うんです。マニアックになっても許されるから面白いし逆にやりがいがあるということじゃないでしょうか。

だから下村さんが朝日ジャーナルから久しぶりに新聞に戻って愕然としているというお話も、言いたいことが言えて勝手なことができるよ、という増田さんのマスコミの中のミニコミっぽい場『女のしんぶん』などのお話も、ここがへあごろゝという場で、へあごろゝに花を持たせてくれることばだとしても、すごくありがたいなあ、と。私、新参者で、斎藤さんに成り代わって、お礼をいうのはおこがましいのですが（笑）、そんな気がするのです。恐らく規模が大きくなり過ぎたときは、どこかで、もれるものがある、見えなくなるものがある、おもしろくなくなるものがある、顔が消える、というお二方の話がそっくりうなずけ、納得いったからだと思うんです。逆に我々ミニコミは、魅力ある顔造りにどれだけ力をそそぎ、努力できるか。小さいという場をどれだけ拡大できるか。読者無しでは、存在そのものが消滅してしまうわけですから。さきほ

ど斎藤さんが「横から横に」と言われましたけど、田嶋さんの話を持ち出すまでもなく、横から横へ平場でというのは、少しかっこ良すぎるという気がします。それよりは鯉の滝のぼりじゃないけれども、下から上へ時に反逆してもいいんじゃないか。そういう場所もほしいんですヨ。

松山に話をもどしますが、それでもその四十五万という規模は二年連続して日本一住み良い都市に選ばれているんです。

ただしこれも先ほどの下村さんの話じゃないんですけど、何が経済大国だ、というそれと同じ要素はあるんです。何も住み良い所ばかりではないんです。ただ年寄りには良いと言われてまして、道後温泉につかって、温泉気分で気がのほほんとしているから、顔がまんまるになって、苦労がない。台風も全然来こないから、沖縄みたいな台風銀座の人からすると、それだけでも申し訳ないな、としたりするような。住みよいことは確かに住みよいんです。だから松山の規模をへあごらも目指せないかというのが第一点です。でも、適性な規模というのはいつでもピシッと数や場所としてあるわけではない。大き過ぎるときには大き過ぎる欠点を考え、小さ過ぎるときにはその欠点をどう補うか考えるしかない、というのが実感ではあります。

もうひとつは、もう数年前になるんですが、一年間、亭主と子どもを置いてケンタッキーに行きました。向こうのハイスクール・ステューデントに日本文化を伝授することで行きました。もちろんそんな大層なことができるわけがない。向こうの女性運動などに行けるだけ顔を出したりしていましたが、やっぱり新聞に興味がありますから、『メッセンジャー・インクワイヤ』という新聞を隔から隔まで毎日読んでいたんです。

アメリカの新聞を見ますと日本と全くようすが違います。どんな記事も全部記者のネーム入り

です。部数はもちろん全然違います。私がいたオーエンスボローというところは人口がわずか五、六万です。それでもケンタッキーという南部の農業州では三番目に大きい市で、ルイビル・レキシントンに次ぐ数なんです。発行部数が二けた違うという事情があるにしても、全部署名記事です。日本もあれをしないから顔がなくなるんじゃないかと思うんです。記事の中にもう少しスピリットを入れたいと思えば署名を入れる。それしか個性の出しようがない。その工夫で、それを書いた人の顔がうっすらとでも浮かぶかな、と。

PTAにも長いことひっぱられて、広報新聞なんてのもやりました。たかがPTA新聞でも、この三十何名の調査広報部員のメンバーの顔が浮かぶ新聞にはしたいよね、気持ちとしては。だから「一人の百歩より百人の一步」なんてもっともらしいスローガンを掲げて。でも、それを一生懸命やるのはむずかしいですね。掛声どおりにはいかない。ミニコミのおもしろさを出すのも、新聞の顔、雑誌の個性みたいなものも、本音が吐ける、というのが基本的な良さだと思います。その利点は小さいからこそ最大限に發揮できる。この点にしかミニコミの活路はないだろうと痛感します。これが第二点です。

もう一つは、私の大好きな劇作家に別役実という人がいるんですが、その人の、ベケットをもじった「へいじめの構造」という話の中に、鹿川君という子が自殺しましたね、あの事件を扱ってドラマツルギーの話をしてるんです。その中の「へいじめの構造」の説明がユニークなんです。たとえば家庭の中でいいますと、父親と母親と子どもがいて、その三者のバランスがとれていれば家はスムーズにいく。お母さんは子どもに弱い、子どもはお父さんに弱いけど、お父さんはお母さんに弱い、というのが三者のバランス。お父さんだけが強くてあっちにもこっちにも強いという

のは、一見まとまりがいいように見えますけど、それはファシズムに近くて本当の意味のハーモナイズした安定ではないってことです。

「ジャンケン構造」と名付けていますが、三者が三様に誰かには勝ち、誰かには負けるという機能が作動していれば、何が起ころうとも修復可能のワク内で収まる。復原力が持てると言うんです。ジャンケン構造を今日の話題にあてはめてみると、三者というのは、顔が見えないマスを手にするマスコミと、ミディコミまたはミニコミ、それと読者ですよね。この三者が三すくみになるんじゃない、その読者がどちらにもかなりはつきりした自分の個性をもって参加してどんどん加わっていくということが、マスコミに対して力になるという話が下村さんからありました。力や意識のある読者が、マスコミだけじゃなくミニコミにもどんどん参画し、ミニコミを育ててくれるような関係になると、数量で勝るマスコミも安閑とはしておれない。そんな力と質をミニコミ・ミディコミも持ちたいものです。

カギをにぎるのは読者。でも一番大切にされているようで一番ないがしろにされているのも読者。我々一人一人もキッチンと自分の顔をもってマスコミともミニコミとも付き合っていきたいものです。正常なジャンケン構造のキーを握っているのは、やっぱり一人一人の読者であり、一人の書き手。特にへあごろんのような規模だったら、誰でも原稿を書いて参加できるという、これはいいことだと思いますので。私なんかでも編集をさせてもらったり、下手な記事を書かせてもらったりするくらいだから、もっとどんどん利用しませんか、というのを最後のメッセージとして言わせていただきます。（拍手）

女がすたる、と思つて十五年——石原豊子さん



九州から来ました石原です。へあごろは二十周年ですけど、私ども九州も今年十五周年になります。《あごろ四姉妹》といひまして福田さんをはじめ、別名四大長老がおられますが、その長老を全然たてることなく大きな顔をしている四十代を中心に、三十代から六十代のメンバーが活動しています。

この十五年を振り返ってみますと、私たちも最初はおずおずと自己紹介し合つて、悩みを出し合つたりしていたんですけど、だんだんメンバーも加わり、元氣な仲間も増えまして、例えばいま会場に見えている三好さんなどは、このあいだの例の福岡セクシャルハラスメント裁判の事務局長をして裁判を支えてきたんですけど、ほかのメンバーもそれぞれへあごろをベースにしなから、いろんなところで活動しています。三好さんいわく「あごろは自分の生きる基本である」と宣言しています。私はそこまでは行つてないんですけど。

福岡は百万都市だから大きい方なんですけど、やっぱりかなり封建的なところがあります。私は悪名高い談合の建設会社にいまして、この四月からは営業の方で外回りをしていますから、毎日見るのは男ばかりですね。本音と建前からいへばズタズタな面もたくさんある中の仕事ですし、そのうちやバイ記事が大新聞に載つて私の顔写真が出るといふようなことだけは、ないようにしたい（笑）と思っていますけど。

そのような中でつらいこともあるんです。男女差別の巢窟のような体質の仕事なんですけど、

そういうところにあっても、まア敵に後ろはみせられない、というか、仲間を裏切れない、ここで一步引いたら女がすたる、と思つて頑張らなければいけない時もあり、それが支えになっているんです。そうしたことを月々の例会で話してみんなで支え合うし、いろんな活動のベースになつてきているわけです。

そういう活動や学習の結果を先ほどの、出来不出来で言えば、非常にしつちやかめつちかか原稿ばかりを事務局に送っている九州なんです、それをまア斎藤さんが最初もくろんだように地方からの情報発信ということというならば、各地の情報が伝わってくるというのは、読む方としてもとても楽しみなんですね。ここでああいうことをやっているのか、とか、こんな角度からのこともあるんだな、と。例えば松山のPTAの問題にしても、私はまだ子どもが小さいから、PTAに関わっていないんですが、あアそうなのか、こんなことがあるのか、と新聞なんかよりもおもしろく読んでいるわけですね。そういった地方からの情報発信というものは、とても評価するべきことだと思っています。

ただ『朝日ジャーナル』のようなところでも、売れないということとで経済的なところで足を引っ張られ、廃刊になったようなんですが、へあごろゝの場合も常に経済的なものが問題になってますし、運営会議でも一番の議題は、慢性的な資金不足をどうするか、ということなんです。そうしたしわよせが結局、斎藤さんはじめ事務局の人にお金づくりの苦勞を背負わせて、そのために引き起こされる無用なトラブルとか、無駄なエネルギーがずいぶん費やされているわけですね。

何をするにもどんな活動でもお金というものから離れられないわけで、もしかしたら斎藤さんが倒れる時へあごろゝも倒れるのではないか、という恐れはあるのですけど、そのときはそのと

きでしようがないかな、と開き直った気持ちもあって（笑）、荷物を背負いこむような悲壮感はなく、やれるところまでみんなで頑張ればいいのか、と思っています。（拍手）

## 明治の『女学雑誌』昭和の『あいら』——福田光子さん



今日は実は司会を仰せつかっているんですが、司会以外にひと言、申し上げさせて下さい。

私は『あいら』の創刊時代からのメンバーでして、長く東京に住んでおりましたが、突如福岡に住むことになりましたところ、ぜひ九州にもへあいらを、ということになりました、福岡にへあいら九州をつくりました。それからようやく十五年経ったわけですけれども、時々斎藤さんから深夜に電話があったりして、もう『あいら』やめようか、とか、お金がない、とか、いろいろ驚かされることばかりで（笑）、そのたびに無力でありますけどご相談にのったりして、もう幕を引きましよう、と言いますと、いやいやそういうわけにもいかない……（笑）、不死鳥のごとくに立ち上がるのが斎藤さんで（笑）、フェニックスの斎藤さんと驚いております。

私は明治時代の雑誌の歴史を調べていますが、明治十八年に女性にとっての初めての雑誌『女学雑誌』が出ました。それが二十年続きまして日露戦争の最中に倒れました。二十年目でした。ちょうど『あいら』もそんな転換期にきているのか、と奇しくも感じている次第です。



『女学雑誌』が倒れる十年くらい前から、良妻賢母主義といわれているたくさんさんの雑誌が出ました。『貴女の友』とか『女鑑』とか『日本の女学』とか。その後『いらつめ』とかが出ました。まさに良妻賢母イデオロギーのメディアとして登場するわけですけど、その後その否定の上に福田英子の『世界婦人』とか『青踏』とかが出るわけです。

大正期に華やかに登場した『青踏』に比べて、昭和の『あごら』の創刊は全く目立たない地味なものでしたが、私は明治の『女学雑誌』、大正の『青踏』と並べて昭和の『あごら』を位置づけたい、と思っています。そういうことでずっと斎藤さんを励ましてきていますが、なんせお金がなくて。この間ちょっとみていましたら、十五周年のときに、増田さんが「あごらは清貧がいんだ」とおっしゃっているんですね。清く貧しく、がへあごらの特徴だと、そういうおっしゃり方をしておられて（笑）。励ましというか、おだてのようなものなんですが、それで貧乏所帯をずっときりまわしてきて今日二十周年を迎えたのはほんとに感慨無量でございます。

編集会議に招集されて東京に出てくると、たいていはいろんなトラブルがありまして、そういう中でお金の心配だけでなく、いろんなま、フェミニストというのは、ちょっと変わった人が多いですね（笑）。猛烈に変わった人もいて（笑）、斎藤さんは猛獣使いの役割も演じなければいけないわけで（笑）、非常に大変なことは大変なんですね。

大体日本の女性の団体というのは会員組織でやっているところが多いわけなんですけれども、いろいろ聞いてみると、八百人くらいの会員が限度ですね。不思議にも八百人いれば何とかなるのかな、と思いますが、それでもやっぱり非常に苦しいですね。そういうふうなところを切り抜

けて「へあごろ」が今日までやってきたのは大変なことですけど、今日配られたプログラムに『あごろ』のバックナンバーが載っておりますが、それを見ますと本当にすべての女性の問題を先取りしてやってきています。これは、みなさまと共に高く評価していいことではないかと思っております。『出版年鑑』の冒頭に雑誌のリストが載っていますが、五十音順で冒頭は「あごろ」なんです。ですからやはり、『出版年鑑』から「あごろ」を消してはいけない、という考えをいつも持っております。

「へあごろ九州」でやっている一人としてしましても「あごろ」を大きく評価していいところは、やっぱり地方拠点を設けていることです。北海道の旭川から沖縄まで縦断しています。活発に動いているところもあればそうでないところもあるわけですが、こういう地方からの発信ということが「あごろ」の一つの特徴だと思います。その中でつくっていくということが、これからの生きる道と考えています。みなさまの中には地方に何か手掛かりがありになる方もいらっしゃるのじゃないかと思えますし、また転勤で東京以外の所にお住まいになる方がいらっしゃる、勇気を出して、「あごろ」のネットワークをもっと拡げていくことが大事なことでないかと思っています。

さっき「へあごろ九州」の石原さんが、斎藤さんにもしものことがあったら、と言われてました。私もそのことは思わないわけでもないのですが、でも斎藤さんのためにみんながやっているわけではないので、女性の力を出し合って、これからの女性の問題の解決の仕事をしたい、と思います。

先程マスコミの方々からのお話ありがとうございましたけど、今日の標題について実は「へあごろ九州」

でいろいろ討論しましたが、「マスコミの限界／ミデイコミの限界」はおかしくないか、やっぱり可能性を大きく謳いあげることが、二十年後の〈あごろ〉に課せられた大きな課題ではないか、と考えています。（拍手）

しきさん（司会） 随分たくさんお話を伺ってメモしきれませんが、これからみなさんと一緒に討論していきたいと思います。みなさんの中にもご発言されたいという方がたくさんいらっしゃると思うんですね。どうぞこちらに出てきていただいて、ご一緒にお話をしたいと思います。どうぞ後ろの方も前に出てきてください。顔が見えないから前に出る、そんな感じでお願ひしたいと思います。

自分のこと、ひと言だけ言わせていただきますと、〈あごろ〉の会員の中で一番ちゃんぽらんな会員？ でしょうね、斎藤さん（笑）会費だけは払っていますけど、編集会議とかには出ない。でも、そのくらいのいいかげんさ、——いい、かげん——さ（笑）いいあんばいさが、とても大事だと思うんですね（拍手）。「この私」が一人でできないことは何もできないというのが私の原点ですので、私は、私は、とみんなで言い合う。けれどそれには乗らない、という人がいてもいいんじゃないか、みんなでワーツと盛り上げるだけでなく。

どんな女の運動にも害がある——こう言ってひんしゅくをかけていますけど、そんな感じでご意見をたくさんいただきながら、楽しもうではありませんか。いかがでしょうか。それではどうぞ、言いたいなと気持ちが高ぶっている方、また高ぶりそうな方（笑）も含めて、どうぞぞろぞろと、この辺においていただけないでしょうか。（拍手）

語れば響く——それぞれの思い



岡田まき子さん 上にあがると引き立て役になれそうだから、壇に上がります。私、今日の最年長者だと思っています。埼玉の桶川から来ました。〈あごろ〉二十年の会員ですが、初めての出席です。なぜならば、先ほど田嶋さんがおっしゃってらした地方での活動、市長をとったり、若い県議を生んだりですが、たいへん幅の広い革新の運動で、セクシヨナリズムが一番の敵なんです。そういう中では女性の立場もまちまちで、〈あごろ〉へ結集とはいかないわけです。斎藤さんはじめ皆さんのご苦勞は涙が出るほど察しました。けど、地方では中央的指針というか、何かがあってくれなきゃこまるんです。中央で灯をともし続けてくださる〈あごろ〉が唯一だと私は思ってきました。それがいつの間にか二十年ね。

実は今日も私、体調も良くないし、こんなお婆さんになっちゃってるし、失礼しようかと思っていたんです。ところが彼女(斎藤さん)から丁寧な招待状が重ねて届けられて、これは、虚勢を張ってでもと思って。皆さんは私よりずっとお若いはずだ、ひとつ“大正デモクラシー”スタイルで(拍手)こんな恰好で出てきました。言いたいことはいっぱい。けど、皆さんはお若い、私はレトロで引き立て役(笑)。これ、普段着ですよ。昔のネ。

労基法の無かった時代から和服で働いてきた人間です。洋装は三越でも千人にひとりぐらい着始めたころ。だから着付けはうまい。そんなことはどうでもよい(笑)。

地方政治を四十四年やってきました。口幅ったいんですが、セクシヨナリズムをなくす運動を

やってきました。はじめは県都浦和市議を増やしたり、全県的婦人運動は県史に残る農村の隅々まで、約十年。農村の民主化なしにこの国の民主主義の発展はあり得ぬ結論で、小さな保守的な街の農家を基盤に、ちいさな革命三度やりました。成功でした。「やったあ」だったのですが、私、七十になっちゃった(笑)。若い人によってもらわなきゃいけないでしょ。第一線降りちゃった。今見ると地方も中央と同じで、金権政治にろう断されちゃってる。私戦後一体何をしてきたのか、と思うと、虚しく、悲しい。けど、私も昔のようにはできません。それで皆さんへひとつだけお土産があります。桶川市の市議員ですが、さとう京子さん、美人で二人の母親、私よりは幅が狭いというか(笑)、へあごろに共鳴できそうな方。こちらへ、入っていただくと思っています。それがおみやげひとつ。

それから老人の悲しみをね。皆さんを笑わせてみせます。

私、高齢化社会ってことば好きじゃない。としよりは自分だけでたくさん。私、平常はテールド着こなし、活発な婆さんで、孫みたいな若者、主として学生さんが出入りしてくれています。しかしここ数年痩せこけちゃって、何ともいだけない。それで、水谷八重子ってご存じ？ 杉村春子ご存じですよ。あの方たちが娘役に扮するとき、ふくみ綿やるでしょ？ ご存じかな？ 頬に綿を少し含むんです。私それやってみたら、娘役になれたの(笑)。ルンルン気分が出て、途中喫茶店でコーヒーとサンドイッチ、玉子サンド食べてネ。ルンルン気分で帰宅してみたら、何と、片っぱの綿がないのよ(笑)。食べちゃったの(大爆笑)。ほうら、笑った。おもしろいでしょ。老人てのはナンセンスよくやるのよ。今日は、三つ四つ、ナンセンスだけ喋るつもりだったけど、もう長くなっているからこのへんでやめておきます(拍手)。

ちょっとみなさんね、さっきの田嶋陽子さんのお話、たいへん良かったしおおむね賛同です。けどね、皆さんのまわりご近所のお母さんたち見てて。男たちよりよくやっているでしょ!? 女のほうがね、リーダーシップとってる。そうじゃありませんか? (拍手)。だから、私は、男の人を使うことをやってきたつもり。社会的にもネ。世の中男性使わないと変わりません。だから、フェミニズム、フェミニズムだけ言ってないでヤローども使ってちょうだいよ (拍手)。

私、名前は岡田まき子。本も書いていますが、うまくないし社会派だから売れません (笑)。アジテーター的ニュアンスだからかな? (笑) とにかく私、医者からお供を連れて歩きなさい、名札をつけておきなさいナンテ言われています。心因性不治病三つ保持者……。だからこれで失礼します。ありがとうございます (拍手)。

しまさん では、お一人ずつでなくても何人かずつでお上がり頂いて、フロアの方と舞台の上の方と、意見を話しあって頂きたいと思います。



野澤光江さん 埼玉の春日部からまいりまして、今大先輩のお話を伺って、結構すごいな、と思ったりしています。私はここにいます (へあごら松山) の奥川睦の姉なんです (拍手)。女ばかり五人姉妹の私が二番目、彼女が四番目。いろいろクセのあるといえはある姉妹ですが、実をいいますと、彼女の関わりで齋藤さんにもお会いして、すごい方だな、というふうに思っているんですが。今日ちょっと恥ずかしい気持ちがありましたのは、実はまだ (へあごら) の会

員ではないんです。原稿を書かせていただいたり、いろいろしてはいますが、私の中にこだわりがありません。さっきしまようこさんがおっしゃっていたようなこと、わかりやすく言えば私もああいうことだと思ったんですが、聞いてみるとかそういうのが個人的にあまり好きでないですね。だからそれぞれの立場でそれぞれにやることの大切さというのにこだわってしまって、それでいまいち足を踏み出せない。一步踏み込めば妹がこれですから（笑）とめどなくのめりこんじゃうのが分かっていますから、その一步を非常にためらっていたんですね。ただ『あごろ』はとても楽しみに読ませていただいていますし、非常に感動することもあります。ものごとにはいろんな多面性があって、角度を変えてものを見たり、考えたりすることが、どれだけ人間の心を柔軟にして、意味のある暮らしに気づかせてくれるかということを私はとても感じているから、そういう面では『あごろ』の出来不出来も含めて、いろんな問題提起がとても豊かなものを私にくれていると思っています。

そういうことを思いながらためらう私の中に非常に偏屈な部分があるのかもわかりませんが、斎藤さんが資金ぐりに苦しんでいるのはうすうす感じながら、今日病のことを聞いたりして、気恥ずかしい思いがしました。会員になって会費を払うという参加の仕方があるし、斎藤さんの才能を蝕んでいる資金作りに、少しでも、一人づつの人間がちょっとだけ、心を傾けることでその負担が軽くなれば、資金的にはとてもプラスになることじゃないかな、と。わかりやすく、やりやすいことからやったらどうか、という提案をしたいと思います。二十年間、いろんな思いをしながらやってこられた先輩たちに、まずは第一歩として、そんなことができれば、今日の集いに出たかいがあるのかな、思います。

私もローカルでは非常にイキのいいおぼさんと言われていますが（笑）、今日の田嶋さんのお話、スパッと気持ちがいいじゃないですか。今スパッと、気持ちのいい話ができない大きな原因のひとつが、差別用語だとかですね。とてもイヤですね。あれホントみみっちいね。あれも言っちゃあいけない、これも言っちゃあいけない、そんなこと言って、腹の底から言いたいことが言えますか（拍手）。

そんなことに縛られず私は自分の魂のままに自由に生きたいと思っています。ワクにはめられることを極端にイヤだと思ってるんですね。そういうふうになり下がるまい、と思っていた気持ちは何となく、でもそういうことにも気づかないで意地を張っていたな、と今日とても素直に気づきましたので。

せめて、ささやかな会員になる。これまで妹を通して手に入れていた出版物なども自分で積極的にやること。地域の仲間にも話して。資金協力がバックアップにつながるわけですから、まずそんなことから始めようかな、と思っています。ありがとうございました。（拍手）



畠山裕子さん こんにちは。広島から来ました。私はこないだ、ここにいらっしやる奥川さんにね、「あなた、〈へあごら〉の会員ですか？」と言われて「いえ違います。私は読者です」と言ったんですけど、考えたら、本をとっているということは、会員なんですよね。知らなかったんですよ。その時まで。という会員なんですけれども（笑）。

広島で、〈デルタ女の会〉というのをやっていて、なんかそれと〈へあご



らゝがとても似ていて、みなさんと親しい感じがしているんですが。私たち、斎藤さんが大好きで、今回、斎藤さんがご病気だというので、私はとても心配になって、もうたまらずここまで駆け付けて来てしまったのです。だから斎藤さんの元気な顔を見ればいい、と思ったので、ここへ上がるとは思わなかったのですが（笑）私が上がるとみんな上がりやすくなるでしょ（笑）。だから上がりました。

へあゝのステキなことは、そういうふうに、たとえば斎藤さんの顔を思い浮かべて本が読めるという、とても身近で自分と同じような女がいろいろな原稿を書いたり、思ったり。非常に身近なところがとても好きです。私たちも〈デルタ〉の会報を出していますが、書くことがへたなので、いろんな運動をしています。広島では中曽根元首相の句碑がなんと平和公園に立っているんです。その「中曽根句碑」の撤去運動を五年やっているんですが、その一つとして句碑の前で踊ったり、歌ったり、寸劇をしたり、句会を開いたり、替歌を歌ったり、今まで男たちがやらない方法で「イヤだ！」という表現を少しずつ自分たちのできるやり方でやっています。男と違う方法でやると非常にラクなんです。盆踊りもやったんですよ。「NO！ 句碑音頭」という。したら男の人たちはコチンコチンになって、「昼間っから、酒も飲まないで踊らりゃせん」と言（笑）、誰も踊らなかつたんですが、私たちはとても楽しかったです（笑）。

いろんな表現方法を使って、まず自分がどういう人間なのか、というのを知るといのは、とてもおもしろいことです。私も今、ここに立つとは思っていなかったの、いまおもしろいです（笑と拍手）。だって、ここに立つとみんなの顔が見えるんだもの（拍手）。わア見ちゃった！（笑）。みなさんも立ってみませんか（拍手）。

浜村匡子さん こんにちは。同じ〈デルタ女の会〉の浜村と申します。畠山さんは長老なんです



けども（笑）長老に引っぱられて上がりました。私もこの四月から『あら』を読ませてもらっています。〈デルタ女の会〉が今年十年目で、いろいろ悩むこともあってやめようかなと、今年の四月ぐらいは本気に悩んでいた時期がありました。斎藤さんが去年イラクに行かれて、せめて湾岸戦争を止められなかった自分の責任として、イラクの子どもたちにミルクと

医療品を届けたいと言われたので、私たち募金のため初めて街頭に立ったんです。募金は思いもしなかったんですけど、約百万近く集まったんです。本当に胸を痛めている者がたくさんいる、という反響をすごく感じました。湾岸戦争に対し、自分は何もできなかったって、せめてできることをと募金活動をしたのですが、それをまた斎藤さんが今年持って行って、見届けて下さって、その報告を是非聞きたいという思いがありました。

その集会で、私はやめちゃいけん、と思い返しました。みんながいろいろ、ああそうか、と思うことがあって、〈デルタ〉を潰したらいけないんだ、と。私もすごく感動したい集会でした。

今日は朝日新聞の下村さん、私、本を読んでいたんですけど、あああの本の人だ（笑）とか、増田れい子さんは、私は去年まで毎日新聞もとっていたんですけど（笑）、あああの子のしんぶん」の増田さんだとか……（笑）。各地域で頑張っておられる方々にも初めてお会いしました。マスメディアと言えば、昨日は朝日新聞の広島支局から電話がありまして、佐川急便事件での竹下と暴力団、右翼の関係をどう思いますか、と言われたんです。それで、暴力団追放の運動で命

を張って聞っている近所の人たちのことを言ったら、今朝の地方版に「暴力団追放で命を張って聞っている私たち市民は……」というふうに出まして（笑）、えっ！と思って。広島に帰ったら、とても大変だなあ（笑と拍手）。

畠山さん この佐川急便事件ではすごく腹が立っていたんですね。さっき、聞く、というのはちょっと、と言われたけど、私、実は聞うのが好きな女で（笑）佐川急便事件、やろうと思った時に青島さんがやられて。あっ遅れたア、と思ったんですね。

みなさん広島と言えば多分―平和都市広島、または暴力団、または軍都広島―どれかをイメージされると思うんですが、今回はすごいんですよ。広島市議会は全く決議してないんです。全国ほとんど決議しているのに。あんまりあんまり腹が立ったから、六人の女で副議長に会いに行っただけです。浜村さんも行ったんです。私が「平和都市広島だから、しかも宮沢総理大臣の地元だから、いい決議を出して下さい」と言ったら、相手の副議長は、「わしゃあ、女からツベコベ言われることはない。決議文はわしらやるんだ。あんたらがやるんじゃない。わしは忙しいんだ」と言って帰ろうとするんですよ。十五分時間もらったのに、たった五分で。その後のことは、浜村さんが言います。

浜村さん 六人とも忍耐に忍耐を重ねてニコニコしてたんですが、これ以上わしに何を聞きたいか、と言うから、本当にブツンきました。私は本当は温厚な人間なんですが（笑）机をドンと叩いて帰りました（笑）。やっぱり手練手管がいるんだなア（笑）。

島山さん 私が言いたかったのは、市議会に男が行ったんだったら、こんなひどい扱いは受けなかった、と思うんですよ。全く相手にしてくれなくて、全然話も聞いてくれないんですよ。そういう仕事はわしらがやるんだ、あんたらの意見を聞くことはない、って、本当に言われたんですよ。つまり女が文句を言うだけで、ものすごく、男は腹を立てる。とても上品な格好で行ったし（笑）。私たちはみんなやさしいし（笑）この人なんか、泣き出すんですよ（笑）、怒られたって。泣いてやりよるのはそれでも怒りまくる。本当に侮辱されたんです。たった「（決議を）やって下さい」と言いに行っただけで。

さっき田嶋さんはすごく男は変わってきた、と言われたんですけど、広島でみる限りは、世の中はいつも（少しも）変わっていない。だからやっぱりへあごろはやりつけなければいけない、と私は思います。（拍手）

浜村さん 以上で終わります。（拍手）

斎藤さん 補足しますと、彼女たちが中曽根句碑の前で歌ったり、踊ったり、寸劇をやるんですけど、このジョークがすごくおもしろいんですよ。ひとつ紹介しますね。句碑の前でパット紙を広げて川柳を見せるんです。

いつまでも あると思うな髪と句碑（爆笑と拍手）

下村さん さっきマスコミの内部の人間として、みなさんが思う程の権力ではない、と申し上げましたが、でもそうはいっても、やはり新聞はエスタブリッシュメントですよ。官僚とか、自民党とか、これまで日本の中枢で日本を支えてきた大企業とかね、そういう「権威」が今全部、

根本から崩れようとしているというふうに認識していますから。朝日新聞もエスタブリッシュメントという意味で、内部がガタガタしています。それを私は割とクールに見てるわけで、つまり、そこを突き抜けないと次が出てこない、と思ってますから、単に悲観論ではないんです。ただ今のお話を聞いていますと、まさにそういう時こそミニコミの役割、マスコミの役割があつて、お互いに助け合いながら、やらなきゃいけないわけで、ミニコミは大いにマスコミを利用すべきだし、利用できると思うんです。今のようなお話はそこで引き下がらずに、それだけははっきり言っているんですから、場合によつたら、テープレコーダーに録音するんですよ、そのやりとりを。そしてやっぱり投書欄とか、「論壇」とかに投書するとか、きっちりその時こそ、大いにマスコミの利用価値があるわけで。そういうところに出ると市議会は弱いわけですよ。マスコミに出たとなると、大騒ぎになっちゃうわけだね。だからと言っておどしをするのはよくありませんが、やはりもうちょっとそこを行動しないと。勿論投書欄は載せて下さいと持っていくてもそれぞれ編集長がいて、必ず載るわけではないし、大阪周辺、東京周辺とまた違いますけどね。みなさんの六人が六人、怒り狂って六通投書すれば、六倍のインパクトになって、これだけくれば載せないわけにいかない、という可能性になりうるんですね。

ミニコミにはしっかりと細かいことを書いて、マスコミにこんなこと許しておけますか、というようなことで利用するというように、大いにみなさんの知恵を働かせてやっていただきたい。私は『ジャーナル』をやっているときに、できればね、斎藤さんのところと大いに話し合つて、へあごろでやっていらっしゃること、『へあごろ』の紙面の情報を場合によつたらジャーナル向けに料理し直して、と初めいろいろ話し合つたんですが、斎藤さんも忙しく、また体の具合を悪

くされて思うような結果は出ませんでしたけど、マスコミの中に女性記者がいればそういうことができることもあると思うんですね。今の広島の話があまりにひどいので、一言、言わせて頂きました。（拍手）

まのさん 先程歌わせていただきました愛知県名古屋のまのあけみでございます。

「あごろ」の資金作りには是非協力させていただきたい（拍手）ということで、テープと本を是非お買い上げいただきまして、その売上の三割を差し上げたいと思います（笑・拍手）。

オープニングで歌いたかった歌は、私は女ばかり四人姉妹で、小さかった時の夢は、結婚しないで、姉妹いつまでも仲良く暮らそう、と着々と考えていきましたが、今となってはあちこちバラバラに住んでおりまして実現しておりません。今考えていることは、友達として、いろいろ役にたつ力をもった人と暮らすこと。針灸でわたしたちを楽にしてくれる人（笑）、法律に詳しい人とか、役に立つ人と暮らしたい（笑）。私を苦しめる人とはなるべく住みたくない、と（笑）。そんな歌です。でもこういう歌はなかなか「紅白歌合戦」では聴くことができませんので（笑）、今私たちの地域で「まのあけみ」を紅白歌合戦に出す「百万人署名」をやろう（笑）と考えていた矢先、アメリカのルイジアナ州に留学していた少年が射殺されましたね。私の友人の親友のお子さんで、コンサートに来てくれて話もしたことがあるのですが、その彼女が、「犯人を殺してやりたいくらい憎いけど、それでは解決にならない。一番憎むべきは、アメリカの普通の家庭で銃を所持している状況です」ということで、アメリカ大統領あてに『アメリカの家庭から銃の撤去を求める請願書』という署名を集めています。私もコンサートのたびに、みなさんに訴えさせてい

ただいています。この機会に是非盛り上げていきたいと思っています。

私も以前はアメリカは豊かな国と憧れ続けていましたが、しかし、こういうことがおこると、やっぱりね。服部剛丈（よしひろ）君という方ですが、彼女が「剛丈はどんなに無念だろう、どんなに銃が憎いだろう、生きていたら、きっと銃の問題に取り組んだに違いない、死んだ剛丈の仕事をやりたい」ということで、署名運動に取り組まれています。それに対していやがらせの話もずいぶんあるようですが、彼女は剛丈君の遺骨を抱いて帰ってくる途中、なんと飛行機の中で詩を書かれたのです。私に歌ってほしい、ということ。

めったに聞けない貴重な歌でございますので、各地で取り組まれて、その一割をへあごらゝに（笑）、名古屋の女性企画「ウイン」をとおして五分を（笑）——へあごらゝをつぶすことなくありとあらゆる手だてを考えながら、やっていきたいと思っています。私も早速会員にならせていただきます。（拍手）

三好久美子さん　へあごら九州の三好です。さつき石原豊子さんに私（三好）の生きる基本が

へあごらであるで紹介された者です。



あれはちょっとオーバーで気恥ずかしいのですが、あごら歴十八年の間に、ものの考え方とか、判断の基準、場面場面でどう動くかなどの基本はやっぱりへあごらの中で身につけてきました。はじめは本から、そしてへあごら九州での活動の中から。

八九年に始まったへ福岡セクシュアルハラスメント裁判に積極的に関わろうと決心したのも

その一つです。支援する会の準備会で「会報づくりをやらせてほしい」と手を挙げて参加したんです。ずっと「へあこら」をやっていましたから、やっぱり情報を伝えたいと。日本で初めてセクシュアル・ハラスメントを正面切って性差別だ、人格権の侵害だ、と訴えるこの裁判の情報をできるだけ広く伝えたい、それならできかなと思ったんです。

いま活字がはやらないので、ビデオもやろうと思ってビデオ教室にも通って記録撮影をしたり、私たちが創ったお芝居も写したんですが、むずかしいですね。残念ながら技術が追いつかなくて、じっくり見れるようなものは出来ませんでした。ただ情報伝達としてビデオは活字の変わりではなくて、もう一つ別の方法なんだなということはわかりました。テレビのニュース番組が増え文字放送が始まって、新聞の役割に期待するものはなくならないでしょう。活字嫌いは増えていきますけど。

さてこの会報、ミニコミを発行して感じたことを報告しますと、九二年四月一六日の勝利判決を伝えるまでの三年間で、十九号出しました。（現物を示して）これです。編集は、四、五人のグループに分け、三号ずつ回したんですね。そうすると、人にわかってもらうには自分たちが裁判の奥まで理解しないと書けないし、セクシュアル・ハラスメントに対する考え方も話し込まざるを得ないんです。

三号ずつえらい雰囲気の違いの違う会報になったけど、会の充実にはとっても良かったと思っています。読んでくれたのは、集会で買った方のほか、〈職場での性的いやがらせと闘う裁判を支援する会〉の全国の会員三百七十人、増田さんは初めからの会員で読んで下さっていると思うんですが（と一礼）、その人たちに何をどう伝えるか、私たちはミニコミに何を期待しているのか考えま



した。

まずは、詳しくしつこいくらい続くテーマの追求、当事者の思い、生の声、発行グループの考え方など、「中立と世間のニーズ」を建て前としたマスコミからは決して得られない情報ではないでしょうか。ミニコミを読んでいる人は、どんな考え方のもとに発行されているのか納得して読んでいるわけで、かえって自分なりに解釈できると思うんですね。だから私たちも独断と偏見で書いていいんだよ、とよく言っていました。

会員三百七十人というのは地方の裁判支援の団体としては多いほうかも知れませんが、一生懸命作ったミニコミの声も、届く範囲はそこまでのことです。この裁判のことを一番広くちゃんと伝えたのは、やっぱり新聞だったんですね。最初の記事が出たとき、涙が出るほど感動しました。さっき広島の方も言われましたが、女から言われた時の男の反撃のすごさ、それに対して支えて下さったのも新聞でした。

裁判中、マスコミとのお付き合いが随分ありました。発足のとき、何しろ「女性記者に取材にきてくれ」と言ったものですから、司法記者は男性しかいなくて総スカンをくいまして、ずいぶん論争もしました。特にもめたのは、原告を出せと、写真がダメなら名前を、本人の声をと。

その攻防がずいぶんありました。

私たちは、性的な事件で声をあげた女性がマスコミに揶揄されて精神的にまいってしまうことをまず第一に懸念したのですが、もうひとつ、原告が表に出て行った場合、大勢の女たちが受けている社会的な問題というより、この裁判が「こういう女とこういう男の間の事件」として個人間の問題として片づけられてしまいうんじゃないかと心配したんです。

そういう意味では喧嘩したんですが、納得してくれたのでしょう、裁判は実名で行われますし、集会に本人も出ていて記者の人たちは知っているのですが、少なくとも新聞には個人的なことは一切書かれませんでした。

各社の女性の新聞記者とも親しくなりました。勝訴の日、男性記者に取り囲まれて「何がセクハラか、俺たちにわかるように説明してみろ」と詰めよられた人、スペースにとって良かった良かったと勝訴記事を書くした後がこわいから書けないという人、「セクハラ記者」といやみを言われながら頑張って特集を組む人。女性だから何でも伝わるというわけにはいきませんが、こうやって苦勞して作ってるんだということも知りました。マスコミとミニコミは、その情報の源も伝え方も、発行の目的も違うと思うんですね。

私には情報源としてはどちらも必要で、これからのいろんな活動の場面では、やっぱりマスコミの人とも一緒にやっていきたいなということをつくづく感じました（拍手）。



福本秀子さん 初めて参加させていただきました。八王子からまいりました福本と申します。私はフランス文学を翻訳したり、日本の女性史をフランス語で書いて出版している者なのですが、このような会があることを知りませんで、どうしようかな、と思ったのですが、六時からお話しになります、高橋ますみさんとお友だちなので一度行ってみよう、と。

フランスでもこういう会がございまして、「れ・ふあむ」女性社」という出版社が主催しています。そこで私の本を出版してもらっているという義理で行ったのですが、

一か月か二か月に一回こういう会をやっています。会場が凄いのですね。不思議なことにみなさん、ご主人とか、ボーイフレンドを連れてきますので、男性が三分の一くらいいるのです。マイクの取り合いになって、男が話せなくて、不満足のまま帰っちゃって。今日、へあこらもあちこちからいらしてますが、ニースから来ました、マルセイユから来まして今日帰ります、とか。男の人を連れて来ますから、夜からの会合が多いのです。

私もボンヤリ聞いておりましたところが、だいぶ前の話ですけれどオランダ人の女性を食べてしまった事件がありますね。それをある人が取り上げて言い出しまして、あゝ日本人のことだから、私も何か言わなくてはいけないな、と。それは殺されて食べられたのが女の人だから、フランスでもヨーロッパでもそんなには問題に wasn't なった。もしもあれが男だったら、社会的に地位のある男だったら大変な問題になっただろう、単なる女子学生だったから、そんなには問題にならなかったということ、非常に男女の差別だということから、主題になりました。

いろんなところで問題がありますね。フランスでは「女性問題SOS」というのをつくりまして、いつでも電話番がいて、何かあったら、いつでもどこからでも電話をかけることができる。そしてあらゆるところから電話をしてきた人たちの証言を雑誌にして、毎月出しています。そのようにして男性を引き入れて本当のすばらしい同権の社会をつくるべきだと思いましたので、ちょっと話させていただきました。今日はいろいろ資料を買って帰って勉強させていただきます。ありがとうございます（拍手）。

飯田和枝さん 私はいっ先頃まで新聞販売店を経営しておりました、マスコミの裏側というのに

熟知しています（笑）。こちらの方はお書きになる立場で、私は売る立場でございますけど。会社の中で、例えば編集部長と販売部長の地位というか発言力というのは販売部長の方が強いんだそうですね。どんなにいい新聞をつくっても売れなければ話にならない。売れなければお金にならない。絶対的な原則がありますね。

私も、販売店に本社から、読者のみなさんの声を吸い上げて下さい、という要請がきます。例えば紙面をどのようにつくってもらいたいか、聞いてみて下さい、と。その場合非常にがっかりさせられるのは、内容ということよりも、例えばラテ版、ラジオテレビ版ですね、紙面の中に入れずに外側にして下さい、というレベルの低いご要望ばかりなんです。非常に残念ですが、まあそういう時はやっぱり私の意見を、読者の意見ということで伝えますけど（笑）。

地方でやっておりますけど、地方の紙面づくりはまたもっとレベルが低いわけですね。例えば赤ちゃんの写真なんかをずらずらーと載せちゃうわけですね。うちの赤ちゃんが載った新聞だということで、固定客になる（笑）。そうすると十年は固い（笑）ということなんです。で、わざわざ浮浪者とやぐさを足して二で割ったような人に手数料を払わなくても、写真一枚で十年は確保できるということになるわけですから、マラソンの場面でも顔のわかってる写真をいっぱい載せる。その写真が載った人の写真をいちいちクロースアップしてどんどん配達する。それで読者を固定させようという編集内容ですから、これじゃいい新聞はできるはずはないな、いつも思っているわけです。

マスコミはもうあと五年か十年で崩壊すると思います（笑）。配る人が非常に少ない。今はもうひどい話なんです。が女を使え、というんで、アーリーパートナーとか。外人を使え、安く使え

る、とか。それもおそらく限界になりますね。そうなりますと、新聞がスタンド売りになりました場合に、果たしてどれだけの人がスタンドまで行って新聞をお買いになるでしょうか。恐らく今の半分以下になるんじゃないかということがありますね。

裏側にいる者でなければわからないような情報として、ちょっとお話ししました（拍手）。

中村道子さん 私は世田谷に住んでおります中村道子と申します。先程から何度も心が揺れ動く



わけです。というのは、一年程前に野党に全く絶望したわけです。それから、ずっとマスコミを頼りにしてきましたけれど、下村さんのお話、増田さんのお話を伺って瞬間絶望して（笑）、ハンカチを出して涙をぬぐっているわけです。それから以後みなさんのお話を聞いているうちに少しずつ気持ちが晴れて、ただいまの三好さんの、マスコミを頼りにしている、というお話、そして今またちょっと揺れ動かされましたけど（笑）、やはり甲板の上にいる下村さんや増田さんに、ますます頑張ってほしいな、と思ったわけです。

私は昨年の夏に斎藤さんのお話を伺いまして、へあごろの会員にさせていただきました。その時、私たちが少女時代に勤労動員で工場で働かされた時の経験を掘り起こしてみんなで本にしよう、という運動をしておりましたので、たいへん斎藤さんに力になっていただき、またお教えいただいて、へあごろにはとても期待しております。みなさまもどうかへあごろのこれからの発展にご協力下さいますように、よろしくお願いいたします。もうひとり、少女時代に勤労動員を受けた私たちのことをBOC出版で本にしていた坂口さんからお話をさせていただきました

たいと思います。(拍手)

坂口 郁さん 今日はいよいよ出来たと思うのですが……。



へあごらへは出来たときに名前は聞いていました。とても興味はありましたが、私はその頃、勤めと子育てを両立させることに奮闘していました。当時、子どもを持った女性が仕事を続けるための公立の保育園も、社会的な意識もなかった頃で、保育園を作って、やれやれと思うと学童保育の問題というように、当面解決すべきことが多くて、とても他のことにまで首を突っ込む余裕はありませんでした。それに女性が社会を切り開いていくためには、一人一人が問題と対決し解決する力をもっていなければならない、という思いもありました。だからへあごらは駆け込み寺ではなくて、そういう女性を作り出す集まりだと思いました。

私は戦争末期に女学校に入りましたので、勤労奉仕・勤労動員にあけくれて、基礎的な勉強が受けられませんでした。それに軍国主義教育に対する恨みがあるものですから、戦争中在籍した女学校の仲間に戦争体験の記録集を作ろうと呼びかけて原稿を集めました。皆で出版社を探しているうちにへあごらの名前が出てきたのです。しめた、と腹の中で思いました。何十年も教員をしていましたから、出版社のいくつかは知っていましたが、女性の手で作っておられる出版社へあごらについての知識もありましたので、お願いできればいいなと思っていた矢先でした。そして斎藤さんが原稿を読んで下さって本にして下さいました。『十四歳の戦争』という本です。へあごらのおかげで全国紙にも紹介していただき、その結果、昨年十二月八日に開戦五

十周年を期して「戦時下勤労動員少女の会」を発足させました。爆撃下の日本で、十三、四、五歳ぐらいの女の子たちが、どんな仕事をしていたか記録しておきたいと。

おとつい大阪の女学校のクラス会に昭和二十二年以来、四十何年ぶりかではじめて出席しました。会が終わってから、先生にご挨拶して、その本をお見せしましたら、東京から来てそれを言わずに帰るのかとたいへん残念がって下さいまして、「こういう記録は書き残すべきで、動員を引率した教員の立場からも記録を書いておきたいと思っています」とおっしゃいました。その先生は勤労動員の最中に「戦争が終わったら英語も数学もいるのだから勉強しなさい」と仕事の合間に教えて下さったと、後で友人に聞きました。一億玉碎などといっていた時代にも、そのような考え方の若い女性の先生がいらしたことを知ってあらためて感動しました。地道に生きている方々の中にこのような立派な女性がおられて、その方々の生き方の積み重なりが現在の女性を支えてきたのだと思いました。

私たちの作りました本をマスコミの方々に取り上げていただきましたおかげで、多くの方々の出会いがあり、その点ではありがたく思っているのですが、ここに立ちましたついでに私がどうしても言うておきたいことは、戦時中の新聞がどんなことを書いていたかということを忘れてはならないということです。戦意昂揚の記事ばかり。敵の損害甚大なり、我が軍の損害微小なり、と毎日書きたてて、気がついたら敗戦。それは報道管制で書かされていたのでしょうか、戦後はニッコリ笑って昨日までの事には口をぬぐって民主主義賛美の新聞を作っている。だから私はマスコミは疑わしいという思いを常に持っています。

「へあごろ」は私たち女性が実際に考えたこと感じたことを伝え話しあえる場として、これからも

ますます発展—それには〈あごろ〉を支える私たち一人一人の力が大切ですが—息ながく続くことを願っています。(拍手)

佐々木あきさん　こんにちは。私は名古屋からやって来ました佐々木と申します。地位もありませんけど、名前も知られておりません。



ただ今、お二人の方が、〈戦時下勤労動員少女の会〉のことを話されましたが、そのメンバーに入りまして活動をさせていただいております。この〈あごろ〉を知ったことも、この〈戦時下勤労動員少女の会〉でございました。私たちも戦時中愛知県ですごい体験をしたものですから、その悲惨さをどうしても残して全国の人々に分かっていただきたい、と四年前に本を出版いたしました。ところが本を出版いたしましたしても、多くの人たちに伝達することができません。そこで考えましたのが、マスコミです。その後マスコミの力をかりて多くの人たちに読んでいただくことになりました。この点については、非常にありがたい、と思っております。

たまたま去年の十二月八日に〈少女の会〉を開いたんですが、また今年の十二月六日に開く予定になっています。前年に集まっていた方たちには会報をつくりまして、先月十五日に発送いたしましたばかりです。〈戦時下勤労動員少女の会〉という会報です。

多くの人たちが戦争中に犠牲になられ、また大変な体験をしておりますので、そういうことをも含め、後世に残すべき計らいの一環です。どうかお気持ちのある方は是非いらしていただきたい、と思います。以上です。(拍手)



佐藤充子さん 横浜からまいりました佐藤と申します。へあごろと私の関係と言いますと、大



学卒業後、斎藤千代さんが、バンク・オブ・クリエイティビティという女性の労働力を組織しようということを試みられたことがあるのを知って、そこで私も何か仕事したいな、と思って斎藤さんをお訪ねしたり、何度か『あごろ』も読ませていただきました。

その後私も自分の仕事で忙しくて、あまりご縁がなかったのですが、この前の参議院選の時、反PKOの議員を出そうということで、内田まさとしさんの応援をした時に久しぶりに現役の斎藤さんにお会いしまして、たいへん努力なさっているんだな、と。

私がいま関係している『新生』という新聞があるんですけど、その若者に私もイラクに行こうと誘われたんですが、まだ命が惜しいからと言って、その人たちを行かせてしまったんです。そしたらその同じ時に斎藤さんがイラクに行かれたと聞いて、私は本当にビックリいたしました。小柄で、お丈夫でもないのに、ああいう苛酷なところに堂々といらしたことはすばらしい、と感動して、今日、参加したんですけども。

消費税ができた時から、女性がもっと声をださないと、前の方がおっしゃっていたような、痛々しい体験というのが埋没していつて、若い人たちに戦争の恐ろしさが、伝わっていかないんじゃないか、と思うようになりました。消費税の時に「消費税に反対する市民の会」を、今は「消費税の廃止を求める市民の会」というのをやっているんですけど、消費税にとどまらず反PKOとか諸々のことに関わりをもってしました。

このところ、ご注目と思いますが、市民や学生や議員たちが渋谷の駅頭で、佐川急便事件の真相究明を求めてみなさんの署名をいただいている、そんな活動に参加しています。

金丸さんの議員辞職を求める請願の時には、みんなが列をなして、一メートルぐらゐの署名が上がるんですが、竹下さん、小沢さんになると、情報が少ないせいかどうか金丸さんの何分の一かです。でも強い支持があります。実は金丸さんがもらったお金は五億円じゃない、という情報もそこで得ました。金丸さんが六十億とか、竹下さんが八十億、小沢さんが二十五億とか。こういうのは確実な政治評論家から出ているんですけど、そういうことを載せますと、訴訟ということになってしまうので、マスコミは載せられないらしいんです。

昨日も第五回公判という報道がありました。日本の三権分立はどうなっているのか、金丸さんのたった二十万円の罰金判決以来不思議に思ってたんですが、久しぶりに昨日の夕刊を見て、そう思いになりませんでしたか？ 頑張ってるな、と。そうなってくると今の一〇四号法廷なんですけど、裁判長や次席検事の高橋さんですか、私たちが声を上げて応援しないといけない、と。検事調書を最後まで読み上げたのは不届きだ、名誉毀損だと、被告席の自民党の人たちによって告訴されるままにしておく、このあとにつづく司法の人たちが潰れていく可能性がありますから。青島さんの呼びかけで、金丸辞任を求める三十万通のハガキが届いたようにハガキを出しませんか。これなら家にいてもできると思うんです。

国民一人一人からの発信を発しないと、日本は駄目になっちゃうんじゃないか、と、痛切に思っています。五億円に対して罰金二十万円の判決を許した岡村検事総長にも、なんていう判決を出すんだ、これ以上日本人として恥ずかしいことはない、とか思いのたけを書いて出しました。

みなさん、東京地裁の小出裁判長と高橋次席検事に支援のハガキを出そうということを、ここでお呼びかけしたいのですがいかがでしょうか（拍手）。

千一〇〇 千代田区霞ヶ関一―一四 東京地裁 第一〇四法廷

小出録一 裁判長 高橋武生 次席検事

いまPKOで自衛隊がカンボジアに行っていますけど、もし彼らが何かのはずみで現地の人を殺せば、私たちの税金で行っているのですから、私たち一人一人の責任だと思わなければいけない、と思います。そういう意味でもやっぱり、一人一人の発信を習慣づけたい。せっかく青島さんがつくってくれた方法ですから。別に郵政省に協力するわけではないですけど（笑）、これだったらできる、という人も多いと思いますので、呼びかけたいと思います。ありがとうございます。（拍手）



辻 和子さん 時間が短いようですので大急ぎで。私は福岡に住んでおります（へあこら九州）の

辻と申します。RKBという放送局に勤めておりました時に石牟礼道子さんの『苦海浄土』というドキュメンタリーを制作した関係で、昨年水俣91福岡というW・ユージン・スミス&アイリーンM・スミス写真展『水俣』と、水俣病歴史考證館・移動展を福岡市美術館で開催、実行委員として参加しました。その関係で、今日ぜひお呼びかけしたいのは、お手許に配られていていると思いますが、『阿賀に生きる』という映画のお話です。これをぜひやりたいと思って今年六月に伊藤ルイさんを中心とする私たち女の会で上映会をし、たいへん反響がありました。

東京でも十四日にアンコールロードショーがありますので、ご覧になっていない方は是非一人でも多く観ていただきたいと思います。

これは、ご承知のように新潟水俣病を撮ったまだ若い佐藤真さんという監督さん、すばらしい監督さんで、スタッフもすばらしいのですが、映画の主役は、自分の仕事と生きざまに誇りを持ち続けて、みごとな年の取り方をした人たちです。一方では阿賀に暮らしてきたゆえに新潟水俣病の被害者とその家族の人々なのです。

この映画に出てくるお年寄りの生き方、それを撮り続けているのは、全く若いドキュメンタリーのスタッフなんですが、この関わり合っているスタッフとお年寄りの生き方はとても感動的です。第二四回ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭では銀賞ほか三つの賞、日本では地球環境映画祭で環境庁長官賞、O C I C日本カトリック映画賞、日本映画撮影監督協会「J S C賞」と計七つの賞を取ったというとても嬉しいニュースもあります。一人でも多く観ていただきたいと思って、大変貴重な時間をとらせていただきました。よろしくお願いいたします。(拍手)



小島サカエさん 今日の特テーマはマスコミの限界とミディコミの限界ということで、マスコミの方はさすがきちんと謙虚にマスコミの限界というのを踏まえてそれぞれの話をなさいました。けれど、それに続くミディコミの限界というテーマには、一体限界はどこにあるのだろう、と(笑)、確か限界はない(笑)ような、そういう話が次々出てきましたが。やはりマスコミの方は、世界各国を回られて、非常に厳しい世界を歩いておられて、とても謙虚にお話

をなさいますけど、ミティコミのほうは、小回りをきかせて動いているだけに、いつもいつも肩を張って、命懸けのように渡り歩いているものですから（笑）、限界などありませんぞ、という話が次々に出ましたが（笑）、気概を示されたんですね（笑）。

私は（へあごろ九州）世話人の小島でございます。よく（へあごろ）ってなんですか、と聞かれますが、ことばだけでは通じなくて、朝日のア、ゴリラのゴ、ラジオのラ（笑）と言っておりますが、「はあアグラですか」「いえ違います」とか言っているうちに段々こちらも言うのが上手になってまいりまして、あほうのア、ゴジラのゴ、ライオンのラ、と言うようになりました（笑）。「女の問題を共に考えるひろば（へあごろ）……」と説き続けて、（へあごろ九州）も草の根グループが次々と消えていく中を、どうにかつづれずに、おかげ様で十五周年を迎えることができました。

経済的にドン底の中から、すべてを賭けて斎藤千代さんはじめ事務局の人々や多くの方々の大変なご努力で、『あごろ』を発刊し続けてこられました。「『あごろ』本紙は、歴史に残りますよ」と、福田さんがいつもおっしゃるように貴重な本だと思わんですが、その生み出されるまでの大変さは想像を越えるものがあったと思います。地方の拠点では、その貴重な『あごろ』をテキストに学習を地道にやってきたものです。少人数なんです、学習を少しづつしながら実践も重ねるうち、人も育ちあい、パワーもついてきました。が、福岡では幸か不幸か大組織と錯覚されてるようなんです（笑）。最近では「セクシユアル・ハラスメント福岡裁判」で日本初の歴史的勝利への一翼を荷なう支援グループで頑張り、その代表の三好さんもこの会場に來ています。時を重ねることがどれほど大事なことが、やっぱり二十周年というのは、地を這うよう

な努力の結晶だと思います。たくさんのご努力は、私たちには一部しかわかりませんが、東京の〈へあごろ〉より五つ年下の〈九州〉でも、十五年は並大抵ではない歳月でした。それを支えて下さったのが、マスコミの下村さんとか増田さんとかで、陰になり日なたになり、力になって下さったと、いつも斎藤さんから伺っています。

今日も本来ならば、大変な高い金額でないとおいでいただけない方々ですが、〈へあごろ〉はたぶんタダではないかと思うんですね（笑）。

ただ今日、はるばる九州から来てうれしいな、と思ったのは、会員になろうという声が出たということです。でもこんな会の際は、会員を増やすためにちゃんと入り口のところで準備をするのが普通なんですけど（笑）、多忙でそれがなされてない（笑）と思うんですね。ですからノートの切れ端にでも、お名前、ご住所、電話番号をお書きいただいて、また是非お知り合いの方にもお声をかけていただければ、この二十周年が非常に有効になるんじゃないか、と思っております。

「茨の道〈へあごろ〉二十周年、バラ色の夢を——」というわけじゃないんですが、お祝いに九州から空輸の真紅のバラなど活けさせて頂き、着替える余裕もなくこんな恰好で失礼しましたが、どうぞお帰りの節、会場入口でお花をプレゼントしますのでお持ちくださいませ。

本当にありがとうございました。（拍手）

半田たつ子さん 時間がないので、思いはあふれるのですが、そのあふれる思いをどれだけ手短



かに言えるかと思うと、まず、心もとなない思いがいたします。

私は半田といひまして、『新しい家庭科We』という雑誌を作って十年やって参りました。今から十一年前にウイ書房というのを作り雑誌を出してきました、今年の二月に十年目を迎えると同時に私の手で幕を引き、いま、いっしょにやってきたスタッフの人たちが、新しい形の『We』を続けてくれています。これが自己紹介でございます。

『We』を始める時に『あごろ』がちょうど十周年でございました。そのお祝いの席に斎藤さんが呼んで下さいまして、『あごろ』は二十周年、『新しい家庭科We』は十周年をいっしょに祝おうね、と固くお約束いたしておりましたので、今日参加している間も非常に胸が揺れておりました。本当は一番先に「斎藤さん、御苦労さまでした、ほんとうにありがとうございます」と申し上げたいのに、こちらが意気地がないものですから、それを言う資格があるのかしら、と思ったりして。とうとう最後になってしまいました。けれどもここで改めて斎藤さんに申し上げますと思います。「本当に二十年御苦労さまでございました」。(拍手)

そして斎藤さんからいただいた直筆のお手紙で「病氣ということのを伺って一層胸がつまる思いがいたします。」

ミディコミの限界というのが今日のテーマですけれども、限界はお金です。志ではなく。志はどんなに高くあっても限界はお金です。それがミディコミの限界だと私は思います。また今、みんなが活字にどんどん親しまなくなつて、固いこと、真面目なこと、本当は心を動かす一番大事なことが書いてあるのに、そういうことよりも、いますぐ、おもしろい、楽しい、くすぐられる

ことのほうにみんなの気持ちが傾いています。この時代に、へあごろの志を二十年貫いてきたというのは、並大抵なことではありません。

十年やった私が、半分の体験でしかないですけれど、それは身に染みて感じていることです。齋藤さんの二十年というのは、本当に身も細る二十年であつたし、ご病気になるのも当然だという気がいたします。

齋藤さんを支え続けたのはお仲間です。九州をはじめ、いろんなところから駆け付けられて、自分の問題としてへあごろのことを訴えかけられたたくさんのお友達、仲間、この方たちがなかったら、へあごろが二十年続くはずはないと思います。

やっぱり「志」こそ一番大事で、それを裏付けするお金を、どうやって維持させていくかということ、もうその一事に尽きるのではないか、と思います。

思いは溢れているのですけど、とても短い時間では言い足りません。

齋藤さんが湾岸戦争の時にも、身を挺してお出掛けになった。そこでの見聞や体験をどうしてもみんなに伝えずにおられなかった。そのお気持ちに對して、どれだけの女の人たちが「本当に御苦労さま」「ありがとう、いい情報をいただいた」とお返ししているか、と言ったら、これは今の日本では微々たるものでしかない、と思います。そのことが悔しいですね。だから私たちももっと賢くなって頭を回して、今のこの状況の中で『へあごろ』のようなミディコミが更に生き延びるためには、どういう知恵をつけなければいけないのか、ということをもっと語り合いたかったなあという気持ちもいたします。

それと同時に「齋藤さん、二十年頑張られたんだから、もう疲れたらいいのよ、いつでもおや



めなさい」と言いたい気持ちもいたします。これは先にやめた私のことばなので、申し訳ないのですが、やっぱり一人がやれる限界というのはあるわけです。

私も『We』をやめることになった時に「なぜやめるの、もっと続けて」という声がわんざとありました。その声もっと早く欲しかった、とやめることを決めちゃってから思いました。それを考えますと続けて欲しい。でも斎藤さんがご自分を犠牲にして命を削ってまで続けていただかなくても、各地に拠点があり、お仲間がたくさん育っているのだから、また誰かが斎藤さんの荷を担いでいかれるだろうということを信じます。

斎藤さん、どうぞお体を大切になさって、ご自分を大切になさっていただきたい。もう種は蒔かれているし、それが育っているし、それを信じていただきたいな、という気持ちがあります。本当に御苦労さまでした。（拍手）

しまさん 盛り上がってますますみなでお話ししたくなったところで、残念ながら時間が来ました。最後にここに座っていらっしゃる方にお一人一分づつ、しめの言葉を頂きたいと思っています。では、今度は逆に石原さんからどうぞ。

石原さん 〈九州〉では、さっき申し上げたように『あこら』をテキストにして学習会を重ねました。均等法でもセクハラでも頑張れたのは、『あこら』で足腰を鍛えていたからだと思っています。その〈あこら〉をささえようという声をたくさん頂いて、ほんとうにうれしく思います。（拍手）

奥川さん 英語にクライ・ウルフというのがありまして、もし斎藤さんが最初のひとこと「お金がないんです」というのをアメリカで言ったら、ああもうへあごろは潰れるな、と。企業や会社でもバーと雲の子を散らすように社員や従業員が逃げてしまう。それがアメリカの状況だそうです。だけでも幸か不幸かここは日本ですので、ああそうか、と賛同以上の雰囲気になって、狼だアーと叫んでも、それじゃあ力を出し合って支えよう、そういう気運ができたみたいで、いいな、と思いました。私みたいな者でも編集まかせてもらえたんですから、私もやるう、という人が次々出てくれるといいな、と思います。一番の新入生の新参者ですけど、後輩ができてくれるのもいいな、と思います。

もう一つだけ、資金づくりのことですが、第三部では少し人数が減るかも知れないのでここでPRさせて下さい。松山から持ってきたんですけど、これ、手描きのコースターです。一つ一つ色が違うんです。…なぜ戦争が起るのでしょうか、なんで人を殺す武器を作る人がいて、それを使う人がいるのでしょうか、みんなひとりひとりいい人なのに…、というメッセージが書いてあります。一枚千円と言いたいところですが（笑）百円です。百円なら買ってくれるかと。絶対安いです。金額へあごろの基金ですので、ご協力下さい。（拍手）

増田さん ほんとにいい時間を過ごさせていただきました。『あごろ』に、新連載を書き始めまして、看護婦さんの問題なんですけれど。在職中は、看護婦さんの問題に、きちんと対応できなかった、本当の取材ができていなかった、本当にお恥ずかしい話です。で、第一回を今度の『あごろ』に載せていただきます。次々載せますので、『あごろ』がなくなっちゃったら困りますの

で（笑）支えてまいります（笑）。こ一緒にやっていきたい、と思います。

新聞記者というのは、現実をあまり知らないのです。情報は上から流れてまいります。皆様方からいただきます。でもそれはもう既に字になった情報が実に多いわけです。現実を知らない、現場を知らない、看護婦さんの問題ひとつをとっても現実を知らな過ぎていたわけです。

実は今度、△日立とすべての職場から差別をなくす会△というどれくらい会ができてまして、その会長になりました。日立の女性たちの低賃金、それからいろんな差別を跳ね返すために九人が立ち上がり、提訴しているところなんです。でもそれは日立に限らない。日本で働いているすべての女性たち、家庭の主婦、お年寄り、すべての女性がいろんな差別を受けている。それを一挙になくしてしまおう、と立ち上がった会なんです。その会長をやることになりました。なぜその会長を引き受けたかと言いますと、△日立△資本△のこと細かいところまで、じっくりとその実態を知りたかったからなんです。それからあらゆる女性に加えられている差別の実態をもっともと知りたかったからなんです。その会長になりましたものですから、今日、帰り際に印刷物をお分けすることになっておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。いろんな点でこれからだ、と思います、ほんとに。（拍手）

下村さん 私の話をするよりも、みなさまお一人お一人の話の方がはるかに身に染みたり、新鮮だったり、エキサイティングだったり、スリリングだったり、呆れたり、驚いたり（笑）、いろいろありまして、本当にいい時間、楽しいひとときでした。

それから、今日私は、さっきどなたかがおっしゃって下さったように、まさに忠実にテーマに

こだわり話をいたしましたでしたが、その後全然テーマがはずれちゃって（笑）。本当は私は斎藤さんに賛辞を贈りたかったんですけど。斎藤さんとは長いお付き合いで、始終ベタベタしてはいないんですけど、話してツーカーとわかりあえる、大切な人で、そのためにこそのみ、と言っては失礼ですけど、『あごら』を応援してまいりました。

本とか雑誌は見るのもいや、というくらい届くわけなんですけど、封を開けないのもいっぱいあって、一週間もすると、こんなに（五十センチくらい）出版物が送られてきますが、『あごら』だけは一冊も捨てていません。全部しっかりとしてあります。斎藤さんご病氣なさって、さっきどなたかがおっしゃっていましたが命を縮めてまで頑張るのはやめて下さいね。そんなに急がずに、まだまだ先は長いんです。ゆっくりやって頂きたい。

私自身のことを申し上げますと、マスコミの限界を感じつつも、しかし、マスコミがなくなっちゃうという話もありましたが、なくなると困るんです。マスコミは必要なんです。厳然と必要なんです。絶対なくしちゃ困るし、無責任な言われ方をしたのは不愉快です。ミニコミはミニコミ、ミティコミはミティコミ、マスコミはマスコミの役割があるわけで。

私がネガティブな話をしたのでガツカリなさったというお話、そしてもっと頑張ってください、というお話でしたが、冗談じゃありません。これ以上頑張れないほど頑張っています（笑）。いい加減にして下さい。（拍手）

それはどうしてかと言いますと、『朝日ジャーナル』の場ですね、中途半端な雑誌ではありましたが、存在感のある雑誌でしたし、朝日新聞というマスメディアの中で出されているメディアではありましたが、その中でさっきどなたかがおっしゃったように、私は男をアゴでこ

き使っていました。おしりをひっぱたいて。同時に斎藤さんほどではないですけど、やっぱりお金の苦勞もしましたよ。二十何年の累積赤字を抱えていた雑誌ですから。そういう苦勞も致しました。朝日ジャーナルの間、私は平均睡眠時間は三時間でした。自分は超能力でやっていると思うくらい。これ以上やったら死ぬ、と母が泣いて言いました。新聞に戻っても、これ以上頑張れないくらい頑張っています。(拍手)

ただいかんせん、マスコミにいる女性があまりにも少なすぎます。ミニコミも大切ですが、マスコミのなかにももっと女性が入って頑張っていたかなければ。

途中で退める人がすごく多いですよ。いやになっちゃって。最近の若い人は忍耐力がなさすぎますよ。我々は均等法も育休法も何もないときからやってきたんですよ。今の若い人は甘すぎますよ。すぐに華やかな記事を書かせてもらえないから、とか、派手な署名入りの記事が書きたいとか。そういうことを含めて女性にも失望しています。

ですから、私は頑張っていますし、今後も頑張りますから。私の場で(拍手)。自分がたまたま与えられた場の中で、私の限られた能力の中でベストを尽くしてやるしかない。みんなが社会の中のそれぞれの場でベストを尽くしてやる。それ以外ですよ。しようがないんです。やりましょう。(大拍手)

斎藤さん 下村さんがおっしゃったとおり、マスコミはマスコミの、ミニコミはミニコミの、それぞれの苦勞と喜びがあり、それぞれの役割があります。私は今まであまり苦勞話をしなかったので今日は苦勞話をしましたが、男社会の権化のようなマスメディアの中で、「忍」の一字で働

き続けていらした下村さんや増田さんのご苦勞は、計り知れないものがあると、いつも感じ入っています。私の健康をご案じ下さったけど、私はお二方はじめ各方面でご活躍の方のご健康をいつもほんとにご案じています。

今日は涙が出るくらい——實際涙が出たんですが——みなさんからたくさんの方の応援歌をいただいたんですけれども、同時にマスメディアの中の女性も応援して下さいと申し上げたい。マスメディアの中で非常に少数者として働いている女性を私はいつでも援護して支持したいという気持ちでいっぱいです。そうでないと、世の中、変えられないんですね。私たちがどんなに無力かということとはもう百も千も承知です。百も千も承知でも、この灯は消せないと思うから続けていますが、どんなに微力か。部数で言えば四十分の一、インパクトからすれば一億分の一。歴然と差はあるんですね。だからマスメディアにも頑張ってもらいたい。さっきのご発言も、下村さんや増田さんへの応援歌としておっしゃったと思います。

入口で売っている『あこら一七五号』にも書きましたけど、女たちで、宇宙衛星の放送局でも持たなければだめだ、と私は本当に思っているんです。それくらいのことを考えなければ、この国際的な、重層的な腐敗の構造は、ひっくり返せない。非常に危機的な状況にあると思います。少なくとも女は女を裏切らず、足を引っぱらず、ますます助け合って力を尽くしたいと思います。今日はたくさんの方々に過分なおことばを頂いて恐縮しました。斎藤の名をあげて下さいましたのは、〈あこら〉にかかわったたくさんの方々の代名詞として「斎藤」とおっしゃって下さったものと、そのたくさんの方々に代わってお礼を申しあげます。

私の健康につきましては実は二年前にも手術をいたしましたして、その時はたいへん場所が悪かつ

たものですから、一巻の終わりかなと、最初から関わって下さっているみなさんに、万一の時はよろしく、と申し上げたのですね。そしたらどの方も、「心配しないで。灯は消しませんよ」と（拍手）。私はなんて幸せな人間だろうと思って手術台上がりました。今後のことは、ですから全く心配は要らないと思います。

本当にとってもうれしい、と思うのは、やっぱり二十年間で人が育っています。花を咲かせるよりも、大地に根を張ることをしっかりやりたいと思い、そうやってきたつもりでしたが、たしかに根を張っています。これから茎です。（拍手）

しまさん いままでごいっしょした時間を全部共有したうえで一言ですが、私たちはもっと自己否定することに強くなりたい、と思います。まだまだ本物でない。へあごろを甘やかしちゃいけない、という感じで、まだまだへあごろ、駄目なんです、と言いたいですし、この私も本当に駄目。そういうことを言います根拠としては、本当に肯定的な意味での無常感、それは私たちにとって何だろうということを取り入れないとグラつくな、という危険を感じました。ありがとうございます。（拍手）

福田さん 締めくくりになるかどうかわかりませんが、実はこのへあごろ二十周年の会を開きます時に、開くか開かないか、というところから、ずいぶん討論いたしまして、私は反対だったんですね。と申しますのは、こういう席上で必ず斎藤さんが誉められます。誉められると斎藤さんは異常に張り切る（笑）。これはほめ殺しに近い（笑）。本当に張り切る方ですので

どほどにしていたきたい、と念じていたのですが、さっきは涙が出るような半田さんのたいへんなお誉めのことがありました。

それからその前に小島さんのほうから、拠点からのミニコミの限界の話がありましたけれども、小島さんはまさしく風呂敷数づつみに『あごら』をしょって売り歩いた方です。そういう情熱の持主でございまして。

今まで私ども、いろいろやってきました。しかし考えてみますと、フェミニズムの運動がこれだけ拡がってきたということは、やはりマスコミの中にこれだけ立派な女性の方がいらっしやって、送り手としての大きな役割をしょって下さったからだろう、とそのこともたいへん大きな評価につながると思う。

それから、もうひとつは、斎藤さんを支えていらっしやる事務局のみなさんですね。この雑誌を出し続けるということは、並大抵でない、ただごとでない、たいへんな苦勞です（拍手）。その苦勞をしょっていらっしやいます事務局のみなさんに拍手をお送りいただきたい、と思います（拍手）（拍手）（拍手）。今後ともみなさん、よろしくお願いしたいと思います。

今日はとてもいい勉強になりました。最初二十周年は特集号を出せばいい、会は不要だと申しましたが、こんなにいい会ができましたこと、みなさまのご協力の賜物だと思っています。へあごら」の課題は山積ですけれども、みなさまの支えによってひとつひとつクリアしていきたいな、と考えております。しかし、しんどいですね。若い勇気を奮い起こして、これからの世代交代がどうぞうまくいきますように願ってやみません。以上でございまして。（拍手）





重原さん では続きまして、二十周年にちなみ、女性解放にお力ぞえ下さいました方に、〈あごろ〉から感謝状をお送りします。〈あごろ〉が二十周年続きましたのは、はかりしれないほどたくさんの方がお心を寄せて下さったからですが、私どもの先輩のお力もたいへん大きかったと思います。感謝状をお贈りしたい方は山ほどいらっしゃると思いますが、財政上の問題もあり、今回は、田中寿美子先生お一人にお礼の言葉と粗品をお贈りすることにしました。先生はいま札幌で治療中ですので、代わりに〈婦人問題懇話会〉事務局長の駒野陽子さんにお渡しします。

(駒野さん、壇上に)

齋藤さん (感謝状を読み上げる)

駒野陽子さん (感謝状を受け取って) 田中先生に代わってお礼を申し上げます。さっそく田中先生のところにお送りします。先生は婦人問題の研究者として、山川菊栄先生とともに一九六二年、三十年前に〈婦人問題懇話会〉を創立されました。その創立メンバーの一人が、齋藤さんです。田中先生は、今のご文面にあったように、労働省婦人少年局長から国会議員になられ、社会党の副委員長としても活躍なさった方ですが、女性問題、福祉の問題一筋にお尽くしくできました。私は齋藤さんより少し遅れて〈懇話会〉に入り、そこで、女性問題の基礎的なことから勉強させて

頂きました。後に「へあごら」が発足してから、「へあごら」の会員にもなりましたが、その両方の会をお導き下さった田中先生に心から感謝申し上げます。（拍手）

斎藤さん いま駒野さんがおっしゃいましたように、私や駒野さんは、山川先生や田中先生の、いわば門下生です。発足当時の「懇話会」は、労働、主婦、農村婦人、福祉、女性史の五つの分科会があり、山川先生や田中先生はそれぞれの分科会に小まめに出席されて、親しくご指導下さいました。どの分科会もたいへん勉強になりましたが、それにもまして私にとって勉強になりましたのは役員会でした。田中先生は、よくご自宅で役員会を開かれ、手料理でもてなして下さいました。お料理もたいへんお上手でしたが、お姑さんに仕込まれたというマナーも厳しく、こはんのよそい方一つでも、細かくご注意下さったことをなつかしく思い出します。

『あごら』を創刊するにあたって、私は内心では「懇話会」のメンバーと一緒に雑誌をつくることができたなら……という思いがありました。『懇話会会報』も別にありますので遠慮しました。それでも一種の分派活動のように非難した方もありましたが、田中先生は変わらずご支援くださり、将来の女性運動を担うグループとして、「行動を起こす女たちの会」とともに「へあごら」を市川房枝先生にご紹介下さいました。そして後に、先生ご自身も「へあごら」の会員に加わって下さり、『ジュスマ・マンシュルさん物語』ご出版に際しましては、「へあごら」の活動資金に役立てるようにと、五十冊も寄付して下さいました。

「へあごら」を始めて、さまざまな困難に遭うたびに、私はいつも先輩の方々のご苦勞を思います。私どもの時代でさえ、たくさんの方々の困難がありました。まして先輩の方々は、どんなご苦勞をなさ

っただろう、と……。多くの先輩が踏み固めて下さった道の上にへあごろの路も開かれたことを、決して忘れてはならないと、いつも自分に言い聞かせています。この感謝状は田中先生にお贈りするとともに、天上の山川先生、市川先生はじめ、たくさんの方にもお目にかけたいと思います。なお、記念品としては、寒冷の地で療養中の先生に羽織って頂きたく、ベストとシヨールを会員の萩原有希さんが今、ひと針ひと針心をこめて編んでいるところです。（拍手）

重原さん ではこれで第二部を終わります。締めのごあいさつを斎藤さん、どうぞ。

斎藤さん 今日の壇上の皆さんは、小島サカエさんのご想像どおり、全員会員で、友情出演です。格別お忙しい方ばかりですのに、ほんとうにありがとうございます。また全国各地からおいで下さいました会場の皆様、ありがとうございます。

ごらんのように、へあごろはりっぱに根づきました。でも、足りないところも山ほどあります。ほんの小指の先ほどでも、お力を貸して、育ててください。しまさんがおっしゃったとおり、フェミニズムにも害はあります。へあごろを甘やかしすぎるのもいけません。寒さも塩も与えて下さることをお願いします。（拍手）

なお、先ほど、私の健康について皆様からいろいろご発言がありましたので、この際申し上げます。実は病名はがんですが、どうぞ驚かないで下さい。今は、すぐ死ぬ病気ではありません。がんだからこそガンガン生きようと思っています。富山妙子さんとも話し合ったことですが、私たち戦争をかいま見た人間は、生きて

生きて生き抜いて、証言を続けなければならないと思っています。

また一人のがん患者としても、少しでも長く生き続けることの意味を感じています。自分がないってみて、この病気がたいへん差別されている病気だということがよくわかりました。そのためにも、私は、エイズであろうとがんであると、きちんと名乗り、働ける限り働きたいと思っています。ただ、これまでのような無理はしませんので、ご安心くださいますよう。（拍手）

重原さん この後は、出口で、お弁当と飲み物をお渡しします。萩原有希さんと柴田頼子さんからのカンパのビールなど召し上がってご歓談ください。

第三部は六時から、このホールで、「みんなで話そう」。『高群逸枝研究』などで皆様ご存じの河野信子さんも九州から駆けつけてくださいました。近況報告、PR、なんでもご自由にご発言ください。（拍手）

### 十月末日まで、在庫本半額特価セール！

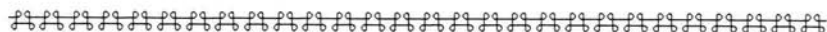
発行資金づくりのため、在庫既刊を会員の方に限り半額で、また78年1号―170号までのセット（途中、欠番あり）は、総額六万三、六六四円のところ、二万五千円でお領ちします。

地域・出身校・PTA等の図書館用にもどうぞ。

（在庫数がごくわずかのものもありますので、お申し込みはお早めどうぞ）

# みんなで 話そう





★プログラムから★

みんなで話そう！ いま言わずにはいられない——女と男の言いたい放題  
フェミニズムの先駆者として高名な河野信子さんが福岡から、反PKO候補を女  
たちでかつぎ出して当選させた畠山裕子さんが広島から……その他、各地各様の  
おもしろ発言・カゲキ発言……。乞うご期待!! あなたもぜひ一言を……。

高橋ますみさん（司会）

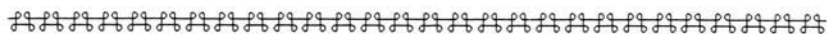


今日のこれからのテーマ『みんなで語ろう』は、本音で語ろうという  
ことです。それぞれ言いたい放題を言ってください。そこで受け止めた人  
が、それぞれ地域に持ち帰って、またいろんな形で問題解決に進んでいけ  
るんではないかと思います。午後の会は格調が高かったような気がします  
が、これからは、ビールでよい気分になったところで、ゆるやかなお気  
持ちでお話しいただけたらと思います。

最初に話の糸口として問題提起をお三方に願います。最初に河野信子さん。九州で女性史  
の研究をしている方という以上にフェミニズムの火をともした方として、皆さんご記憶なさって  
いらっしゃると思います。次に金住典子さん。弁護士として東京でご活躍で、私も講演を聞かせ  
ていただいております。そして外口玉子さん。国会でご活躍と、名古屋の私もじゅうぶんに存じ  
あげております。じゃ、河野さんのご紹介を小島さんをお願いします。（拍手）

小島サカエさん（副司会）

ビールの余勢で軽やかに楽しくとのことでしたが、私もちょうとビ



ールをたしなんでまいりましたので、もういい気持ちになつております。そのいい気分で河野信子さんをご紹介します。河野さんは、お酒を飲んでも悪酔いじゃなくて、非常にいい醗酵の仕方をなさるすばらしい方でございまして、本をたくさんお出しになつておられます。『夢劫の人』『高群逸枝』『近代女性史精神史』『家族幻想』。そして女のミニコミ『無名通信』を一九六七年から八二年までずっと出し続けていらつしゃいます。このたいへんすばらしい通信を出しながら、みんなに勇気を与え運動のあり方の指針ともなるような運動をご自身でもなさいました。一九六八年から七二年まで福岡に板付という米軍の基地がございまして、いろんな弊害がありましたのを、たったお一人で、そこから米軍基地が撤退するまで、一人声高にお叫びになるわけでもなく、ずっと反対の意志を長くお示しになり続けた方でもございます。では河野さんどうぞ。(拍手)



河野信子さん いまへ嘘をつく法について考えています。「統計で嘘をつく法」とか、「写真で嘘をつく法」とかいったさまざまな研究もございしますが、私がいま考えていますのは、「すべて事は、半分だけ語るならば嘘になる」といった面です。

ここで、ひとつの例を出させていただきます。私が、折にふれてこの例を出すものですから、「あいつまた言ったぞ」と、なりかねぬものですが「半分語られた嘘」として、私の胸にきざまれていますので。

一九三〇年代にマーガレット・ミードが調査いたしましたニューギニアのアラベシ族とムンドグモ族のことです。（文献はマーガレット・ミード著『男性と女性』上、田中寿美子・加藤秀俊訳 東京創元社 現代社会科学叢書 一九六一年）

このふたつの族は、おなじニューギニアに住んでいて、どうして、こうも異なった文化を発展させてしまったのかと、驚かされるものです。

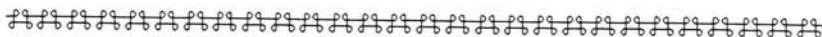
ユアット川の食人種であるムンドグモ族は、流れの速い川のほとりに住んでいるにもかかわらず、川にまつわる伝承はひとつも持っていないといった驚くべき資質を発展させました。

この部族の女性には実によく働きます。働いて男たちを養っています。それで男たちは、何をしているかといいますが、近くの部族に戦争をしかけることばかり考えています。女たちは猛烈に働くものですから、男も女も、子たちを育てるのが大嫌いなのです。このさまをミードは、授乳の姿から見抜いています。

アラベシ族は、対照的な資質を持っていて、男たちも女たちも「人間から豚・椰子にいたるまで」育てることが大好きで、人たるもの隣人を助けるのが使命であると思ひ込んでいる部族です。ただこんなことをしていると、そのうちに滅びるであろうと、自ら考えているのですが、生来やさしいもので、育てたり助けたりすることをやめることができないとしています。

時折、ムンドグモ族のことがテレビなどで紹介されるのですが、「ムンドグモ族の女たちは実によく働いて、男たちを養っている」といった紹介だけで終わります。その結果、男たちが戦争ばかり仕掛けていたといったことは、いっさい語られません。これも嘘つき術のひとつでしょう。いま森崎和江さんたちと福岡県の女性史を編集していますが、森崎さんが、「異文化としての





女性」ということをよくおっしゃいます。たしかによく見てみますと、男たちと女たちとは、集団の作り方から、その集団を維持する方法まで、どこか異なっています。まあ、歴史というもの、**「男の側からの嘘つき術」と「女の側からの嘘つき術」を大真面目で、「これぞ、まことの事実を記録したもの」といって、半分だけ語っているのかもわかりません。半分語りの迫力が、人びとを捲き込んでいきます。そこで私もこれからは、「半分語りの嘘つき術」にはじまる、「嘘つき術」を身につけるにはどうしたらよいか、などと、あらぬことを考えています。**

まとまらぬ話をするのは、一種性癖のようなものでございまして、おつきあいくださいませ、ありがとうございます。(拍手)

**高橋** ありがとうございます。一生懸命ウソをつくということ、これから私も本気になって一回考えてみようと思います。今度は、金住典子さん。女性の個人的な人権に関しても、社会構造の人権に対してもたいへんご活躍です。



**金住典子さん** 久しぶりに、今日、なつかしい方々にお目にかかれてたいへんうれしかったんです。さきほど駒野さんが、**〈あごろ九州〉**の福田さんとうち三十年来のお付き合いだとおっしゃっているのを聞いて、**〈あごろ〉**というのはいろいろな方とご縁で結ばれているんだなあとつくづく思いました。かく言う私も駒野さんと、**〈女の人権と性〉**というグループ活動を通してもう十年からの深いご縁なんです。他には青木やよひさんやヤンソン由美子さん、丸

本百合子さんなど十人のフェミニストの女性たちで、墮胎罪・優生保護法を廃止して、中絶の自己決定権を基本にした新しい女性のための「健康保障法」をつくらうと、長い間大変熱心に研究活動が続けてきました。このグループの活動スタイルとへあごろのそれとがよく似ていることを感じる事ができて、今日はとても嬉しく思いました。

実は、私はたまたま国際婦人年の一九七五年に、婦人協同法律事務所を開いたんです。当時も今も司法試験の合格者は五百名ほどで変化はないんですが、女性の合格者の数は当時わずか二十名ほどでしたが、今では七十人近く、一割を超えるようになったんですから隔世の感があります。人数が少ないと特別扱いされていますから、当たり前の人間として、自分らしい仕事をする姿勢が育ちにくいですね。その意味では、女性の国会議員の方々を見ていると二十二年前に私が弁護士になった頃と似通っているのを感じます。

当時、先輩の女性弁護士の多くが、仕事と家庭の両立で精一杯だという話をよくされているのを聞いて、人権闘争の先頭に立たなくてはならない立場にいる女性法律家が、こういう発想をしていていいのだろうかと考えさせられました。むしろ法律家の女性も女性としての生き難さの状況は同じなのですが、ならば、女性として人間としての解放を求めて、真の人権の確立のために共に生き、共にたたかう生き方をしていかなければ、この状況を拓くことができないのではないかと深く考えて、私は事務所をひらいたんです。

その事務所開設の記念パーティーに、それまで一面識もなかったのに斎藤さんがかけつけてくださったんです。たぶん今から思えば、応援というより共感のお気持ちから出席してくださったのではないかと想像しています。

この二十周年のパーティーに参加させていただいてそう感じました。

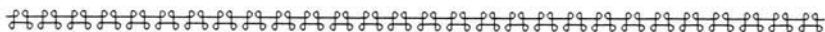
今日のⅠ部には残念ながら間に合わなかったんですが、Ⅱ部のみなさまのご発言を聞いていて、会場発言の方々も全部含めて、しみじみと、この十八年の間に、私たちはいい意味で、自己表現能力、自分の頭でものごとを考える力を確実につけてきているんだなあと実感させられました。私は、そのことが最も大切だと思い続けてきたものですから、いっそうその感を深くしました。

さっき斎藤さんが挨拶なさって、「斎藤千代という名前をみなさんが使ってください（へあごら〜）と言わず斎藤さん、と多くの方が言っておられたことを指している）」と恐縮されていたが、そのこと自体、へあごら〜が組織主義的なスタイルをとってきていないこと、斎藤さんがへあごら〜という組織のボスになろうとしてこなかったことを証明しているように私には感じられます。組織主義的なスタイルをとると個人はその組織の手段になってしまいますから、個人の主体性を豊かに育てることや対等な関係をつくることは不可能になってしまいうんですね。

さっき増田れい子さんが、「これからが大切」とおっしゃっていましたが、私にこれといったビジョンがあるわけではないのですが、内外の政治状況が大きな転換の時を迎えているこの時に、つい走り出したい衝動にかられるんですが、今の私は、「（衝動的には）動くまい」と深く心に誓っています。

この十八年間に私は、タテマエの立派さに目がくらんで何かをやることの愚かさを、いやというほど体験させられました。個人を育てることを大切にしない活動スタイルでは、ほんとうにたかう力を育てることはできないということをしっかり学んだと思います。

たとえば、今度の金丸問題でも、誰がこの政治批判の動きの突破口を開いたかというところ、やは



りあの青島さんの自分の命を賭けての個人としての怒り、表現だったと思うんですね。そういうものでなければ、今の政治にしろけきった国民の心に火を点けることはできなかったんじゃないかと思うんです。そういうマスではない、「私」の怒りや意思を自己表現していく。自分を大切にすることが他人を大切にするんだという生き方のスタイルにこだわっていく。組織とか権力が主体になるスタイルは互いを利用しあい、傷つけあい、人間不信を育てていきますが、個人と個人の対等な関係からつくりだされる共感と信頼から生まれる力を発見できれば、共に生きて闘うことが楽しいし、人を好きにもなる。そういうスタイルを大切にする人々の存在を、今日、あら二十周年のこの会場で確認できたことがなによりも私には深い喜びでした。(拍手)

**高橋** ほんとに元気の出るお話でしたね。ありがとうございます。一人ひとりが考えて、自己表現し、そして共感しあう。それが新しい力になって、世界また社会を変えていける。元気がわいてくるお話をうかがいました。では続いて外口玉子さん、どうぞ。

**外口玉子さん** 皆さま、こんばんは。ほんとうになごやかな心温まる時間を一緒に過ごさせていだいてありがとうございます。



私はいま国会という世界中で最も男性論理の支配している、最も精神衛生に悪いところにありますので、こういう所にやってくると、ふだん自分が構えている肩の張りがスーッとおりてくるような、とても心休まる思いです。

二年八か月前、女性グループの後押しで、長年地域でじつくりと活動してきた女たちのエネルギーを吸いながら、時代に後押しされて、あるいは時代から呼び出しをかけられたという感じで、国政の場に出向きました。ところが、出ましたその年に湾岸戦争です。そこから、にわかに日本の自衛隊の問題、憲法改正の問題が声高に言われはじめました。あの時、斎藤さんはじめここにいる多くの仲間たちが連日、運動の先頭に立ち、国会の中の闘いを後押ししていただきました。『国際平和協力法案』として出された時、そのきな臭さにいち早く立ち上がったのは、女性グループ、市民グループの仲間たちでした。PKO法が強行可決された過程で、私は日本の戦後の歩みが厳しく問われたという思い、しきりでした。まさに国会の中で民主主義が踏みにじられ、男同士の馴れ合いと国対政治の駆け引きの中で、民意を代表すべき私たちがほんろうされつづけている、その無力感と怒りがあのととき頂点に達しました。第二次世界大戦の反省をふまえて「非戦の誓い」をしたはずの日本の私たち、その意思表示をするための「言論と行動」を封じ込まれ、平和憲法をなし崩しにされていく状況に大きな危機感を覚えて、ここで歯止めをかけなければと思いました。

幸い丑年生まれですので、本物の牛歩をいたしました（笑）。ところがその後になって、あの戦術は間違いだったということが同じ党の仲間から言われてしまう。そのなだれ方にまた怒りを新たにしています。今後とも私はこだわり続けたいと思います。

振り返ってみますと、あの湾岸戦争のときには、女性議員としては超党派で四十二名もの署名が一気に集まるだけの「良識」が健在でした。そして私は他の党の代表の方と一緒に、その署名をもって十二時間後にはニューヨークの国連に飛び立ち、デクエアル事務総長に武力の行使の即

刻中止と地上戦開始の回避を直接会って要求することが可能だったのです。しかし、それから一年後には、女性議員としてのアイデンティティーは失われてしまい、普通の感覚をもつ女性たちが国政の場に登場したことの意味がなくなりつつあるのです。それほどに一人ひとりがこの時代の大きな節目にあって問われているという状況にあるのを毎日ひしひしと感じています。根元から変えていかなければならない正念場だなという思いをしているところです。（拍手）

そこに、今度の「佐川」事件が明るみにできました。まさに私たちには想像もできない、庶民感覚と全くずれたお金が動き、それが日本の政治を動かしている、それが堂々とまかり通っているのです。

もう一つ是非伝えたいことがあります。国会がはじまる前日まで、私は土井たか子前社会党委員長、清水澄子さん、竹村泰子さんと一緒に戦後補償対策特別委員会のメンバーとしてアジアの国々に直接出かけて行って、実情の調査をして参りました。そこでは、儒教の国の女性が元従軍慰安婦だと名乗り出ることがどんなに大変かという現実を肌を感じながら、その勇気ある女性たちと直接話し合いました。そして改めて、アジアの女性たちとのネットワークを作っていくことの重要さを確認しているところです。戦後補償特別委員会の活動は、まさにあのPKO法の闘いの裏打ちになるものだと思います。PKO法をあんな形ですんなり“人的貢献”という“美名”の下に通さしてしまったということは、戦後四十七年、私たちがきちんと戦争責任をまとめ、戦後補償をしてこなかったことに起因しているのだと思います。勇気をもって名乗り出た隣国の女性たちを支えるしくみをつくり、一人ひとりの声に耳を傾け、戦争責任をはっきりさせ、国の責任において償うことを政府に迫りながら、そして日本人の一人ひとりの戦後を問いながら、私は

これからも「P K O 法」の実質的な阻止を、諦めずに続けて参りたいと思っています。

韓国、台湾の女性たちに続いて、インドネシアでもフィリピンでも、女性たちが名乗り出てくださっています。女性たちのこのような草の根的なネットワークづくりが時代を切り開いていく大きな力になるのだと、ますます信じてことができます。そのような地道な取り組みを続けてきている女性たちに後押しされながら国政に取り組めることを、私は大変に誇りに思っています。

今こそ、衆議院解散を要求し、国民に信を問わなければならぬ時であるはずで、そのような時に有権者が政治不信をもち、しらけきってしまったことが私には悲しく残念でなりません。選挙は一人ひとりの有権者が自分の意志を具体的に活かすきわめて政治的な場面だと真っ正面から受け止め、皆さんといつでも闘う用意があるという決意をここで伝えたいと思います。

実は、私は最初の頃はもう骨抜きにされた今の立法院の一員であることにうんざりし、二度と立候補したくないとさえ思いました。議員になる前までは「障害者」が地域で当たり前で住み続けられるまちづくり運動を当事者たちと続けてきていましたから、その人たちに支えられながら「世直し」をやってきていたので、余りにも違う現実の政治の世界に入ってしまったてずいぶんと悩みました。でもこの頃は、だからこそ普通の人たちの声を国政に活かしていくために頑張ろうという決意を固め、二期目の挑戦への覚悟をつけたところです。これからこそ頑張りたいという気持ちを皆さんにお伝えして、共に歩んでいきたいという誓いの言葉とさせていただきます。どうもありがとうございます。（拍手）

高橋 パンチのきいたお話でしたね。私たちも政治腐敗は決して許さない。頑張ってください。

では、これからは、みなさんに日頃お考えのことを、好きなようにお話をしていただきたいと思ひます。お話をして下さる方がもしなかったら、シーンとしちゃうんで、せっかくのへあごろ二十周年、これからというとき、困ったなあと思ひまして、フロアで会う人ごとに「頼むから発言して下さい」と言ったら、だれも「へんな心配しなくていいよ、みんな言うんだから」と言つて下さいましたので、サクラを頼むことは止めました（笑）。それで、その期待を裏切らないように、みなさん発言していただきたいと思ひます。それぞれがお考えのことをご自由に。あとその結論とかそういうのは、それぞれの地域とか、グループとか、個人に持ち帰っていただければいいので、前に出て来て、日頃していращやることをご紹介の上で、お話ししていただけたら嬉しいと思ひます。どうしてもいやな方は大声でパスとおっしゃればいいんで（笑）、そういう自由もあっていいと思ひます。で、ここでバトンタッチをしますので、あとはリレー式で、よろしく。

羽向喜久子さん　こんばんは。真宗大谷派（東本願寺）の僧侶をしています。十五周年の時にはじめてまいりました。今回はすこし体調を崩していましたが、今朝になってどうしても行きたいと出かけて来ました。やっぱり元氣を分けてもらったような氣がします。十五周年に一緒に来た藤谷不三枝さんは、果敢に過激に、男社会である教団と地域社会の中で頑張ってたんですが、住職継承を拒否されて、いま非常にたいへんな立場にあります。そのため彼女は来れませんでした。『あごろ』の130号に彼女の文が紹介されていますから見て下さい。

今、私がやってるのは、仏教の中の女性差別問題です。今までの仏教は女性を差別してまいりました。女性も等しく救われるというふうに言つた法然も親鸞も、それでもやはり女性が一度男



に変わって救われるというような論法です。釈尊から始まって教典が成立し、翻訳されていく過程を、男たちが全部やってきたため、男の目でしか女を捉えていない。仏道修行の上で魅力的な女性たちが邪魔でしかなかったものですから、女たちに目を向けないようにするために、一生懸命、女を悪者にしてきたと思います。教団成立から現在までの、教え、教団、教化の内容実態を、女の目で捉え直して、変えていきたいと思っています。寺に住む女たちやご門徒の女たち（男もおります）が、六年前に「真宗大谷派における女性差別を考える女たちの会」をつくりました。女性が資格をもつていても住職になれない、代務者にしかなれない問題については、去年改正されましたが、これがなんとどこを見回しても「男の有資格者がいない時に、女性は住職になれる」というものなのです。ともかく一応の成果だと見て一段落の教団の中で、今後どのようにして闘うか、やんわりと男たちを引き入れるか、考えているところです。

今日もお話に出てましたけれども、やっぱり男たちってきたんですね。仲間うちでも、とことんやってきますね。私、体の調子の悪い時にやられて、ちょっとウツ状態になってしまったんですけれども、やはり女たちが組んで対抗するしかないと思っています。

真宗大谷派というのは、親鸞の教えに依る宗派で、全国にたくさんのご門徒がいらっしゃる。みなさんいろいろな考えになっておられても、お葬式とかご法事とか、お寺に頼まれることがあるかもしれません。その時にはよく気をつけておいて下さい。本願寺派（西）は女が男になって成仏するという和讃を使わないように通達を出しております。けれども、大谷派では女の葬儀の時使います。使わなければすむ問題ではないけれど、私たちがいくら声をからしても、教団レベルの問題にならないのです。また法要におまいりされますと、お文（ふみ）《西ではこ

文章（ぶんしょう）》という連如の書いたお手紙が読めますが、その中に五障三従（ごしょうさんしょう）の女人（にょにん）、男にまさりて罪の深き女人（にょにん）という言葉が出て来ることがあります。あとからでも、それはどういふことでしょうか、どうお考えですか、とか、聞いたり、意見を言っていたくださるいふん変わってくると思います。

宗教に対して曖昧だったり、人まかせの態度は靖国裁判判決などにつながってしまいますから、厳禁だと思います。（拍手）

国沢静子さんへあちら二十周年おめでとうございます。私は活動分野別で二つ名前があります。一つは「主婦戦線」国沢静子です。河野信子さんとは『女・エロス』誌上で一緒にすることがあり、今日はじめてお目にかかれました。

私もかなり年になりました。十五周年は祝電ですましてしまいましたが、二十周年は直接おめでとうございますと言いたくて、さっきまで馬券を売っていたのですが、組合事務所でピラを作る予定を急ぎ変更してこちらへまいりました。

いまパート未組織労働者連絡会支部の書記長をしています。こちらの名前は山口静子です。「主婦戦線」の一部として女の「労働問題」をやってきました。まず二十年前、夫の収入で生きる主婦の甘えだと中傷を受けながら、パートの税金の問題を市川房枝先生に紹介議員になっていただきました。

当時で無税限度額を百万円として出しました。現在いくらほしいかと言えば二百万円です。これには給与所得控除を現行の倍額以上にしなければならぬ。つまり全給与所得者の共通の基礎

控除の問題です。女性総体の賃金の低さは、パートの時給の無税限度額に連動しているためです。現在力を入れているのは、一九八〇年の労基法改悪反対運動が壊滅状態の中で、一つ労基法三十九条だけはパートにも多少の年次有給休暇が出るということの推進です。通常の労働者が二十一年で二十日休暇のところ、私は週二日の所定労働で年六日の年休となります。しかし労働省の解釈云々に便乗する使用者のため、折角のパートの年休も画餅になりそうなため、いま六日分の賃金カットを請求する裁判の当該者となっています。

栗山れい子、高嶋ゆかり両弁護士に支援していただいているので、最高裁までがんばり、私が死ねば子に請求権をひきつぎ、二十一世紀になって勝ちたいと思っています。

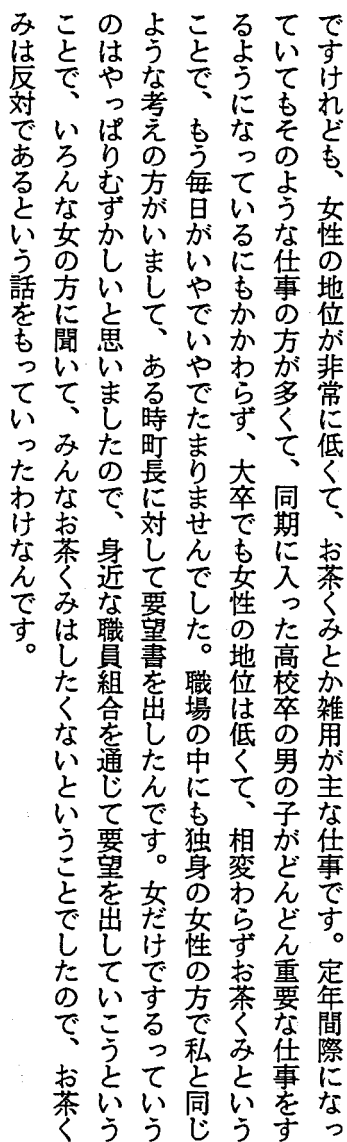
七〇年代から見ればいま様々な運動が低迷していますが、皆様二十一世紀を見据えて、頑張っていきましょう。(拍手)

鈴木昌子さん すいません、こういう場でお話することめったにないもんですから、あまり上手く言えるかどうかわかりませんけれども、よろしく願います。

静岡からまいりました読者だけの会員で、皆様方の活動をお聞きしてお恥ずかしい次第だなどいうふうに思っているわけです。ですけれど一言だけ、ぜひ訴えたいと思うんです。

私、学校の事務職員をしております。なぜ事務職員になりましたかといいますと、それがへあごろしを知るようになったきっかけとなったと言えるでしょうか。

私、十六年前に静岡県の田舎の町役場の職員に採用されました。大学を卒業して結婚と同時に採用になったわけです。その役場が非常に封建的なところで、——役場ばかりではないと思うん



118

今日、毎日新聞の編集委員をなさっていた増田れい子さんがいらっしやいましたけれど、「女のしんぶん」が出た時に、第一回か第三回の時に、お茶くみの件で投書をしたんです。そしたらそれを取り上げて下さいました。その後学校事務職員になってしまったということも、実は書いて出したいなあとずっと思ってたんですけども、私自身子育てとかいろいろありましたので、そういうことができずにきてしまいました。今日はほんとうに、日頃の保守的な中であって、こういったみなさんの活気あふれる場に来させていただいて、嬉しく思ってます。なにぶんにも、こういう場ではあがるほうなものですから、お聞きとりにくかったかと思えますけれども。（拍手）

高橋 どうもありがとうございます。とってもよくわかりました。自信を持ってこれからも主張されたら大丈夫だと思います。私とあなたとは二十年ぐらいの年の違いがあると思いますが、お茶くみの問題は、今から三十年前に私が仕事につきました時も反対運動したのです。それが未だに解決していないというのは、へあごろ二十周年どころか、三十年も、各地、各職場での私たちの孤立した点々とした活動があったのに、それぞれが潰されてしまうのでしょうか。ひどい場合は見せしめにさえなっていました。どうして私たちはそういう時に連なることができなかったのだろうかと反省します。

こういう場ということは簡単なんです、みんなが同じ志を持つてから勢いのいいことも言えるし、そうだそうだとやるんだけど、それぞれの地域に帰るとシエーンとなってしまうのではほんとに残念です。なんとかしてへあごろという活動体の中でひとつ問題提起をしたら、その町長に向かって脅迫状を出すぐらいの（笑）それぐらいの勢いをこれからは持っていかなけ

ればいけないですネ。さっきのパートの問題にしても、百万円は前にはたいへんなお金だったかもしれないですけど、今はもう百万円突破平気というのか、そういう働き方をしていかなければ、と実感しています。（拍手）

藤村明美さん はじめまして。今回初めて集会に参加させていただきました。はずかしいのですが、へあごらんの会の内容を、今日初めて教えていただきました。

実は、私たちは会社の中の組合の婦人部をやっておりまして、婦人部が出来たのはまだ新しいものですから、いろんな所で勉強させていただいて、婦人部を盛り上げていこうとやっている段階なのです。うちの組合自体はまだ若い組合で、女性の平均年齢も二十四か五です。会社自体もいまだに封建的などころがあります、最初に入る時から結婚したら辞めるように、暗に言われるというようなこともあるようですし、女性の中でも、三年ぐらいすれば辞めるんだという考えの方がいまだに多いので、婦人部としても、活動したくてもなかなかみんなの意見がまとまらず、たいへん苦労しております。

こちらに参加させていただいて、皆さまのすごいエネルギーを感じました。先輩方がここまで頑張って下さっているのだということがわかって、ほんとうに心強いのですが、それをこれからどうやって受け継いでいって、みんなでこういう運動を高めていったらいいのかというのが、今のところまだはっきり方法としてわからない面がありますので、またいろいろとそういう部分を教えていただければと思います。よろしくお願いいたします。（拍手）

高橋 ありがとうございます。へあへあゝの会員にはおなりになりましたか(笑)。ぜひへあへあゝにお入り下さい(笑)。ほかの女性のグループでもかまわないですけど、連帯していけたらと思います。(拍手)

梅谷知子さん はじめまして。梅谷と申します。隣の藤村さんと同じで、医薬品メーカーの労働組合の中で婦人部の活動をしてるのですが、先程も話が出ましたように、医薬品メーカーという所は、みなさんが思っている以上に封建的な部分がまだ残ってます。先程出たお茶くみの話などについてもやはり問題が残っており、また給料についても明らかに差があると感じるのですが、査定の範囲の問題と言われ、多くは表面上は言えない状況です。その中でどうやって女性の地位を上げていけばいいのかなあ、と考えこんでしまいます。

また若い女性が多く、女子社員自身にも問題があります。たとえば、かなり甘い考え方で働いている女子社員がいるため、「どうせ女性は」と、一生懸命やっている人が認められないとか…。組合の中でも女子社員で活動している人間が少なく、組合自体も男子社会になっていきます。最近やっと組合の中で少しは言いたいことが言えるようになってきたなあという感じです。労働組合といえどもやりにくい状況で、もっといっしょに活動してくれる人が増えたらなあと思って頑張っています。また、いろいろなと教えていただけることがあると思いますので、よろしくお願いいたします。(拍手)

永井操子さん 足立区からまいりました永井と申します。今お茶くみの問題とかいろいろ出てき

ましたけれども、私は勤めて三十一年になるんです。働きはじめたのは三十年前ですから、女性であるというのはほんとうにものすごく厳しくて、怒り心頭にきて組合活動もずっとしてきたんです。私は女子大出ですから、あんまり女の壁みたいなもの、女性差別は学生時代感じてなくて職場へ出て初めて、ああ、すごいって、許せないと思った時に、へあごろと出会っているんですね。ですから、最初からの読者ではあるんです。へあごろでのお手伝いはなかなかできないんですけれども、へあごろからいただいたもの、すごくたくさんある……。私、すごく勇気づけられたし、職場の中でも頑張ってこれたなっていうふうに思うんです。

婦人部をずっと続けてきて、お茶くみ問題もやったけれども、決して一致できることではないんですね。私の経験から言えば、やりたい人ってのは、いくら方針出しても必ずやってしまう。だから、やらない人がすごく浮いてしまうみたいなことがありました。私は、これはダメだと思って、やりたい人はおやんなさいよと言いました。傍にいてやめなさいなんて言えないもんですから。しかも、お茶を入れてくれる女に対して男ってすごくやさしいですから（笑）。事実女の人も本気になって「私がいれたお茶、おいしいって言われた」と言って、えらい喜んでいる。私、それでカーッときて、「同じお茶で同じ温度でいれてどこがうまいんだあ」なんて、言っちゃったんだけど、それですごく女の人からも反撥受けてます。でも「私は、いれない。制服も着ない」っていうふうに言って、一人で頑張ってます（拍手）。だから特殊な女だっているふうには私は思われてるけど、ストレスたまないし、とってもやりいいですよ。特別な女だと思われているから、私には「お茶いれて」なんて絶対言いませんからね。だから一人でも頑張れるなら頑張っちゃおうと思ってるし、少なくとも「いやだな」と思ってる女が、「やっぱり私も少し



やってみようかな」なんて思ってくればそれでいいし、もうあと六年しかないから、最後まで頑張っちゃおうと思ってます。（拍手）

最初は少ししんどいですがけれども、少なくとも頑張れば頑張れるんです。そのことで、私をクビにすることないだろうと思うし、こんなに差別するんなら、そうか、腹くくって私も他でやりたいことをやってやろうじゃないかっていうんで、いろんな所に顔出しますけれども、それでもバランスよく生きられる。女がもうちょっと生きやすくなるために、あと少し頑張ってみようかなと思ってます。（拍手）

高橋 藤村さん、梅谷さん、永井さん、ありがとうございます。元氣が出ました。こういうお手本があるから、私たちもそれぞれ一人になった時にもやってみようという気になります。永井さんは、あと六年とかなんとかおっしゃいましたけど、そんなことなくて、とっても若くて、元氣できれいで輝いておられるので、いいお手本をちょうだいしたいという思いです。それでは女の問題、どんどんリレーで話し合っていきましょう。

福井浅子さん こんにちは。福井と申します。

へあごらには当初から、そうですね十何年ぐらいかかわって、今から四年ぐらい前にやめたんですね。それで今年二十周年というお知らせが来ましてね、ああ、もう二十周年をするようになったんだあと非常に感慨深く思いました。皆さん、どうも長いことご苦労でしたね。二十年を迎えられましておめでとございます。

『あこら』の昔からの号を見て、昔も今も続けてすごい内容豊富なものを出されるっていうのは、たいへんなことだなあとつくづく思ったんですね。最近の月刊はレベルも高いしね、そういう意味では素晴らしいなあと再び考えさせられましたね。非常に感慨深く思ってます。

現職は、都立新宿山吹高校の英語の教師ですけども、この学校は単位制高校で、非常にユニークなんです。卒業生は来年出します。落ちこぼれの生徒、登校拒否とか、家庭問題があるとか、そういう子どもたちが来てるんですけども、選択を自由にしてまして、服装も自由でよし、やることも自由です。お掃除もしなくてもいいし、というんで、生徒が非常にいきいきしてるんです。先生自身もいきいきしてる。だけど「いきいき」の内容を、文部省が敵視してるんでしょうね、事務的なことと研究と、両方全部先生におつかぶってきちゃうんです。そういう意味ですごく仕事はたいへんです。オーバー労働になっちゃうんですが、いきいきとできること、ある程度教材を選択できるということで、今頑張ってるんです。

去年は進学校、都立西高にいましたけども、進学校ではもうほんとうにきまりきったコースで受験コースですから、点をどれくらい取ればどこの学校へ行けるっていう考え方の生徒が多いんですけども、山吹高校は、点よりむしろ人間性を大切にするような教育方針を立てておりますので、日本の教育を見直しているところです。何十年と高校教師やってきたけども、日本の教育は今までのような普通教育高校でのやり方だったらダメだなあと思ってたんですよ。特に東京の高校を見た時に教育はダメだなあ、いい生徒が生まれないなって思ってたんです。ところが、山吹へ来てちょっと見直しましたね。これだったら個性的な生徒をこれからどんどん生み出す素地が出てきたという感じがするんですね。そういう点で先が少し明るくなったような気がしています。都

立高校にいましても、今までいやだいやだ、いつか辞めてやろうなんて思ってたんですね。こんな中で教育なんかできっこない、ほんとうの教育じゃないって思ってたんですけど、やっとちょっとぴりそんなきざしが出たかななんて感じがしています。

それから、〈へあごろ〉にお願いしたいのは、これから二十一世紀に向かって私も含めて年をとっていく人が増える、四人に一人は若い人たちが支えてくださるような高齢化社会が来るわけですから、『へあごろ』にも、老人向けのコーナーっていうのかな、リハビリテーションとか、お年を召していく方々の気持ちとか、そういうコーナーがあってもいいんじゃないかなあと思います。また、こういう『へあごろ』の雑誌を通して、いろんな若い方々が集まられるような会合ももっとできると素晴らしいなあと思っております。未来の発展を願っております。（拍手）

高橋 ありがとうございます。〈へあごろ〉が財政難だと非常に悩んだのは、福井さんが四年前に会員をやめられて、会費が入ってなかったということに今気がつきました。（笑と拍手）老人問題も、都立の山吹高校の素晴らしい教育も、ぜひ誌面で発表していただけたら問題提起になると思います。確かに『へあごろ』は老人特集、まだ出してませんね。ぜひライターとして企画者として参加されて、会費も納めていただきますよう、どうぞよろしく願います。（笑と拍手）

斎藤美栄子さん 港区の斎藤です。専門学校や自宅でちょっと英語を教えている、もうほんとうにベタベタの主婦です。

へBOCを始められたばかりの斎藤千代さんを訪れ、メンバー登録させていただいたのがきっかけで、『あごら』誌は、創刊号からずっとではいますが、ただ眺めて、ああ、まだ続いている、ああ、頑張って下さっていると思っただけで、自分では何もできずに今までできてしまいました。

なぜ何もできなかったかといいますと、「女子大生亡国論」などということを母校の先生がおっしゃり、「えっ」と思った女子大生同士集まって、語り合い、少し目覚めかけたのですが、女性就職難の折から、幸か不幸か結婚のほうに決まり、続いて三児出産。あっという間に先の見えないトンネルに入ってしまったからです。

「あなたがいろいろやるより、子育てに力を入れたほうがよっぽど効率がいい」と夫。また、彼はこうも言います。「『託児所に時間だから僕迎えに行かなければいけない、帰ります』だって、もううちの職場では、ああいう人は採りたくない」(笑)。同居の母には「あなたがあんな働く女性でなくてよかった」って言われてしまう(笑)。ですから、私、女性問題を考える時、一番ネックとなるのが夫と、その母、それを説き伏せられない自分と同類項の主婦たち、ということになります。実際、三人の子どもを通して知り合ったお母さん方と話しても、女性問題に限らず、へあごらでテーマとなるような話はほとんど出ませんね。下手に話すと座が白けるか、変人扱いされそう。そこで私にできることは、自分の子どもや生徒たちを男女別でなく、個性別に見て育てるとか、英語の勉強を通して、受験以後の、もっと広い世界に目を向けさせるといった程度のことくらいです。でも今日のプログラムに「絵を描く人は絵を、歌を歌う人は歌を、力に依じて運動する」とありまして、大いに勇気づけられました。

今日みたいに土曜日の夜遅くなったら、みなさん、お子さんどうしてるんだろうとか、お連れ合いの方はここにいらっしゃってることに賛成なのだろうかとか、いろいろ考え（笑）、とても雑念が湧くんです（笑）。なんかおかしい、とお母さん方も思ってるんです。自分の生活、これでいいのか、女の人これでいいのか、こんな政治家の日本でいいのかなどなど。そして何となくうつうつとしているのだけれども、こういう所へは来にくいし、会費七千二百円払うより子どもの塾のお金とか、そっちのほうが先で（笑）、みなさんバートのほうへ走られる。

へあごろゝ二十年たったけれども若い女性もまだ考えています。「総合職に入って自分の生活を犠牲にするか、お茶くみやってそこそこの結婚生活に入ろうか」と。

こういったみんなに、へあごろゝという広場で、女性や世界のこと考えてみよう、と誘いかけてゆきたいし、またそのためには、もう少しとつきやすい場や誌面が必要かな、とも思っています。

これまでのへあごろゝに感嘆し、これからの啓蒙を願っています。（拍手）

高橋 いろいろ私たちが悩んでいる本音のところを話していただいてありがとうございます。

鈴木喜久子さん 今、港区の方がご発言されたので、すごく嬉しかったんですけども、私は東京一区、衆議院の鈴木喜久子といいます。港区、新宿区、千代田区が選挙区です。私もずっと専業主婦でいました。そしてまだうら若い主婦のころ、テレビ局とか新聞とか、いろんな座談会に、ひっぱり出されて話をしたり、ひな壇に並んでモーニングショーみたいな時に、手をパチパチた

たいて、ちょっとインタビュー受けるとかあるでしょう、ああいうふうなのに出ていました。

あれはおしゃべりだからというので、座談会とかに、何回か引っ張り出されたら、モニターをしている主婦たちから、同じ主婦が何回も出るっていうのはおかしいと告発されました。私はこういう巨大……（笑）、ずっと生まれつき巨大であったんですけど、今ほどひどくはなかったんですが……（笑）目立ったんでしょね。私はほんとうにそれに腹が立ちました。主婦というのは使い捨てだという感じで言われたのです。私もそんなに立派に主婦業やってるわけではないけれども、そんなら私はもう主婦じゃない、きちんと名札が付いてる、そういうものになりたい。「主婦」って書かれるんじゃないくて、「ある者」になりたいと思った。さて、と考えて、子どもがちやうど学校へ行って仕上がったとこだったから、私も、と思って大学に行って、それからまたしばらくたって、ゼったい司法試験うけてやるぞと思って司法試験をうけたんですね。それで弁護士になって、またしばらくたって、二年九か月前に衆議院に当選したんです。司法試験はほんとに受からなくて受からなくて、七転八倒しながらやっと受かって弁護士になったのにいま弁護士をこっちに置いちゃって国政をやっています。

今日ここに来て言いたい放題言えるかなと思ったんですけど、みなさんのお話を聞いているとやはり主婦のあのころの感覚に戻りました。私もあのころ、いちずにやっただけですけども、みなさんのお話のように、各職場の中で非常に苦しんだり耐えたり、聞いたり、仲間を増やしたり、一人で頑張ろうと思うたりという形では、私はなかなか聞えなかった。自分はその出ちゃって自分の生きる場所を見つけようということばかりを考えてました。そりゃ苦労もして一生懸命やったけども、その場にとどまってそこを改善しようという努力が足りなかったというのは、私の

今の率直な反省の弁なんです。しかし、私たちは一生懸命やりましたから、弁護士はお蔭様で、もうほとんどそういう世界ではなくなつて、今年の司法試験などは女性が二割の合格者です。もう珍しがられる存在でもなければ、女性だから逆にちやほやされる世界でもなくなつて、実力のある者が実力通りの評価をされて、お金もうけもすれば、もしかしたらスキャンダルに巻き込まれる恐れもある、司法もそういった世界になつてきつ々あるところです。

ところが国会に行きましたら、そんなことはなくて、女性議員というのは人寄せパンダみたいに扱われることがあるのです。私は社会党ですけども、土井たか子さんが委員長であつたころには、女性が活躍する場もかなりありましたけれども、今はそれがだいふ狭められている。五人いたら一人は女がいなくちゃまずいだろうっていうことでほんの添え物としているだけの話で、ここに鈴木がいることの意味、鈴木はこの力を生かそうというような形ではなかなか使ってもらえない。こちらから一生懸命売り込んで、頑張つて、十に一つくらいはそれが届くということで、頑張っていますけども、やはりまだまだ政治の世界はそういう意味でも劣っている世界だなあと思っています。それで、私も頑張つて、今度の「佐川」の問題などは絶対法律的な知識もいることだし、女性の清潔な感覚も必要な部分だからということで、調査の特別委員会に入って、特別委員会の中で一生懸命頑張ってます（拍手）。ちょっと長くなってごめんなさい。昨日と一昨日、私は裁判所にずうとつめていました。佐川関係の刑事法廷をとにかく聞かなくちゃと思つて。これまで私は傍聴券をとって入ることはほとんどなかったんですけれども、昨日、一昨日は、傍聴人として入りました。五時間くらいカンヅメになつて、頭がポーンとしてきましたけれども、それでも頑張つてやりました。

「昨日は「うん?」と思ったんですが、検察官が要旨の告知というのをしました。証拠の記録の要旨を述べる場面で、普通は全文読み上げないんですが、一昨日は調書を中心に何が書いてあるかという部分を検察官が読みました。その中で皇民党がほめ殺しをして竹下さんが困っている、いろんな議員がなんとかしてくれ、と頼みに来たと、実名がポンポン出ました。その実名の竹下さんのあとで、金丸が三十億を出すからやめてくれと言ったとか、小淵だの梶山だのという名前も出ました。」

昨日は、違う被告人の法廷なんです。いろんな被告人がいるんですけど、別の事件として別々に扱います。そこで裁判官が証拠のひとつを「全文読んで下さい」と検察官に言いました。検察官、きょとんとしましたけど「読むんですか?」「読みます」「時間がかかってても?」「時間はいくら長くなってもいいですから、全部読んで下さい」。これは刑事訴訟法の基本で、それが原則。当然やらなければならないと刑事訴訟法に書いてあり、当然のことなんですけれども、いつもはそれを使わないで、要旨の告知という形で便法でやってるのを、全文読むように指示したわけです。そこで検察官が読みましたら、今度はその中に、小沢さんの名前も出てきた。小沢さんも金丸さんといっしょに会って、どうしよう、どうしよう、と。竹下さんが「なんか、俺は、もう総理大臣になれないんじゃないか」みたいな話をして、涙を流しあったという場面がほんとになまなましく文章で読まれました。小沢さんは何も言わずにただうろろ、おろおろするだけでしたというのが読み上げられました。これを聞いた私たちの大急ぎの報告は、本会議場で社会党の山下さんが代表質問をするというので出来上がっていた原稿の中に、一部さしかえて入れこめました。実にタイムリーに質問をすることができたわけです。こういったことができる



というのも、まさに法曹に、また政治に携わったからできた、嬉しいなあ、ということとは、昨日、一昨日の段階ではあったんです（拍手）。不正は許さないということで、これからも一生懸命やっけていきたいと思っています。（拍手）

うちでは夫が一人でご飯作って待っているし、私はこのごろ全然主婦をしていないから、ほんとうに申し訳ないと思うけども、うちのお父さん一人でご飯食べたり、今日は何時に帰ってくるのかを、お父さんが私に聞いたりするような生活がずっと続いていて（笑）、ご主人はどうされてるのかなというような質問があると、私みたいなのはもうまったくその辺のところは、ここ十年ほど捨ててしまったような生活になっているので、考えこみました。もう年をとってくるので、これからはもう少しお父さんと仲良く旅などする時間も取らせてもらいたいなあ、不可能かなあ、と思いながら毎日暮らしています。

つい長々と話してしまいました。暴力団と自民党の癒着のひどさを、決して許さないつもりです。新聞を見る時に、鈴木喜久子もこの下の方で一生懸命、鉛筆持って頑張ってかけずりまわっているんだという姿も、どうぞ想像していただきたいと思います。二期目も頑張ります。よろしくお願いします。（拍手）

高橋　なんか元気が沸いてきましたね。夜の部だけにご参加の方にご報告したいんですが、今日、午後の会合では、みんなで検察や裁判長にエールを送ろうというご提案があり、会場から盛んな拍手を受けていました。

鈴木さん 議員たちをリサーチして、一応そういう人たちの供述を取って、調書にしておけばよかったんですけど、たとえば小沢がおろおろしたっていうんだったら、あなたはおろおろしたんですかということを小沢さんにちゃんと確認してくればよかったんですけど、遠慮して国会議員にはしてないところが、検察官に少し不利だったんです。ですから、市民がしっかりお尻をたたいてください。私もさっそくプッシュします。(拍手)

高橋 主婦であっても、小さな職場であっても、そしてそこから弁護士になるのも代議士になるのも、女性にはいろんな可能性があるということを具体例で教えていただいたような気がいたします。ありがとうございます。

津野田八千代さん 名古屋から参加した津野田と申します。名古屋の〈ウイン女性企画〉の会員で、この春からは毎月出している情報誌の担当をしています。

九月号の本の紹介コーナーに『あごろ』を一冊紹介したいと思って、一七四号の『従軍慰安婦問題が突きつけるもの』を読みました。そこには、ニュースなどの情報からはとても得られない生々しい事実がたくさんあり、当時の彼女たちの思いやひきずっているもの、この本が出来るまでの皆さんの過程を想像して、自分自身の無知さかげんに、同じ女として情けなくなりました。人間としても情けなくなりました。

で、これを紹介した後、この知った思いをどうしようかと思っていた矢先に、隣に座っております中根さんから、『アリランの歌』という従軍慰安婦を扱った記録映画の会を開いて欲しいと

朴寿南監督から直接依頼された、どうしようと電話がかかってきました。私は、この『あゝら』を読んで、その思いをどこかに告げたかったし、誠に偶然でタイムリーでした。「それはやるっきゃないわよ、とにかく、知らなかったことを私は知った。だから、どこかにいる知らない人にもこれを知るきっかけになれば」というわけで、十二月に豊田市で映画会を企画しています。

四月から育児休業制度も始まり、形のうえでは男女の平等へと近づいています。でも底辺の問題として、“性”をきちんと見つめ直さねば上すべりを起こす、と前々から考えてきました。今、ここで、フェミニズムの視点から性を洗い出すのに、いいきっかけをもらったと感謝しながら、この映画会を成功させるべく、取り組んでいるところです。（拍手）

高橋 思いついたらすぐその地域でやる、するとそれを聞いた人がまたその聞いた地域で始める。女が二人、三人その気になって取り組めば、地域で何かちゃんとできる。それは私たちが、いろんな各地で経験してきたことだと思います。朴寿南さんは、私の二十年来のあこがれの方です。お二人のご成功をお祈りします。ほかの地域の方もどうぞよろしく。

佐久間洋子さん 津野田さんと二人で「アリランの歌」上映会を企画し、宣伝に走りまわっています。以前、『あゝら』に載ったときは中根洋子です。

「我等旧姓人」と称し、佐久間を名乗ったとき、どんな支障があるのか実験中です。もう一つ考えていることがあり、こちらへ参加しました。実は、私は豊田市に住んでおります。トヨタ自動車企業の城下町といわれるとおり、街全体が杜宅のようです。そこへ田嶋陽子さんが市主催の

講演会に来られることになったのです。

この豊田市と田嶋陽子さん……なんで？と思って、青少年女性課へ行って「田嶋陽子さんを呼ばれたのは、どういうところからですか？」と聞きました。そしたら「えっ？田嶋陽子さんでどんな人？」って（笑）、ぜんぜん知らないで、「そんな過激な人かね」って（笑）。「たけしの番組に出ていて、おもしろい人だというじゃないか」って言うんです。で、フタを開けてみたら、一日半で券が千八百席売り切れたんです。そこで、千八百人聞いた人がどういう感想を持っただろうかと、「思ったことをしゃべる会をやりたいんですけど」と青少年女性課にもちかけました。そしたら、会場を確保してくれて、内容はあんなたちがやってもいいという所までこぎつけました（拍手）。今日、田嶋先生にそのことをお話ししてアドバイスを受けたと思ってきました。青少年女性課がとってくれた百人の会場で、どれだけ来てくれるかわかりませんが、みんなの声を集めて、保守王国と言われる豊田市で、少しずつなんとか声を出せる場所が作っていったらなあって思っています。（拍手）

高橋　ありがとうございます。愛知県豊田市あたりもどんどん変わってきているということを感じていただけるんじゃないかと思います。田嶋さんのお話のあと、どんなふうに企業城下町の住民の意識改革になるか、私もとても楽しみにしております。

辻　和子さん　福岡の辻です。福岡でもへ朴先生の映画を見る会を以前いたしました。朴寿南さんとは、三十年くらい前からの親しい友人ですが、従軍慰安婦の問題というのは、全国的にも

起きております。九州では、男性の経験者がたいへん多いので、私たちは〈従軍慰安婦を考える会〉を結成しました。そこで電話での「従軍慰安婦一一〇番」をよびかけました。前線で従軍慰安婦に関わった男の人たちから、ずいぶんかかってきました。男の人たちの中にも「間違ったことだったけれども、自分たちはこういう形でやった」ということを、たいへん詳しく報告してくれる人もいまして、私たちは電話を受けたことで、自分たちが知らなかったことを知り、たいへんよい勉強になりました。その〈従軍慰安婦を考える会〉はまだ続いております。また勉強会もやろうと思っております。（拍手）

中島光子さん 二十周年おめでとうございます。私も、先程からお話が出ていますように、主婦になりたての頃は「あー」とか「わー」の名前は知っていましたが、あまり興味をもたずに過ごしておりました。斎藤さんが「あー」を始められた年齢に、ちょうどいま私はいるのですが、その当時のエネルギーはすごいものでしたね。「いつだってやりたいことがやれるわよ」と斎藤さんは私たちをワクワクした気分にならせてしまっています。

湾岸戦争でイラク入りした関係でおつきあいをさせていただいておりますが、湾岸からPKOへと、斎藤さんの行動はまさに地球市民。私は強行採決されたPKOに対して違憲訴訟を起こしていますが、日本の「おかしさ」に怒りは増すばかり。二十一世紀にむかって私たち一人ひとりが「あー」になれたらいいですね。それが人間が人間を大事にするひろば、平和のひろばになって、世界中のひろばになれたらいいですね。

「あー」すてきなひろば、これから一緒に。（拍手）

山本ひとみさん 武蔵野に住んでおります山本と申します。私は学生時代に『あごろ』を読んだことがあります。優性保護法改悪の問題だったかと思うんですが、斎藤千代さんと面識ができたのはつい最近でして、九月の終わりに山手教会で集会をやる際に、いろいろとアドバイスや直接的なお力添えをいただいて、PKO法の廃止と海外派兵反対運動をやっています。ここにいらっしゃる中島さんや中川さんとも一緒にやったんですが、今日みなさんにお伝えしたいなと思っています。十月一日から渋谷のハチ公前でやっている「金丸やめろ」のリレーハンスと署名宣伝活動をしているグループのことです。富山洋子さんですとか、〈戦争への道を許さない北・板橋・豊島の女たちの会〉とか、〈憲法を活かす学生〉の方とか、地方議員の有志など、いろんなグループが集まって〈佐川究明！ 学生・市民・議員の会〉を作ってやっているんですけども、私が非常に実感しているのは、あのように市民が直接的に立ち上がって、署名集めて行動していった、それが全国の怒りを持っている人たちの怒りに火をつけたというか、非常にアピールしたということです。怒っている人はとてもたくさんいらっしやっても、どうやって怒りを表しているかわからない、それでいろんな形で目に見える行動をしようということ、一か月少しやりまして、署名は四万数千集まりました。カンバも三百何十万円か集まっています。（拍手）

渋谷でやってるだけでも、こんなに大きな手応えがあるとは、私も思っています。大きな政党とか組合の動きは九、十月はにぶかったんですけども、今は社会党の方なんかもういぶん頑張ってるみたいで、たいへん心強いと思ってるんですが、そういう中でも市民がほんとうに今やらなければと立ち上がっていけば、政界のドンと言われた金丸さんをクビにする

こともできるんだと思っています。やっぱり、私たちはおかしいと思うことを怒り続けなくちゃいけないと思いますし、小沢さんや竹下さんもぜひ議員を辞職して責任をとらせるように働きかけをしないといけないと思っています。『あごろ』に内田雅敏さんが書いていましたけれども、今、社会党の中にも社民連の中にも他の政党の中にも、小沢さんと気脈を通じていて、憲法の改悪をしてもいいという人もいるそうなんです。そういう人たちに對抗して、市民の自発的な広い運動をおこしていかなければ、国会を動かすことはとてもできないと考えています。私も仕事をしていますから平日は参加できませんが、この会は、毎日夕方、四時から七時まで渋谷ハチ公前で宣伝活動をやってます。土・日は二時から六時までやってます。誰でも参加自由です。その会に入っていないなくても、自分のアピールしたいことを自由に発言できる場ですから、ぜひここにいらっしゃってる皆さんも、ご参加下さいますよう（拍手）。今が大きな政治の曲がり角だと思いますので、多くの方々と積極的に手を結びあっていけたらと思います。（拍手）

杉山次子さん　〈お産の学校〉をやっております杉山と申します。性の問題を扱う場合に、いろいろ理論的なことはわかってても、実際的なことなかなか難しゅうございまして、私としては、とにかく男性に性の問題を積極的に考えてもらおうということが、従軍慰安婦のような悲惨なことを起こさないものになるのではなからうかということがございまして、斎藤さんに教えていただきました。きましてラマーズ法の指導を始めました。

夫がお産に参加するということが、やはり男女の性のいちばんの根幹でございまして、生まれるところから夫が参加して、子育てにもタッチしてゆきますと、確かに男の人の命に対する感覚

が変わってきます。女の人は産む性として、もともと命に対する実感をしっかり体の中に持っていると思いますけれども、男の人は、女の人の性に対しても、人権そのものに対する感覚が非常に弱いですね。それが、生まれるところからずっと携わってきますと、確かに人間の命というものに対する思いが強くなっていきます。自分がこうしてかわいがって育てた女の子が、まったくモノのように扱われる、そういう世界に自分の女の子を出せるだろうか、ということが基本になります、他人に対するいたわりというのも育っていくと思いますので、一生懸命やっております。現在、私どもの講習会に来られますのは九五%ぐらいご主人とこいっしょでございます。そして、その中の七〇%ぐらいはお産に立ち会われます。そういう形で現在ではむしろお産に立ち会いたいために、学校にご夫婦で来られる方もありますし、私どもは日曜日にやりますから、ご主人だけで、奥さんは他で母親学級に出席できます。休日にご主人だけが参加されるという方もできております。十何年間かやってまいりました成果の一つでございます。

もう一つはぜんぜん違うのですが、地元の婦人関係の活動として、七三一部隊の展示会を進めております。新聞でご存知かと思いますが、私どもの地域のそばで、人骨が発掘されました、確かに石井部隊の根拠地であった跡地から出ているわけですね。ですから、それを日本人の原罪として認めていかなければいけない、と。ほんとうに少しの資料を見ただけでも私たちは胸が痛くなって、カンパはするけれども直接それにタッチするのはかなわないなあという感じがするんですけども、とにかくやらなければいけないことだということで、地元の者は頑張っております。全国的な展示をやっていく予定でございますから、どうぞ皆さまもご援助いただけるとありがたいと思います。(拍手)



高橋 人生の最初から両親が立ち会うことの意味をお話してくださいました。また日本人の原罪としての七三二部隊告発のご活躍ありがとうございます。『あごろ』の誌上でも、ぜひご発表いただきたいと思います。

森美恵子さん 名古屋から来ました森と申します。『ウイン女性企画』に加わっています。「結婚整理学セミナー」を昨日から開講しました。女性の置かれてある立場がまだまだわからないで結婚生活を続けていたり、離婚が社会に受け入れられていないということを問題にしています。それと個で生きるために経済的に立っていくためにはどうしたらいいか、基本的なところを、弁護士とかいろんな先生を呼びまして勉強しています。離婚をするに至るまでには精神的にすごい強い支えがいるんですね。うつ状態になったりとか、いろんな状況が起こりますので、精神科の先生の話も聞きました。私もこの企画を始めてシングルになりました。ほんとうにホヤホヤのシングルですが、二十一世紀にはもっともっと輝ける自分を作りたいと思っていますので、応援して下さい。（拍手）

羽後静子さん 横浜に住んでおります羽後です。『あごろ』の会員になって十二、三年になります。当時は夫の転勤で福岡市内に住んでまして、たまたま市川先生の映画を見て、目覚めるものがあり、それを主催した『あごろ』に入れていただいて、勉強会に参加させていただいたのが始まりです。そこで小島豊子さん、サカエさんや、三好さん、福田さんと勉強させていただいて、

それから夫の転勤で名古屋に行きました。三番目が生まれて一か月で転勤、名古屋はそれまで縁のない土地でしたので、子育てノイローゼのようになりまして、九州に帰りたいと思っておりましたけれども、たまたま九州の方から名古屋に高橋ますみさんという人がいるからということで、へあごら東海を頼って、ますみさんの仲間に入れていただいて、名古屋で五年間を楽しく過ごしました。だから私にとって第二のふるさととは名古屋で、高橋ますみさんのことを「お母さん」と言っております。それでまた転勤になりまして、横浜に現在は住んでおります。最近は地域のほうで忙しくって、新宿に顔を出してないので、斎藤さんにごあいさつに来ました。

新しい活動、新しいネットワークを進めていく上でも、『へあごら』で学んだこと、へあごらのネットワークの人たちから学んだことが、今でも心の支えになっています。斎藤さんには、これからご健康で、いいもの、素晴らしいものを書いていただきたいと思います。（拍手）

松浦美世さん 神奈川県秦野市からまいりました松浦と申します。私は今、秦野市で昨年十周年を迎えました「市民の学校実行委員会」の仲間にさせていた দিয়ে活動しています。斎藤千代さんが、私の母と学校の寮でルームメイトだったんです。千代さんが母の所に『へあごら』創刊号を送ってくださいまして、母が「私の学生時代のお友だちがこんな活動を始められたのよ。一度編集室に寄ってみたら」と言ってくれたことがあったのですが、お訪ねする機会もないまま過ごしてしまいました。結婚して秦野に住むようになり、「市民の学校」に私が参加する前に、斎藤さんが秦野に来て下さったことを記録集で知り、運命という大げさですが、深いご縁を感じました。きょう初めてお目にかかれて、とてもうれしい気持ちです。ご発展をお祈りします。

芦澤礼子さん 今回あこら二十周年の実行委員会に加わらせていただきました芦澤と申します。  
今日はとってもたくさんの方が来て下さって嬉しいですよ。ガラガラだったらどうしようかなと思  
ってたんですけども、ほんとうにたくさん来て下さってとっても嬉しいです。

私はへあこらの会員になってかれこれ三年くらいです。若輩なんですけども、へあこらと  
別にピースボートというのもやっております。ピースボートをご存知の方もいらっしゃると思  
いますが、今年は四月から五月にかけて「黄金アジアクルーズ」で、ホンコン、ベトナム、カンボ  
ジア、フィリピンに行き、中古ミシンですとか教科書用の紙、医療器具とか、たくさんの方の援助物  
資を持っていきました。その際に高橋ますみさんに、中古ミシンを集める時のアドバイスをいろ  
いろいただきました、ほんとうにありがとうございました。

今度は十二月の末から一月の初めにかけて、「南洋大航海」をやるということになっており  
ます。シンガポールから出航して、カンボジア、ベトナム、ブルネイ、インドネシアを回って、  
シンガポールに帰って来るという行程になっております。シンガポール発着ですので、日本から  
の援助物資は持って行けないんですけれども、カンボジア、ベトナムも今回入りますので、援  
助物資やお金がその後どう使われているかという追跡調査もやる予定であります。ブルネイでは  
陸つたいのマレーシア領のサラワクに入り、熱帯雨林の破壊の現状を見てこようというツアーも  
組んでおります。カンボジアでは、PKO監視オブショナルツアーということで、現地でタケオ  
に行き、自衛隊員に手紙を渡しちゃうという計画もあります。なかなか面白いクルーズになる  
と思いますのでご参加ください。

高橋 では最後に、あと一人、会場の片隅で、午後の部からずっとご熱心に耳を傾けておられた女性官僚にご発言いただきたいと思います。総理府婦人問題担当室長の堀内さんです。

堀内光子さん いまご紹介がございましたが、総理府で婦人問題を担当しております。今日はぜひ「おめでとう」と申し上げたくて伺わせていただきました。私、実はそれだけ申し上げるために伺ったんですけれども、今日みなさんのお話を伺いまして、政府が取り組んでいる婦人問題は力足らずだと、みなさんから批判いただくかもしれないかもしれませんが、ますますやらなきゃいけないと新たに思いました。たとえば私も採用試験で「お茶汲みはしますか」と質問を受けたこともありまして、とっても怒ったことを覚えております。ある時には試験官に「大学を卒業して入る男性も女性もお茶汲みは仕事なんですか」と反対に聞き返しました。今でも同じ問題があるというのを驚くとともに、これからまだまだやらなければならないことがたくさんあることを勉強させていただきました。

私は日本政府以外にも、国際連合に四年間勤務しまして、ナイロビ世界会議の時の事務局員をやっております。その時にNGOの方々が頑張って会議を盛り上げるといいますか、世界の女性の地位向上のための世論を盛り上げるのに大きな力になっていたのを目のあたりに見て、実は国連に勤務して初めてNGOの力を再認識した次第です。そういう意味で、ぜひみなさま方に頑張ってください、政府の方へも、ご批判なりご注文なりいただけたらと思っております。今日はおめでとうと言いに来ましたのに、私の発言の機会までいただきました、ほんとうにありがと

うございました。これから齋藤さんはじめみなさま方のご活躍をご期待申し上げます。

高橋 終了予定の時間が迫りましたので、小島サカエさんにボタンタッチをいたします。

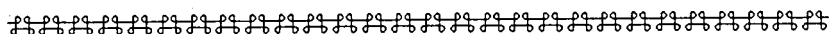
小島 ここにお手紙とか祝電がたくさん来ております。お心のこもった字、きれいな電報で、みなさまにお回ししたいところですが、時間もありませんので、その一部を福田さんと齋藤さんが紹介します。順不同です。

\*

「あこら20周年おめでとうございます。一九七〇年代、世界に呼応した日本のウーマンリブの潮流を支えてきたのは、〈あこら〉のみなさまと齋藤千代さんの熱い思いだった、と確信しています。これからのご健闘いただき女性の運動の炎を燃やし続けていただきたいと心から願っています。今夜はゆっくり祝杯を上げて下さい。私も遠隔の地で乾杯いたします」——舟本恵美さん——あの『女エロス』の舟本さんです。舟本さんや、『女エロス』の方々に、こちらからも乾杯！

\*

「あこら20年おめでとうございます。常に差別されている人の立場に立って、やさしいまなざしで女たちを励まし続けた地道な運動に心から敬意を表します。これからも、〈あこら〉での多くの女性たちとの出会いを広げていきましょう」——岡崎トミ子さん——いま衆議院議員で活躍。仙台の河北新報定年差別に、東北放送アウンサーとして、長年にわたり、それはそれは力を尽くして下さった方です。



\*

「20周年おめでとうございます。長い年月の活動の歴史に深く感動しています。これからも健康に留意され、ますますのご発展を祈っています。私たちのグループも今年十周年を迎えました。なにわの地で平和を願い、したたかに運動を続けます」——沢田和子さん——大阪の夕陽丘女性史グループの中心人物。〈あこら大阪〉のほか、地域の平和運動等でも素晴らしいご活動を続けておられます。

\*

「あこらの20周年を心からお祝い申し上げます。仕事のため出席できずとても残念です。ますますのご発展をお祈りいたします。お体もどうぞ大切に」——横浜の向後裕子さん——以前事務局を支えて下さり、裏方のご苦勞を重ねられたお一人です。

\*

「20周年おめでとうございます。今後のご発展を心からお祈り申し上げます」——高橋博さん——この方からは「祝成人式」と描きこまれたカステラもいただきました。

\*

「あこら20周年、早いものだと思う反面、女の細腕で（失礼）たおやかに、したたかに支えていらっしやったことを思い、頭が下がる感じです。私は今のところ非常に多忙で残念ながら出席できず、もう少し経たないとゆっくりお会いする機会もないと思いますけれども、心からお祝い申し上げます、ますますのご発展をお祈りします」——伊東すみ子さん——いま東京高裁でいつもすばらしい判決を出しておられる判事さんです。今は、お立場上、会員ではありませんが、『あこ

ら』創刊の時から、温かな支援を続けて下さいました。心の底のほんとにやさしい方です。

\*

「20周年おめでとうございます。いつも支えられています。今日は残念ながら欠席しますが、この危機の中、私もできるかぎり参加していくつもりですので、今日の欠席はお許しください。皆様によろしく」——斎藤耶寿古さん——英語教室での情熱的なお講義を覚えていらっしゃる方も多いでしょう。その頃は「靖子」という字を使っておられましたが、靖国の靖はイヤだと、今は「耶寿古」にお変えになりました。不戦・不差別の先頭に立っておられます。

\*

「あごろ20周年おめでとうございます。女性の視点に立って、つねに先鋭的、しかも着実な歩みを今日まで重ねてこられたことに心からの敬意を表したいと存じます。日本における女性の社会参加は、北欧や他の先進国に比べると、政治をはじめ、まだまだ低い水準ですが、この二十年間、目を見張るものがあります。〈あごろ〉の存在がどんなに大きな役割を果たしてきたかを、改めて思い起こしております。私が参議院議員として新しい人生の出版をしてから、もう三年が過ぎました。お年寄りも、若い人も、ハンディキャップをもつ人も、もたない人も、そして男性も女性も、誰もが人生の最後まで命輝く、そんな社会の創造を目指して、〈あごろ〉の皆さまと一緒にがんばってまいりたいと思います。出席できませんこと、本当に残念でございます——日下部禧代子さん——〈BOC〉の時代から、もう三十年近く、支え続けて下さいました。今は国會議員として、ご専門の福祉の分野でとくに活躍中です。

\*

「今日は残念ながら山形に行っておりませんので、参加できません。へあごろの活動にいつも勇気づけられております。これからへあごろが三十歳、四十歳となっていくまで私も共に歩んでいければと思います」——堂本曉子さん——土井さんにスカウトされて参議院議員に。TBSの時代から共に運動してきた仲間です。

\*

「女性の自己実現をめざし新しい歩みを始められたへあごろの二十年をお喜び申し上げます。自衛隊PKO部隊の海外派兵に反対し、佐川急便事件の徹底糾明の闘いを共にいたしました。二十一世紀に向かう女たちの、より美しく、より健康で、より知的な世界へ、新しい翼を大きく広げ、平和、そして生きる喜びを共に分かちあいましょー」——清水澄子さん——堂本さんと同じ時に参議院議員になられ、慰安婦問題などでも活躍です。

\*

「へあごろ創立20周年、成人式おめでとうございます。我がことのように嬉しゅうございます。誕生以来幾山河、いろいろな思い、喜びや壁があったことと思いますが、みなさまのご努力が実って今日のへあごろファミリーを作り上げたことを心から敬服申し上げ、お慶び申し上げます。駆けつきたいのはやまやまですが、ちょっと体の調子をくずしておりますので、ほんとうに残念千万ながら失礼させていただきます。プログラムも魅力いっぱいでございますので、内容はまた『あごろ』誌上で拝見できると楽しみにしております。ご準備にたいそうな時間とエネルギーを注がれたことと存じます。どうぞ大成功のうちに終わりますように。そしてこれを機会にへあごろの目指すところが、さらに広く、高く、多くの方々の方々の共感を得て発展されますよう、心から



祈っています。もう一度、”おめでとう”を申し上げます——九州の田辺幸子さん——RKBでご活躍、女性進出の道を開いて下さった大先輩です。折にふれて事務局にお菓子などを差し入れて、はげまし続けて下さいました。

\*

「20周年おめでとうございます。ここまでの道はたいへんだったことでしょう。今日はやはり関西で女たちが声を上げますところに招かれておりますので、出席できませんが、今後のご活躍をお祈りしております。ほんの少しずつですが、女の状況は変わっていきつつあります。お互いに最後まで生き延びて頑張りましょう」——画家の富山妙子さん。不戦・不差別を共に闘ってきた仲間です。

\*

「たいへん残念ながら集会重なって出席できません。ついになるように申し訳ありませんが、沖繩の号、五冊送って下さい」——京都の壽岳章子さん——いつもこんな調子でひょうひょうと支え続けて下さっています。

\*

「あこら20周年、元氣もりもりになりそうな魅力いっぱいの中で、ぜひ行きたいのですが、入学試験があり残念です。突風でも竜巻でもどんどん起こして、明日を作り出す女に名古屋の地から乾杯!! にぎやかに楽しい会でありますようにお祈りしております」——東邦短大の戒能民江さん。東海地方でいま人気急上昇中の女性学の先生です。

そのほか、内山茂子さん、小網愛子さん、塚崎美和子さん、藤崎恭子さん、中谷明子さん、三

浦文子さん、榎山幸子さん、ほか、たくさんの方々から、お心こもる祝電やお手紙をいただきました。

**小島** すばらしいお励ましをいろいろいただきまして、すごく元気がもりもりわいて来るような感じがいたします。田嶋陽子さんが面白フェミニズムということをおっしゃいましたけれど、何かを伝える時は、やはり楽しく面白く伝えていきたいですね。なんか堅苦しくて、「私たちわからない、ああいう難しい話は……」というふうにならないように、それぞれの地方のことばで、広島弁なり北海道弁なり、名古屋弁でも、今日のお話をお帰りになって、いろんな形で伝えていただきたいと思います。

先程から、斎藤さんのご苦労話がいろいろ出ておりましたけど、実は斎藤さんのことを存じ上げている九州の古老の一人が、「あの人はまあ、なんばしござあとな。もうしょちゅうばたばたして忙しかごたあばってん。まあ、すりゃするほどお金のうなっていくげな」(笑)「なんの仕事のありよるとかいな、あの人、なんばするごつとに、なんかのうなっていくちゃ、なんかならんかいなあ」と(笑)心配してました。私は何をなさっているのかなあとそうっと見ておりますと、女性問題、人権問題に一生懸命取り組んでいらっしゃるんですね。私もちよつとのぞきだんだん参加し、これはまあたいへんな所に入ってきたなあということでございますが(笑)、そのたいへんさを斎藤さんと共に担って来た方々。——さっき事務局の方たちに拍手で「ご苦労さま」がございましたけれども、そのほか、長い歲月、ほんとうにたくさんの方が支えて下さいました。その中でも二十年間、このたいへんなことを、一緒に支え続けている方をあらためてご

紹介したいと思います。

第三部の司会の高橋ますみさんを、まずご紹介いたします（拍手）。すばらしい方というのは重ねて申し上げるまでもありませんが、『四十歳からの出発』とか『主婦が歩き出すとき』『自立の夢をかたちに』などのご本のほか、講演もひっぱりだこなんですけど、初めてものをお書きになったのは広告紙の裏紙だったそうですね。ちょこちょことお書きになったのを、斎藤さんのところに送った、いくらかにはなるんではなかうかということでお書きになったというのが、いまや、ひっぱりだこの、人気作家です。また、ベトナムへミシンを五百台も集めて贈って、あちらの方たちの自立促進の協力をするなどのすばらしい活動家です。名古屋で〈東海BOC〉、そして〈ウイン女性企画〉を創立、地域の女性の自立にも心を尽くしておられます。こういうふうな〈あごろ〉に関わると、いつのまにかなっていく、なしてしまう斎藤さんのおそろしさというか（笑）、どういうところで幻惑させられるんだろうか（笑）と、改めて思っています。

高橋さんと一緒に〈あごろ〉をそっと支え続けて歩いていらしたのが、福田光子さん。いま祝電の紹介をなさった方です。（拍手）

福田さんは国立国会図書館に長年お勤めになりまして、〈BOC〉の時代から〈あごろ〉に関わってこられました。ご家族の都合で福岡にいらっしゃいまして、現在、純真女子短大教授ですが、ほんとに博学多才、静かな中に抜群の実行力があり、しかも謙虚な、得難い人物でいらっしゃいます。私は教わることはかりですが、一つだけ博多弁を教えました。ずいぶん上手になりましたけど、ちょっとイントネーションが狂うようなところもごさいますけれども（笑）、「博多にわか」を私とやってのけられるほどになりました。

お二人に共通して言えることは、学識が高いだけでなく、非常に人間の幅が広くて、ふところ深くあったかくて、そしてどっか抜けたところもある。でも噛めば噛むほど味がある。いくら噛んでもおやせになりませんが（笑）、この方々が先頭になって、斎藤さんを陰になり日向になつて、ほんとうによく支えて下さいました。よくお姿をこらして下さいませ。福田さん、高橋さん、このお二方が特にこれから支えていらっしゃるということでございますので、大船に乗った気持ちで、一人ひとりが一緒に歩んでいけば、〈あごろ〉もまたいろいろ発展していくんじゃないかと思つております。

ここにバラがありますけど、決してバラ色だけの二十年ではなくて、灰色になった日も、しばみかけた日もありました。それをこまかすためにバラを贈ったわけではなくて（笑）、生涯バラ色の気持ちを持つて明るい〈あごろ〉、皆さま明るいステキな人生であれかしという気持ちを込めました。どうぞお帰りの時、お忘れなくお持ちください。

今日はたくさんの方がお話し下さいましたけれど、一言もものを言えない人たちがたくさん地方にはおります。「モノを言いたかばってん、よござっしょうか」と、胸ふるわせながらやつと言葉を一言、二言、言われる人たちのいかに多いかということをお忘れにならないでほしいと思います。〈あごろ〉のやさしさ、そういう人たちを決しておろそかにしなかった、無名の人たちを決して見捨てなかった温かさ、やさしさを、この二十年のお礼と共にお誓いたしたいと思つております。ほんとうにどうもありがとうございます。（拍手）

斎藤 いまお話しくださった小島さんを、今度は私がご紹介します。「〈あごろ〉の大久保彦左

衛門」と言われている方です。ちょっとでも氣を抜いた『あゝ』をつくると、たちまち「何ばしょっと。居眠りしてござったか」(笑)と大雷が落ちます。こんな彦左衛門はほかにもたくさんおられ、やさしいからこそ怖い人が大勢いるのが「あゝ」のいいところではないかと思えます。ただメンバーに共通して言えるのは、みんなどこか抜けてるんですね。だけど、どこか涙ぐましいような、いじらしい、一生懸命なところがありましてね、私もほんとうに夜中に福田さんにもうやめましようとは何度も言っては、そのいじらしさに捨ててに捨てられず、なんか足を抜けないという感じで(笑)今までやってまいりましたけど、どうぞ末永くお付き合い下さいように。ほんとうにありがとうございます。(拍手)

高橋 ちょうど時間になりました。では皆さま、またお会いしましょうね。(拍手)

あゝ二十周年に寄せて——次の方々からたくさんのカンパをありがとうございました。

心からのお礼を申し上げます。(敬称略)

あゝ九州一同 石原豊子 伊東すみ子 内山茂子 遠藤むら子 大槻壽子 大村節代 大脇雅子 荻原有希  
岡田まき子 奥川 睦 金住典子 神戸明美 清野初美 日下部禰代子 小網愛子 後藤多見 駒野陽子  
斎藤千代 坂口 郁 沢田和子 しまようこ 下村満子 柴田頼子 杉山洋子 高橋ますみ 多田とよ子  
津田清子 鶴間文子 外口玉子 中島克子 中谷明子 中村道子 新田久子 根井 春 野本美智子  
半田たつ子 福田光子 藤崎恭子 保科朋子 堀内政子 三浦文子 水野清香 柳山幸子 山本環子

# あゝ二十一年に寄せて――

会員名簿を繰ってみても、お顔が浮かんでこない方もあります。遠くから静かに見守り続けて下さった方、かなりコミットして下さった方、会員ではないけれど、外側から視線を注いでいらっしゃる方……ランダムに、二百人の方に、ハガキ一枚のコメントをお願いしました。一週間という短い時間でしたのに、八十人以上の方からお返事が来ました。ハガキには書きつくせない、長いメッセージを下さった方もあります。そのままをお目にかけます。

(掲載はあいうえお順)

◆二十年近く前、主婦からの脱出をはかり、女性史の勉強を始めた私の前に立ち現れたのが「あゝ」だった。「あゝ」を読み、会合を重ねるうちに定まっていく女性問題への視点が、女性史研究のための指針となった。友人の輪が広がっていくのもうれしかった。「あゝ」は、私の女性史研究者としての誕生のための助産婦であった。

創刊以来の『あゝ』の背表紙を眺めていると、よくもこんなに女性についての問題があったものだと思う。これからは女性をめぐる問題は尽きることはないだろう。その

問題の中に生きている若い女性たちの再誕のために、今の「あゝ」は助産婦でありうるのだろうか。せひ、そうあってほしい。また二十年来つきあって来た私たちの世代にとっても変わらぬ友であってほしい。

(尾西市 浅野美和子)

◆あゝ20周年 おめでとうございます。

私も今年、三十歳を迎えますが、二十歳のころの自分を思い出すと、まだ学生でそれなりの悩みはあったのでしょうが、今から思うとナーンニモ考えていなかったような気

がしてなりません。社会に出てそれなりに苦勞をし、最近ようやく『あゝ』の内容を自分自身に引き寄せて読めるようになってきたと思います。二十代、三十代の読者ももっと増えるといいですね。あと男性の読者も。

(船橋市 芦澤礼子)

◆ちょっと古いのですが、最近、黒沢 明の「夢」を見ました。仕事と家庭とまだ小さい二男の世話で毎日あわただしく、頭の片スミに小さくなってあったことが一気にふくらみ、また何かしなくてはならないという氣になってしまいました。

十二年前長男が二歳の時もそう思い「あゝ」の会員になりました。ちなみに二男は今二歳です。

私は斎藤さんにほんとうのフェミニズムを教わりました。これからも私を取り巻くいろいろなものと、やさしく共存していきたいと思っています。あゝ二十年おめでとうございます。

(広島市 池田和子)

◆「あゝ」の成人式、遅ればせながらおめでとうございます。あゝがスタートの頃、少し関わらせていただいた者の一人として、嬉しくもまた大変懐かしくもあり、

正直のところ、複雑な感にふけております。

私自身、この間自立した女でありたいと願いながら二足三足のワラジを履き続け今に至っています。

ここ一、二年は、仕事人間として夢中で働いて来ましたが、そろそろ老後に向かって、どうソフトランディングさせてゆくかが課題となる年齢を迎えてしまいました。

「あゝ」に関わり出した頃は身のまわりのこと、全てが「女」の私にとって理不尽と思え、妥協してなるものかという思いが自分をつき動かしていたようです。

年を経るに従って、「思い」とは別にその行動や言葉が傍目からは「丸くなった」と言われるように変化してしまっただのが実情のようです。

それでも、毎回の『あゝ』は隅から隅まで目を通させていただき、その存在に熱いものを感じております。

今後の御健闘をお祈り致します。

(私は、やはり私自身の中なる思いを大切に頑張るつもりです) 皆様の御健康をお祈りします。

(春日部市 石崎雅子)

◆「あゝ」。そのお名前のとおり、女性の発言の拠点が全国に広がりましたね。

二十年！ 大変な歳月です！

ここまでの歩みに心から拍手を送ります。

さて、三十年に向けて、これからの〈あこら〉に関心を寄せています。

〈あこら〉がさらに広がり、深まりますように。

（東京・練馬区 井田恵子）

◆成人おめでとうございます。

光栄にも創刊号に書かせていただいて以来、お世話になっていきます。絶望という悲観に向かいがちな精神を、希望という楽観へと転換させる強い意志を励まし続け、行動へといざなう〈あこら〉の活動。それはシジフォスの神話を打ち砕く、実証の歴史です。継続は力。その力に頭が下がります。

心からの拍手と尊敬、感謝を申し上げ、二十一世紀へのハンドリングを共にクリアーしたいと思います。

（東京・千代田区 伊藤祐子）

◆20周年おめでとうございます。

数少ない女性のミディコミとして、これからも頑張ってください。期待しています。

（川崎市 井上輝子）

◆成人式を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

日々の暮らしの中で、腹をたてたり、頭かかえたり、自分の立っている位置がわからなくなったりの連続ですが、『あこら』に目を通すことで、時には熱い、時にはさわやかな、そして快活な風を送り届けられた気持ちにさせられています。

デモったりの元気のよさはないのですが『新潟女性史』を編んでゆくことで、『あこら』の心と通じてゆくのだろうと、じっくり、ゆっくり、ややあせってとろくんでいきます。

新潟女性センターオープン一年半。そこで私が所属する〈新潟女性史クラブ〉は三年後出版予定の新潟女性史年表と、写真集の仕事にとろくんでいきます。

（新潟市 植木知枝）

◆資料集も刊行され、リブも歴史になりました。継続は力です。今でも各地で「あこらの読者だ」と名のる人たちに会います。老舗 〈あこら〉のご健闘、お祈りします。

（京都市 上野千鶴子）

◆〈あこら〉のご成人おめでとうございます。

私が〈BOC〉の職員だった80〜82年の頃、〈戦争への



道を危惧し、戦争への道を許さない女たちの会」が超党的に呼びかけられ、〈あこら〉が事務局になったのを鮮明に覚えています。あれから十余年、まさかと思った自衛隊の海外派兵。プルトニウム輸送、改憲が大手をふってまかり通る時勢となりました。あの大戦から日本人は何も学んでこなかったのでしょうか？ 今の、危うい時代の気分に乗ってはいらないと思います。

しかし一方で明るい話題もあります。私が住んでいる浦和市では昨年十月に〈女性推進協議会〉が発足し、男女共同参画型社会へ向けてスタートをきりました。市民サイドからも運動を盛り立て提言しようと〈浦和の女性政策を考える会〉も発足しました。〈あこら〉で出会った仲間たちも参加しています。〈あこら〉の詩いた麦の種は、芽びいていると言ってよいのではないのでしょうか。刈り取るのは私たちより若い世代になりそうですが、先輩たちの足跡の偉大さに私たちが通じていると思えば感無量です。〈あこら〉の熟年ぶりが楽しみです。

(浦和市 大沢統子)

◆20周年、おめでとうございます。

『あこら』を愛読して、もう何年になるでしょうか。私の

本棚に沢山の『あこら』が並んでいます。一度読んだらもう御用済みとならない『あこら』は、私にとって貴重な存在です。

社会の動きをいち早くとらえ、適切に問題を提起しながら本を作るといふことのご苦労が体に伝わってくるのです。時には堅く、時にはやわらかく、しなやかに……。

最近では、各地方のグループ編集という形でお目にかかっておりますが、とてもすてきな発想だと思います。でも、時々、ちょっと首をかしげる言葉に出会うこともあります。例えば、文章の中に自然に出てくる執筆者の言葉「私の主人」などです。普段何気なく使っている言葉でも、やはり『あこら』に出てくると、大変気になります。一度、ことばのもつ意味を皆さんと一緒を考えてみてはどうでしょうか。

(堺市 大森英子)

◆あの時は、いてもたってもいられず埼玉県嵐山であった「あこら全国大会」へ行った。六年生の長男を連れて。高橋ますみさんの友達の東京のマンションへその子をあずけて。つれあいには「一泊のクラス会に行く」と。

夜中まで続いた分科会で女の本音を聞いた。こんないろ

いろいろ自由な考え方。同志だ、百万の味方、とうれしかった。かたちは少し違っているけど、今もあの時の路線の延長線上を走っているつもりです。生きる限り、私なりにがんばります。

(西尾市 岡部栄美香)

◆あこらの成人式！ おめでとうございます。

正々堂々と、同志の大打進となりました。今日の「あこら」が、現代女性の向上と幸を益々高く更に榮えて、次の世代にのびることだろうと思います。

若く潑刺とした今日の「あこら」を思う時、私たち老人の昔にも「あこら」と同じやうな先人の世界がありました。それ故に一人懐かしい好きな「あこら」でございます。

鳩山春子、与謝野晶子、柳原煙子、平塚らいてう、市川房枝、深尾須磨子、等々、その他一世を風靡した女性先覚者の大活躍、大嵐時代がありました。私たち当時の若者たちは、ちょうどその大嵐の旋風をもろに受け、躍り盡したことを懐かしく思い出します。

『現代女性の歩むべき道』といふ与謝野晶子の檄文に随喜の涙を流しながら読み耽ったものでした。時代が時代だっただけに大変だったことを思い出します。

時は流れ世も変わり、平成の今日、更に大きく、斎藤先生傘下の皆々様の思いきったご活躍の

「あこら」

心から嬉しく感慨深く快哉を叫びながら毎号嬉しく読ませていただいております。

いつの代にも、ご苦勞の先人あればこそ！と心から尊敬と感謝をこめて厚く御礼申し上げます。

皆様何卒お体を御大切に御発展をお祈り申し上げます。

(鹿児島市 岡元 節)

◆続けるということ、続くということ、すばらしいと思います。成人式おめでとうございます。

(東京・世田谷区 梶谷典子)

◆「PKO法「雑則」を広める会」のビラに、湾岸戦争、PKOの後の私たちが「しなやかにいきいきと生きる」ために云々とありますが、私はとてもむずかしいと思っています。『あこら』を創刊号から読み、一冊も処分はしていない者として、自衛隊が海外へ行くのを阻止できていたら二十年をもっとと評価できるのですが。

(保谷市 片岡陽子)

◆20周年、おめでとうございます。早いものですね。

私が初めて「あこら」の存在を知ったのは、学生時代―かれこれ十五年も前のことです。その頃、女性問題研究会を自主ゼミの形でやり、（もちろん、こういうことに首をつっこんでいるのは少数派でしたが）高群逸枝やボーボワールを読んでいた。威勢だけはよかったのですが、何もわかっていませんでした。

「あこら」の会員となったのは、それからずっと後で、就職し、ぶつかった現実の中で、「これは何か違うな」と居心地の悪さを感じるようになってからでした。フェミニスト英語教室で、ケリーやバーバラに英語を教わるとともに彼女たちのそれぞれ自分らしいさわやかな生き方をまぶしく思っていました。私自身はそれまですいぶん小さな枠の中でもがいていたのだなと気づき、自分を縛っていたものから、次第に自由になっていきました。ご一緒した森田さん、寺沢さん、山口さん、日置さん……。皆さん、お愛わないででしょうか。クリスマスに食べた森田さんお手製のターキーとタンの味、忘れられません。

新宿御苑前の事務所の扉を開けると、そこにはいつもあのやさしく柔らかな斎藤千代さんの笑顔があります。カリカリ・ドタバタしている私は「あ、もっと自然体でやれば

いいのだな」と思うのです。もちろん斎藤さんはそんなことは、一言もおっしゃるわけではありません。お忙しい時でも、ゆったりと穏やかで、きちんとしている斎藤さんの存在そのものが、私に何かを伝えてくれるのです。言葉以上の説得力のあるすごさです。いつ訪ねても、本が山と積まれた「あこら」で、居心地の悪い思いをしたことはありません。

「あこら」での出会いは、私の生き方に関わるほど大きなものでした。私が三十代になり、周囲から「どうにパスに乗り遅れた」とあきられ、あきらめられ（一体何を!?）たにもかかわらず、本人は、心豊かに楽しくやってきています。いろいろな違う生き方があって素敵なのだと、「あこら」で出会った人々によって知り、自分流のやり方に自信がもてたようです。様々な出会いや別れを経て、妥協せずにきてよかったと思っています。

私にとって、最良のパートナーとも出会いました。世間の思惑（そんなものの実体はないのに、重く心にのしかかることもあるようです）や、既成概念にとらわれないで、私の生き方を続けてきたからこそ、今があるのだと思います。パートナーのGは、そうじ・せんたく・りょうりすべて自

分でこなしします。私よりずっときちんとしていて手際もいいです。価値観も似ていて、社会的関心も高く、いろいろな問題や人生について、しょっちゅう議論します。そして、何もなくても、二人で一緒に楽しく遊べます。けれども、お互い仕事をもつ身。週の半分は、それぞれの仕事場近くで暮らし、休日や互いの仕事の都合のつく限り、共に過ごします。二人でいて豊かな時を過ごすには、自分のためだけの時間を大切にする必要があると思います。この年になって、学生時代のように、自分が読んで感動した本を相手も読んで、二人で生き生きと語り合えることになるとは思いませんでした。時には『あごら』の従軍慰安婦に関する記事を見せて、話すこともあります。これからも刺激を与えあっていくつもりです。

冒頭、20周年と簡単に言ってしまいましたが、考えてみると、実際は、とてもたいへんだったと思います。こうやって『あごら』の成人を喜べるのも、事務局の方々、先輩の方々のおかげだと思います。やはり、時代は確実に変わってきたと実感しています。

初めの頃、『あごら』のことを話すと「私はそういうのは、ちょっと……」と言われ、「何それ。何もおかしなこ

とじゃないのに」と思ったことも、しばしば。フェミニズムに関心があることは、全体として、愚かしく可愛いげのないことだという雰囲気がありました。自分たちの歴史を知らず、きちんとした現実認識をもとうとしない態度のほうか、愚かで、あやういと思うのですが。

『あごら』は一つの姿勢を崩すことなく黙々とやってきて、今では、きちんと評価されるようになりました。とてもうれしいことです。時代は動き、女性の生き方の選択の幅もますます広がるでしょう。

同時に、こうした個人の生き方の充実の同一線上にある問題として、今後、地球規模での環境破壊や内戦、難民問題にも目を向けていく必要があると思います。

大人になった『あごら』とともに視野を広げて、考えを深めながら、歩んでいきたいと思っています。

(東京・渋谷区 神田真理子)

◆『あごら』20周年おめでとうございます。

練馬の『あごら・ジュニア』も、おかげさまで10周年を迎えることができました。

『あごら・ジュニア』、聞きなれない名前だと思いますが、一九八一年練馬の婦人学級で、斎藤千代さんを講師に迎え

での勉強会から始まった、小さな、小さな、学習サークルです(会員十七名)。普通の主婦が話すことを通して、女性の自立・解放・自己表現を目指し続けてきました。

そこには、いつも毎月の『あこら』誌があり、同じ女性同士の活動、ものの見方、とらえ方、考え方等、大いに参考にしなが、教科書としていつも身近にあったのです。今後は行動の伴う活動を目指し『あこら』の子ども、『あこらジュニア』になりたいと思っています。

活字の大きさ、とても読みやすく助かっています。

ますますのご活躍、ご活動、がんばって下さい。

(東京・練馬区 神戸明美)

◆『あこら』の成人式おめでとうございます。

斎藤千代さんはお元氣になられたでしょうか。一昨年は私の勤務校でお話を生徒へしていただきました。現在、教育現場では不登校(不登校傾向の予備軍がその背後に数限りなく存在しての公に発表される実数です)という生徒たちの反乱に悩み抜いています。現代の社会は学校の存在にもはや權威を認めていないのにもかかわらず、一方ではまるで学校が怠惰・無能であるゆえ、この状態を作りだしたように非難します。別便でお送りする資料を御覧下さい。

現代の子どもたちが如何に周りの世界に無関心に、また考えること、判断することをしていない日常に身をゆだねているかがお分かりでしょう。(彼女たちは成績も生活も平均的な集団(九五%進学)で、私は社会科としてかなり意識的に広くあらゆる事に問題提起してきたつもりです)。

『あこら』への一言でなく私の独り言でした』

(京都市 北垣由民子)

◆一九七五年から七六年にかけて、私は夫の留学に伴い、中国・北京から引越、米国マサチューセッツのケンブリッジに住んでいました。時は折しもフェミニズム運動の真つ盛り。各地で女の集会が開かれていて、私もできる限りの会に首をつっ込んでいました。ある日、夫が大学院の掲示板に「女性問題を話し合う日本の女集まりませんか」というチラシを見つけて、教えてくれました。呼びかけ主は、現在日本でフェミニスト・セラピストとして活躍の河野貴代美さんでした。他の数名の日本女性とで「ケンブリッジ、日本女性問題を考える会」を発足させ、日本研究のアメリカ人大学院生も加わって月一回の集まりを持ち、女性差別の構造、歴史、社会、生活面での現象、価値観等の勉強を重ねていました。そうして日本の女のグループと

も接点を持ちたいということになり、巡り合ったのは「あこら」でした。雑誌『あこら』の講読を始め、以来『あこら』は私の座右の友となり、その後再び北京―東京―ニューヨーク―香港―東京（現在）と移り住む先々に届いては、私を励まし、意識の持続を助けてくれ、もやもやとした気持ちの整理を手伝ってくれました。八一年―八三年には「あこら」事務局でお手伝いをさせていただき、そこで斎藤さんに出会って、多くのことを学び、支えていただきました。斎藤さんの支えで私は、結婚・出産で中断していた職業生活に復帰し、夫の発展や子どもの成長とは別のところで、自分自身のアイデンティティーを持ち続けたいと願っていた私は、外地にいる時、地球上の日本語人口を増やそうという意気込み、大望を持って日本語の講師を勤め、現在は、外資系の会社勤めをしています。今日の私は「あこら」なしでは考えられません。「あこら」は、いつもそばにいて、私の精神的バックボーンとなってくれました。そしてこれからもそうあり続けてくれることと思います。20周年おめでとうございます。斎藤さんのご健康、そして「あこら」の更なる進展、「あこら」にまつわる全ての方々のご健闘をお祈り致します。（東京都 北村三和子）

◆20周年おめでとうございます。

私が女性史に出会って、この春でちょうど二十年になります。「あこら」と同じ時代と時間を歩んできたことになりました。しかし、当時の私は「あこら」の存在を知るよしもなく、女性史の何たるかも知らないままの学びの旅立ちでした。

「あこら」との出会いには、斎藤千代さんとの出会いであり、新潟女性史の出版を最初に力づけていただいた時のことを思い出します。

私にとって、「あこら」は情報と資料の源であり、優生保護法関連の動きや国連婦人の十年も世界会議の様子も、行動計画等の条文も、「あこら」が伝えてくれました。それが力となり、行動に結びついていきました。

近年、あふれる情報とうすめられた情報の中から真実をみることがむずかしくなっています。こんな時こそ冷静な資料判断が必要と思います。資料源としての『あこら』に改めて期待しております。

新潟市女性センターの書棚にも『あこら』が並んでいます。二十年の歴史をきさんできた「あこら」がこれからも公平な目と女の目で問題提起し、女性たちを元気づけてく

ださいますように……。

(新潟市 倉元正子)

◆20周年〈へあごろ〉おめでとうございます。

私は、八、九年前の特集『へあごろ』に優生保護法の特集があったので、自分の資料(学習用)として使わせてもらったのを覚えております。活躍されていることは存じていたのですが、会員には、ほど遠い生活をしていました。

しかし、一昨年、斎藤千代さんのイラク報告会に参加して以来、宇部においでいただいたりして〈へあごろ〉とはおつきあいさせていただいております。

全国あちこちで会報を出しておられるのも、すばらしいなあと、指をくわえて見ております。今、グリーンコープの役員をしていて、時間の余裕が全くない中で、役員をやめたら、「うべ」でも会を作って、会報まで出してみたいなあ、という夢をもっております。今は、充電中かな、と思っております。会報は、それぞれのテーマが私にとってものすごくいい資料であり、次のエネルギーへの源にしております。どうぞ、これからも時事問題、女の問題、扱って下さい。いつか、私も皆様の仲間に加えていただきたく思っておりますので、よろしくお願い致します。

今、宇部では、ゴルフ場反対運動から市長リコール運動へと進んでいて、やっと署名簿作成段階までこぎつけ、受任者募集中です。自然保護運動から政治を変えようというところまできていて、毎日、バタバタと暮らしています。

(宇部市 小柴久子)

◆〈へあごろ〉20周年、おめでとうございます。そして〈へあごろ〉を軸とした様々な出会いに心から「ありがとう」と言わせて下さい。〈へあごろ〉前の私は、女(＝自分)が嫌いで、つっぱって、とんがった女でした。「女性差別? そんなの努力と実力が足りない女の言い訳よ。リブ? 女の集団ヒステリー、いやね」という思い込みでつっぱっていた生活が行き詰まった大学二年の秋、女性問題の本を読み始めたものの、どれも当時の自分を変える力にはならなかったのです。

〈へあごろ〉本誌を読んだとき、冷静でおだやかな、しかも説得力のある文章とよく整理された資料に圧倒されました。「これだ!」と直感して、弁護士の卵だった細木昌子さん(現:高石姓)にくっついて〈へあごろ札幌〉の例会に出るから、私は変わり始めました。「へえー、女だって話せるじゃない」↓「こういう気持ちって、私ひとりじゃなかっ

たのね!」↓「いいなあ、私もこういう女になりたい。こういう結婚ならしてみたい」↓……。

今春で、医者になり、今のつれあいと生活を始めて十年目です。私がライフワークと考えている「アル中」(「アルコール依存症」)からの回復と、私の「女役割中毒」からの回復は、プロセスがとても似ています。フェミニズムという生き方の芯を曲げずに、現場で仕事を続ける人間でありたい、と思っています。

へあこらにもう一度ありがとうございます。

(札幌市 小松ともみ)

◆成人式おめでとうございます。

斎藤さんとは日本婦人問題懇話会をずっとこいっしょにやってきました。へあこらも創立とともに私もメンバーに入れていただきました。

国連婦人の十年に先立って、女性の問題一筋にやってきた仲間です。懇話会もちょうど三十周年。同じ問題をそれぞれに力を協せてやってきたグループとして、これからもシスターフッドを深めていきましょう。

(日本婦人問題懇話会 駒野陽子)

◆あこら20年の集いに臨んで

前夜からの遠方組に斎藤さんが顔を出された。当日の打合せということで、私も参加させてもらった。そこでの手術後間もないという斎藤さんの気炎とそれを聞き取る奥川さん。世の中すごい人がいるとは思っていたが、驚いてしまった。

十七年前、女の生涯にこんなにも苦悩がつきまとうものかと思う時に、あさりにあさった本の中からようやく見出した斎藤千代さんの複雑な女の心理描写は私の感じている寂しさ、取りすがりたい本能を見事に描いていて、偉いと思った。そしてこの人に会うことを心に決め、一度へあこらを訪れた。女の生きるきびしさ、パワフルさ、愉快さ、静かな心の触れ合いは、印象深かった。そして、この度の出席も苦しさゆえにの行動だった。自分の絶望から、少しでもフェミニズムを心に持つ女性たちの触れ合い(共感)とパワーで、休まらない魂を元気づけよう…。(私にとって旅に添えられた三輪の花、本当にありがとうございました。心より感謝いたします)へあこらを通じて人間の美しさとしどろどろしていることを素直に語れる(私を含め)人々に愛着を持つと同時に、女が生きていることの根っこを知れば知る程、複雑さと悲しみがこみ上げてくる。



けれど、財政難の今となっても、我が「へあこら」は私に一種の精神力を注いでくれている。

(山口県 斎藤貞子)

◆六〇年代を生き延びて、二十年間も火をともしつづけた「へあこら」は、すばらしいと思います。女性には、男性がいとも呼ぶならわしのマドンナに対してひどく辛辣な批判を集中して、マドンナに後続の女性を送らないのが悪い。家の世帯はかかでもつ、かかのいもじ(おこし)はひもでもつ、ひものしらみはしわでもつ、だそうですが、かかよ、家の世帯だけでなく、天下のしよたいもかかでもたなきやならない。権力の中核が男ばかりで、たまたマドンナなのはよくない。権力の中核に女を送ろう。

(東京都豊島区 斎藤耶寿古)

◆「へあこら」二十歳おめでとうございます。『あこら』誌を思い返しつづ……心細い思いをされたこともあったのでしようが、全国各地のネットワークも出来てきた今、とてもユニークな活動ぶりが伝わってきます。

「へあこら」というと、平和・反戦と社会的マイノリティの視点が強く印象づけられています。社会的マイノリティと

しての女がとらえる問題の一つ一つが的確で鮮明です。これからも期待しています。

(水戸市 酒井はるみ)

◆20周年おめでとうございます。

私は大阪市立婦人会館で二年間近代女性史を学び、そのメンバーで「夕陽丘女性グループ」を結成、昨年十年を迎え、女性と平和の問題を中心に活動をしています。十一年前『戦争と女性』を書店で見つけ、一晩で読み、深く感動し、即刻会員となりました。

『あこら』の毎月のニュースは、私の活動の大切な情報源です。斎藤さまをはじめ、スタッフの皆様にお礼申し上げます。

これからも、健康に留意され、私たち女性と平和のためにご活躍と、貴重なご意見を提供下さいますようお願いいたします。

(大阪府 夕陽丘女性史グループ 澤田和子)

◆国際婦人年の前後は全国的にも活気溢れるミニコミ誌が登場した時代でした。あれから二十年、「へあこら」はその主張を変えることなく、小さな魂を外へ向かって語り続けたのだと思っています。

二十年の重みをあらためて振り返り、これからも「あごろ」であってほしいと思っています。

(東京・港区 志熊敦子)

◆「あごろ」編集部の皆様、日夜女性向上のためにたいへんなご苦勞様、感謝敬服いたします。

「あごろ」との出会い、国連婦人最終年の七月に、団長だった元県議先輩から、帰国直後読んでみたらと紹介されたからのことです。「あごろ」の意味や、宗教・思想等、特定に偏らない等に共鳴した次第です。

時には投稿者の内容に私の意見と正反対の時もあります。特に法に関して感じますが、人間としての平等は大切です。しかし男・女は神から身体的に異なるよう与えられます。

近況二点

・市議リコール運動勝利、補選へ向け草の根運動で女性代表を送る準備中。

・来る三月六日(土)県美術館にて市川房枝氏の『八十七歳の青春』上映呼びかけ等、身近な小さな運動をしています。

(佐賀市 志津田谷子)

◆『あごろ』20年。ご苦勞さまでした。

発行しつづけていらした斎藤さんをはじめ、スタッフの皆様のご努力に感謝いたします。とともに、心から敬意を表したいと思います。

私が『あごろ』に出会った頃のことを思い出しています。家事労働(子育ても含めて)と、勤務と、そして労働運動や婦人問題……と、勉強したいこと、活動したいこと……が沢山でしたのに、身動きできずにイライラしていました。その状況は、今でも基本的には変わっておりませんけれど。そのような私にとって『あごろ』誌は、とても貴重な情報資源であり、資料であり、そして励まして下さる存在でした。今後もご発展を。そして、よろしく。

(飯能市 柴崎和恵)

◆「あの日会場のすみで」

あれよあれよ、という間にすてきな女性たちがたくさん登場！実力派の台頭！

受け手から発信者へと広場を変えることにより、見えなものが見え、光輝く存在となるのですね。

仲間との相互学習の中で質的に変化する会員の存在がますます映りました。

「あごろ」は、一人ひとりがしっかり生きていくために、

よい実践の機会となっているのだと実感しました。

支え続けた斎藤千代さん、くれぐれもお大事に!!

(稲城市 菅野かつ子)

◆あえて「男」からのラブコール

「女・男」平等! 「へあごろ」へ注文するのはいささか筋違いかもしれませんが、変革の対象であり、かつ一方の主役である「男のフェミニスト」からのメッセージが少ないのでは。編集方針なのか、声が出てないのか……。かくいう僕も口先(理念)フェミニストのつもりで、実生活とのへだたりが大きい、(母親に甘えている、自立した生活者でない)のですが。

(尾花沢市 菅野真治)

◆私の書棚には欠番があるものの、『へあごろ』が創刊からずっと並んでいます。

十数年前に会員になった時には『へあごろ』を師と仰ぐような感じで読んでいたのですが、子どもを産み、育て、働き続ける中で、いつのまにかへあごろは私の傍らにいてともに歩んでいる感があります。一貫して変わらない平和や人権・平等への姿勢。たじろぎ、ゆるぎのないその姿勢に励まされ、共感を寄せています。

資本制、家(族)制度、文化、風習、さまざまな場や所に浸透している差別にNOと言いつづけ、大人げないとかアホとか言われてもそうじゃないよね、やっぱりおかしいよねと確認しあえる仲間でありたいと思います。斎藤さん、体に気をつけて下さい。

(東京・杉並区 杉本千代)

◆へあごろの樹は、度々の日照りや台風にめげず、すくすくと成長し、大地に根を張る立派な姿になりました。この樹に咲いては散って行った花々、種となって遠い所に芽生えた木の実たち。叫ばず、あせらず、生命の根源を養う大樹の木陰に、絶え間なく集う女たち男たちは、基本的人権の唄を力強く美しく歌い続けることでしょう。

(東京・新宿区 杉山次子)

◆へあごろ発足20周年おめでとうございます。私とへあごろとのおつきあいは28号の『産む 産まない 産めない』からですから約十年になります。この間、社会は女性にとっていいことばかりではありませんでした。でも、こつこつと地道な活動を続けているへあごろには、いつも励まされてきました。

私も結婚し静岡に移り住んで七年目に入ります。助産婦

になりたいと思い始めて十年、二十七歳で看護学校入学、今年三十歳でやっと助産婦になれそうなところまでできました。いいお産ってなんだろう。主體的なお産とは、と考え続けてきました。これからは、たくさんのお産さん産婦さんたちと一緒に考えていきたいと思っています。

やっと社会に一步を踏み出す私と20周年を迎えたへあごろ、ちょっと縁があるような気がしています。これからよろしく。皆様のご活躍をお祈りしています。

(静岡市 鈴木亜美)

◆へあごろは、私にとってふるさとのようなものです。

へあごろとの出会いは、〈国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会〉の一周年記念(一九七六年)の集会の時でした。それ以来の誹読ですから、もう十七年余りになるのですね。

ある時、こんなことがありました。

依頼された原稿をしめ切り間際になって届けた時のことです。原稿用紙に目を通し終えた斎藤さんは、一言「苦勞したのね」とおっしゃって、目頭を赤くし、涙を浮かべていたのです。夫の暴力が原因で離婚し、三児を抱えて精一杯に生きている私の姿に共感して下さったのですね。「斎

藤さんって、本当にやさしい人なのだな」と、その時思いました。

先刻、湾岸戦争の現地に飛んで行かれたのも、あの時、私に注いでくれた小さな涙が、時間と空間を超えて彼女を奮い立たせ、大きな海を越えて、悲惨な現実をこ自身の眼で、からだで、確かめざるをえなかったのでしょうか。かつて「リブのおんなはやさしい女」と吉武輝子さんはおっしゃいましたけれど、そんな言葉がびったりするような人ですね、斎藤さんって。

小さなことにも誠実だからこそへあごろのブリッジが全国各地に出来、二十年も続いたのではないでしょうか。当時、五年生だった長女が、今は二児の母、二代で読んでいます。こんなに長く続けて下さってありがとうございます。そして20周年おめでとうございます。

(東京・港区 須藤昌子)

◆私にとって『へあごろ』は一人の人間として考えるべきことを考えるのを助けてくれる雑誌です。日々の仕事の範囲内への目配り、情報収集に終わりがちなので、社会人としての判断に役立つ情報を提供して下さい。それが誹読第一の理由です。最近では178号「PKO——それは大

企業進出の先兵「降旗節雄氏」の記事が参考になりました。突然PKOが議論的になり、PKOに反対することは、国際的な責任を放棄するに等しい……というような論調の高まるなか、降旗氏の記事から日本の軍備について自分の考えを再確認することができました。では、今後内容豊かな『あごろ』を期待しています。

(浦和市 砂川理子)

◆へあごろの成人おめでとうございます。えーと、メッセージを書くかと思いつつ、うまくまとまらなくて、考えると私とへあごろの縁つてもへんなものだなあ、と思いました。

うーん、ふしぎだなあ……。

私は多分、並よりも人みしりの強い人間なんだ、と思うのですが、人に会うまでがものすごく長くかかるのですね。会って話してしまうとそれなりに話ができてしまうので、人見知りするのだ、といっても信じてくれない友人もいたりするのですが、未知のものは、人にかぎらず、こわいです。そのおそれと、好奇心がいつもせりあっていて、たいていは好奇心が勝つのですが、それにしても、納得できるまで自分から動かないので、つきあいは長いのおめにか

かったことがあまりない人というのが、多いなあ……とわれないがあらあきます。

でもなぜか、その方たちが気長に待っていて下さるのでなんとなく縁が切れずにつづいている。

しかしコジでいいのだろうか、と思うと、ここんこよくないぞ、という気持ちひしひしとしますね。今年はどうやらとにかく人に会う年になりそうです。どうもいやおうなしにそうなりそうなので、不安をおさえつつ、一期一会を、素直にたのしんでゆこうと思っています。

へあごろを知ったきっかけは、たしか河野貴代美さんのアサティヴトレーニングだったように思うのですが、あのころから悩み多かった私が、心の問題、あくまでも個の問題を入口にして、女性の問題に近づいてゆけたのは(そして今でも、私にとっての立脚点は、どうしようもなく個人としての私の視点、感覚、感情、直観なのですが)幸運だったと思います。

社会運動というものは、どうしても集団主義になってしまいがちなものだし、リーダーのふる旗の下で、メンバー一人一人の個人的な思いがかき消されていってしまい、または、一歩あやまれば、一人一人が無自覚、無責任なまま、

首のない原生動物みたいな形で集団が暴走してしまい、あとでだれも責任をとらないような形に（特に日本人は）なりがちです。

ささやかな経験に立って、そのどちらもいやでした。学生運動の末期に学生（ノンポリ）だった私には、講義の前にとつぜん教室に入ってきてビラをまきちらし、一方的に沖縄だの、中東だのについてぶちあげ、意見は求めるけど反論も質問も何だかバカにしてきく耳もたないような「活動家」は奇妙に見えましたし、一方で登校しようとして校門で数人の彼らになぐられ、ひきずられ、こずき回されて（でもだれも助けようとしないう、私も）いた別セクトの活動家を、とにかくこわくて止められなかった自分のふがいなさ、（たまたま通りかかったフツの主婦が「あんたたち何をしてんのよ」とくっつくかかっていた）にやりきれない思いをしました。

とにかく、意見をもつのはいい、だけど狂信であってはならない。意見をもつのは、別の意見とすりあわせて、たくさんさんの異質なもののなかで、いちばん納得のゆく答えを出すためののだ、と、あれから二十年近くたって、私は思います。

そして「集団としての意見」が「個人の意見」をおしつぶすようななら、それは右であれ左であれ、やはりゆるすべきではないことなのです。

とにかく一人から出発しなくてはいけない、自分の目で見、自分の頭で考え、判断しなくてはいけない。だけど、孤立してしまっても、またいけない。そのへんのむずかしさ、人に近づいて、集団の波にのまれてもいけないし、かといって、一人でポツンとしていても何も変わらない。どうしたらいいのか。

その答えを出すために迷いながら、つかず離れずのハンパな形で、「あごろ」の会員でありつつきました。

湾岸戦争のとき、あまりにも男性と話が通じないのにおどろき、あきれ、怒り狂ってしまったのですが、その彼らを動かすにはどうすればいいのか、動かせるのか。意見をぶつけ合うことすら感情的に拒否されてしまい、それに感情で答えてはいけないけれど、ついついあまりのことにうんざりしてしまいがち、ひどく絶望を感じました。それにしても……ソクラテスって偉かったんですね……。だからといって、それを数を頼みに「あなたは間違っている」と否定することは絶対にはしてはならない。それをしたら、私

もかつての「活動家」のようになってしまふ。コミュニケーションをしたいのであって、いいまかしたいのではない。それにしても、つくづく、日本には「正しいお話し合い」の習慣ができてないのがよくわかりました。ま、それは今の政治家のしゃべり方をみていると実によくわかります。いかに相手をケムにまくか、くどくどしゃべって相手の注意力を低下させて論点をこまかすか、いかに痛いところをさわらせまいと感情的になってみせるか、いかにきれいなことを並べて情に訴えようとするか……。いかにも日本だなあ、と悲しくなりますが、「素朴な疑問の受け皿」が、どこにもないところに、いちばん苛立ち、むなしさを感じます。

日常の感覚で、個人として「おかしい」と感じることを、すべては、そこから本当は始まるのではないかと思います。だれも「自分の問題」として目の前でおこっていることを受け止められないのは、異常なことではないでしょうか。明治以来の教育のたまものともいうべきでしょうか。ありもしない「公（おおやけ）」を、本来民主主義の根本のはずの「私（わたくし）」の上において、平然と、一人一人がなぜか庶民ではなく、支配者の目でものごとをみるク

セをつけられてしまっている。不況になっても、経営者の目でモノをみている人たちは、なんだかとても奇妙です。首切られるその時まで、彼らは本当の自分の目をもてないのでしょうか。

そんなことを考えつつ、それでも地道にことあることに素朴な疑問は口に出して言いつづけたと思います。

たぶん今年は、「公」がガタガタになる年だと思うので、いずれソ連以上にアナキーな状態がくるのかもしれないが、しんどくても、なんだか、たのしみでもあるのです。

少しずつ、「個」として、めざめてゆく人たちがふえてくるといいな、と、はけ口のないまま、「公」におしつぶされている「私」の怒りが、いじめや器物損壊やら動物虐待にくすぶり出すのではなくて、もっと大っぴらにもっと堂々と元気に、健全できもちのいい叫びとして、そろそろ上がってもいいじゃないかと思っているのは、私だけでしょうか。

わし、何だか長くなってしまうましたが、そんなことを考えながら、横になっていました。

素朴な疑問に答える情報は力です。今年もじっくりと読

ませる『あゝ』であってほしいと思います。カゼがなおったらいちどゆっくりとおめにかかりたく思っております。

(国分寺市 田井亮子)

◆ 二十周年おめでとうございます。不偏、不党の立場で、真の女性解放に向けて、しなやかに、したたかに、アプローチをつづけてこられた『あゝ』に敬意を表します。

「継続は力なり」と申します。二十年の実績をたくえられた『あゝ』が、これからも管理されない情報、自分たちの目で確かめ、手で足で集めた情報、私たちが本当に必要としている情報を提供して下さることを、期待しております。

斎藤千代様ほか、『あゝ』の皆様の健康を祈りつつ。

(川崎市 多田とよ子)

◆ 『あゝ』20周年、おめでとうございます。たくさんの方のグルーブが消えていった中で、地道な活動を続けてこられたことは大変素晴らしいことと思います。さっぱり不熱心な読者で、会費もとどこおりがちなのに、きちんと『あゝ』を送り続けて下さったおかげで、今だに『あゝ』と切れずにいることができました。一つの差別に気づくことで今まで見えなかったいろいろな差別が見えてきま

した。あくまでも人間らしく生きること、それをはばむものを追及し続ける『あゝ』の姿勢に共感しています。

仕事や生活に追われて、なかなか心に思うことも行動に表すことができず、心苦しく思います。今後は、ささやかであっても「行動する」ことをめざして生きたいと思っています。『あゝ』にも主体的にかかわることができた方がいいなと思っています。編集部の皆様、これからも頑張つて『あゝ』の灯をともし続けていきましょう。

(北海道 館盛静子)

◆ 『あゝ』の成人式おめでとうございます。ふり返れば私も仕事をはじめて二十年たちました。『主婦が歩き出すとき』そのままに『あゝ』を時には教科書に、時には友達に、時にはオアシスにしながら共に歩んできた二十年でした。『あゝ』を読んでは考え、仲間と語り合ったりして自分の価値観をつくってきたような気がします。

『あゝ』の良いところは中央からの発信と地方からの発信が同一の重みであること。地方からの発信に忘れかけていたことに気づかされ、新しい課題を見つけることが多々あります。全国各地にホンネで生きる女たちがいることに励まされます。今後のひろがりをお願いいたします。二十年間



ほんとうにありがとうございました。

(立川市 田中幹子)

◆一九七六年のことです。まだ二十八歳だった私は、K市の公民館主催の「ヤングミセスの教室」で人間として生きることの意味についていろいろと考えさせられておりました。その中でも斎藤千代さんが教室にいらした時のことは本当に良く覚えています。電車の事故とかで予定の時間に少々遅刻された斎藤さんは「だって不可抗力じゃない？」と意に介さない私たちの気持ちを知ってか知らずか、それはそれは厳しく御自分を責めておられました。約束した時間には絶対に間に合うよう、起こりうるあらゆる事態を想定して出かける手はずを整えなければならないのにそれを怠った、ということです。女の人が実社会の中で働くことで自立をするということはどういうことなのかと痛感致しました。何のために働くのかをはっきりと認識されているからこそ、その厳しさが働き方に自ずと反映されてくるということなのですね。私たちへのお話の合い間に公民館の職員の方と交わす短いやりとりにも、同じ働く女性としての緊張ある連帯感とお互いへの深い信頼感が伺えて、終了時間がきた時、私は思わず肩で大きく息をついておりました。

それ以来の「あごろ」のお付き合いです。

(千葉市 田畑みどり)

◆私と「あごろ」との出会いは八五年に「あごろ九州」の方々が、ナイロビに行かれたときからです。当時つとめていたRKBテレビの番組にも出ていただいて、聞いたお話から受けた刺激は今でも忘れられません。

その後八八年に特集34号で、網野善彦、上野千鶴子両先生と同じ壇上で話させていただいたのは光栄すぎて、今でも恥じ入るばかりです。「あごろ九州」では河野信子さん、福田光子さんといった碩学の方々もふところが大きく暖かく、走り回るばかりで不勉強コンプレックスになやむ私を励まし元気づけてくれる仲間たちに私は支えられています。「あごろ」への感謝の気持ちでいっぱいです。

(あごろ九州 辻 和子)

◆私と「あごろ」との馴れ初めは「自立の心理学」に始まる。立川から編集部へ通い、手探りで参加していたが、自立そのものについて、話し合いが深まるにつれて、自分の考えの未熟さが気がかりとなり、第一冊目の本が出版されたところで辞めた。

昨年の「あごろ」20周年を祝う会に参加して、全国に素

晴らしい会員が大勢いらっしゃるのに驚き安心しました。

どうか今後も問題提起の女性誌としてずっと続いてほしい。斎藤さまはじめ編集の方々のご健闘を祈ります。

(立川市 寺田芳子)

◆若い、若いへあこら。次は三十代になった時が楽しみです。生まれてからの二十年は激動の歲月。平和を、人権を、女たちのありようを、しっかりと見つめ、記録し、北から南まで女たちに伝えたへあこら。

へあこらのみなさま、成人おめでとうございます。

(堂本曉子)

◆20周年を心からお祝い申し上げます。

フロンティアから成熟期に向かう時期にさしかかっていると考えます。そこで理論よりは実務的な面へのアプローチが必要と考えます。つまり、今ふうでいうと、ハウツー知識みたいなものも載せてほしいものです。例えば離婚したとき、どのような形で対応できるか、法的制度の援助の受け方や心理面へのアプローチ、その他それらを扱っている支援団体などの紹介など。以下同様で老親の看護等についても、外国などの紹介も含めて、つまり身の上相談の女性的視点へのアプローチを載せて、実際に役立つ雑誌への

脱皮も必要と考えます。

(大阪市 土屋隆司・千津子) (記 隆司)

◆へあこら 20周年おめでとうございます。私は、へあこらの後半十年くらいの歩みしか知らないのですが、この十年、早かったですが、いろいろな事がありました。成田空港では帰国、あるいは入国する時にだれもが最初に通る検疫所に日本の女性のヌードの写真がはってありました。小さな細長いガラスのビンの中に裸の女性が捕らえられたように窮屈そうに入れられているので、嫌な気分でした。

次の時にもはってあるので、これだけで日本に帰ってきた喜びは消えるのでした。今度よく見ると、エイズ防止のポスターだったのです。ビンに見えたのはビンではなかったのです。日本の女性に随分失礼なポスターを外国人の男女が最初に通る日本の玄関にはっているのです。中嶋里美さんや千葉の山本栄子さんに相談し、成田は千葉ということに山本さんがいろいろ働きかけて下さり、それでも強固にポスターをはがさないといっていたのですが、私たちがあきらめかけたころ、やっとはがしてくれました。今は日本に帰国する時、顔を曇らせなくてよくなりました。これで私は声を上げることの必要を実感したのでした。命をかけ

て声を上げつづけているエジプト人女性ナワル・エル・サーダウィの作品『女ひとり世界を往く』を図書出版社より昨年末にだしました。読むと元気がでてきます！

(東京・新宿区 鳥居千代香)

◆「経験の共有」は変革へのエネルギーを生み出します。

問いかけるへあこら

ゆるがないへあこら

それは私たちを未来への確かな歩みへと導いています。

この二十年の間、そしてこれから。

(東京・杉並 外口玉子)

◆十年前の夏、長女をつれて参加いたしました母親大会の会場でへあこらに出逢い、入会いたしましたものの、この間、仕事と三人の娘を育てるのに手いっぱい、会誌を講読するだけの会員で申し訳なく思っております。

会員の皆様のためさしいご活躍を知るにつけ、いささかおじけつてしまうこともございますが、！と？とを繰り返しながらも、自分なりにがんばりたいなと思っております。幸いにも子どもは娘ばかり、長女は十一歳となり、そろそろ女同士としての話もできるようになってきて、楽しみです。そのうち四人で手をつないでへあこらにでかけ

てゆけたら……と、夢んでいます。

(東京・足立区 中島はるみ)

◆へあこら20年……について、「二十年の活動おめでとう」と言うべきなのか、「もう二十年も経ってしまった、それなのに」と悲しむべきなのか、ちょっと迷います。

へあこらの本来の意義からすれば、『へあこら創設の目的は達せられました。今、へあこらの幕を閉じます』と、宣言する日が、本当に祝すべき日なのだと思います。

しかし、現状は「継続は力なり」と信じて、まだまだ行動を続けて行かねばならないと考えます。

自らの余命を思うとき、ちょっとおぼつかなく、心細い気もしますが、何か役に立てればと思うばかりです。

(国分寺市 長橋之男)

◆へあこらの皆さまのご健闘ぶりにいつも敬服しております。ますますお元気でご活躍を！

(東京・板橋区 中村智子)

◆「二十歳」と聞いて感無量です。私がへあこらと出会ったのは、今、「はたち」の娘が三歳になるかならないかの頃でした。結婚して、出産して、抜き差しならない厳しい女の現実直面させられ、たった一人ぼっちで「どうし

よう」と思っていた時、北海道の地方紙の片隅にのっていた「あこら」の紹介記事。それがきっかけで沢山の同じ問題を考える女の人たちと知り合えて、そして今も、「あこら」と縁のある人たちと「コウ・カウセンシング」という私自身の解放と、女を含めてすべての人たちの解放にかかわる運動に参加しています。

「あこら旭川」は今ちょっと休眠の状態ですが、しかし一時期、年一回の編集を担当したことが私を大きく目覚めさせ、現在の活動につながっていることを考えますと互いに影響を与え合い、育て合いをすることがどんなに大事なことかとしみじみ感じます。

これからも常に互いに影響をし合い、育ち合う関係を大切に今後の発展をお祈りいたします。

(旭川市 那須友子)

◆「あこら」は、わたしにとって信頼できる、心優しく、聡明な、本音を、真実を、語ってくれる先生です。「あこら」の中で素敵な女性（ひと）たちに出会い、いろんなことを考え、思い、学んできました。国内、国外でこれからも「あこら」が、ますます広く、長く、女性たちに、男性たちに、読まれるよう願わずにはいられません。人の心

を、社会を、正しく、しっかり揺るがしてください。

(三田市 西田冬至子)

◆「あこら」成人式おめでとうございます。斎藤千代さんの献身的なご努力があればこそ、これまでの発刊がつづけられたことと思います。斎藤さんには健康に十分注意されて、さらに、あと十年、二十年と「あこら」をささえていていただきたいと願っています。

家庭、仕事などの関係で、今は「あこら」の運動から遠くなくなっておりますが、ひそかに声援を送りつつづけています。ますますご発展を祈りつつ。

(東京都 荻原洋子)

◆「あこら」が成人式か！

私も結婚二十年目を昨年迎えました。「あこら東海」と出会い、十六年ぐらいでしょうか。その後の私の生活に大きな存在であったことはまちがいがありません。

昨年、私は二十年暮らした家を出て、次男（高校生）とマンション暮らしを始めました。

短大の時から、ずーっと「写真」にこだわり、写真を撮り続けていたこともあって、写真館に就職しました。衣食住のためのお金を稼ぎ出すために。

ときどき、十五・十六年前に一緒に学習を始めた仲間の笑顔に出逢う時、安堵感を覚えます。

私の人生の財産の一つと思っています。

(名古屋市 長谷川友子)

◆「あこらへの一言」是非広めてほしいことがあります。

嫁、姑問題に悩む方、長男、長女と結婚したくないと考える方に朗報です。昭和二十二年に家制度が廃止され、女が結婚すると相手の家に入ることは禁止されました。例をあげると山田君ちの籍に、花子さんが入って山田花子になるのではなく、太郎と花子が結婚すると新しい戸籍が出来、そのさい山田の姓、鈴木、姓どちらかを選んで山田になるとすると、花子が山田家と養子縁組をしない限り「山田家の人間、うちの嫁」にはなりません。T

鈴木花子

+

山田太郎

Vのディレクターをしている私は木元教子さんにこのしくみを教えていただくまで気がつきませんでした。夫婦別姓問題も含め、「嫁に行く」「入籍する」などおかしな表現もなくしていききたいものです。このことが広まれば、相手の家の人間になるからと、父が娘の結婚式に涙する必要も

ありません。姑がうちの方針を嫁におしつけることもできません。あの瀬戸内寂聴さんも、知らない事実でした。是非みんなにアピールしていききたいです。

(東京・豊島区 浜 千加子)

◆成人式おめでとうございます。

二十歳(はたち)になるまでには女としていろんな苦労があったことと存じます。倒れず、グレず、方々に広場をつくって着実に育ち、この不況風の中でお祝い会までなさいましたこと、感心しています。

いい女(広場)の素敵な未来を期待しております。

(東京・目黒区 林 郁)

◆二十年を記念して、〈あこら〉の定期刊行物を机の上につみあげてみました。そして、ひろい読みながら、一冊一冊内容にふれ、あらためて〈あこら〉の歴史の重さを実感いたしました。

私自身の不明は、この重さに十分気づいていなかったことです。「カネなし、権力なし」で、よくぞここまでがんばって下さいました。そこから人間の息吹が伝わってきて、とても励まされております。

「成人式」を迎えられて、いよいよこれからが本番。現実

を見ぬく力をますます育てて下さいますように。

私も負けずに前進したいと思っています。

(所沢市 広田寿子)

◆この二十年間、日本のフェミニズムの流れをきちんと記録し続けて下さった『あごろ』に、改めてありがとうございます。いましたとお礼を申し上げます。

「国際婦人年」及び「国連婦人の十年」の頃のような燃えたぎる情熱が『あごろ』を手にとると、再び自分の体の中によみがえってくるのを感じます。

(茨城県立婦人教育会館長・埼玉短期大学教授)

元読売新聞編集委員 深尾凱子

◆二十年前、娘が小学校に入学したばかりでした。私自身も無職に毛の生えたような仕事にかかわりながら、PTA活動に一步ふみ出したばかりのときで、女に課せられた役割に疑問をもってPTA仲間にごちったことから、その方から『あごろ』を紹介され、三号までを頂きました。『男社会』としてある現実を目覚め、すぐ『あごろ』を申込み、現在に至っています。

男性が任侠映画を観た帰りに、肩で風を切って街を歩いたように、国立婦人教育会館の一泊での集会に参加したり

していた私は、〈あごろ〉の仲間たちと出会ったことで、当時肩で風を切って歩きました。本当は、まだ自分自身が解放されていないのに、何かあると『あごろ』の記事の都合のよい部分だけを引用して、夫やまわりの人たちにわめていたのです。年月を経て、女性問題にいろいろかわるうち、自分らしく生きることを主張(経済的自立、夫との別居)して、行動を始めていました。思えば『あごろ』は、私らしく生きるための指針でもありました。自分がわかってきて、肩で風を切ることもなくなりましたが……。

(浦和市 深田範子)

◆全国の『あごろ』愛読者の皆さん、あごろ事務局さん、お元気ですか？

寺を民衆の解放区に、また、抑圧された女たちの駆け込める場にせん、とやってきた女僧侶ですが、男社会を根底からくつがえそうとする私を日頃から憎々しげに思っていた地元の有力「檀家」と地域のボスの住職連中が結託して、私を経済的精神的に兵糧攻めにせんを狙っています。

つまり地元の「檀家」の数人が全「檀家」に、私の「住職就任」を拒否するよう、また、私の法務の一切を拒否するよう、また、他の住職らに参ってもらうよう圧力をかけ

た結果、現在私がお参りをしている「檀家」は二割強となりました。彼らは年内には私に降参させ、泣きつかせるつもりだったのでしょうが、彼らの期待にはずれて、講演依頼の仕事が結構入ってきて、私は今も無事息をしております！

十月三十、三十一日は、東京のPARCに参りますので、来られる方はまた私を励ましに来てください！事件の詳細は関西おんな労働組合の機関紙に掲載中。弾圧があればあるほど元気になるぞ!!

(大阪 蓮月《藤谷不三枝》)

◆へあごろゝ成人式おめでとうございました。

二十年の間には、本当に沢山の女性たちの歩みがあったことと思います。

いま、女性の参画が少しずつ進む中で、「平和」や「人権」が改めて問われる状況になっています。

女性の「参画」の質が問われているのかもしれない。これからもへあごろゝの皆さんの確かな情報と手応えを共有していきたいと思います。

皆様のますますの御活躍を祈念申し上げます。

(福岡県議会議員 藤田一枝)

◆十三年前、婦人問題についての会で上京した時、その会場のロビーで出会ったのが『へあごろ』だった。

こんないい本があったのか！驚きと嬉しさで、すぐに会員にして頂いた。

以来、学び、考え、各地の活動に感心し、励まされ、特集の労作に感嘆しつつ年月が過ぎた。

昨年、すでに成人式をおえたへあごろ。人と人との出会うひろば、さくのないひろばを提供し続けてきたへあごろ。——その真摯で息長い歩みに、心からの尊敬と信頼を、そして大きな拍手を捧げます。

(山梨県 古屋繁子)

◆へあごろ20周年おめでとうございます。

体力的に自信がなくなり、集会には出席できずにおります。新聞を読むのがやっとで、すぐ疲れて本もツンドク状態のこの頃です。何度か脱会をと思ったこともありましたが、中東の危機・湾岸戦争・PKO等の特集号が来ますと、マスコミと違った視点からの発言記事が魅力で、辞めることはできないとの思いで継続している有り様です。

二月十八日付の新聞にブルトニウムを活用する核燃料サイクル開発推進のための政策研究会に堀社会党議員他三名

も参加。プルトニウムを準国産エネルギーとして必要と言っています。欧米のプルトニウム利用計画は既に破綻し、開発の中止があいっいでいる、と聞いているのに、安全性の確立の見通しもないまま参加するのかと、恐ろしさを感じました。もっと安全なエネルギーの開発研究に力をそそいで貰いたいです。後始末を考えない男性にまかしては大変です。ガンバレへあーらー！

(東京・江東区 牧野靖子)

◆あーら成人式おめでとうございます。

友人にすすめられて、『あーら』を送っていただくようになってすでもうそんなになるのかと思うと、あらためて感無量の思いです。

私自身、大学卒業と同時に結婚、就職し、すでに二十一年になり、ほとんどへあーらと共に生きてきた月日といえます。その間子ども三人を産み、保育園通いやら悪戦苦闘の二十年でしたが、今思えばあーらというまの出来事で、ただただ月日の経つのが速いのには驚くばかりです。会社と保育園、会社と家の往復という生活の中では、へあーらが私にとって他の女性たちとの何よりの窓口で、励まされ、勉強になり、また何よりも時代の確実な流れをその中に感

じることができ、職場でも少しずつですが、経済的、精神的に自立した女性たちが増え始めていることに気づきます。意識を変えていくことは、男女を問わず何よりも大変なこと、結局人は社会とのかかわりの中で一生その努力をし続ける必要があるということを実感します。多くの方の大なる努力でへあーらが成人式を迎えられたことに心から感謝し、今後ますますに私たちの友として頑張っていただたく思います。頑張れ！

(東京・杉並区 政田左衛子)

◆へあーらの凄いところは、直球ひと筋でぐいぐい押していく本格派投手の凄さ。それに、先発が疲れると、あちこちからリリーフが登場するスタッフの豊富さ。時間の長さだけで言えば、僕の出している『交流』も『あーら』に一年遅れて二十歳になりますが、『あーら』を大リーグとすれば、こちらはリトルリーグ。スケールの桁が違います。それに、こちらは直球に力がないから、変化球や、コーナーぎりぎりにボールを投げて、「振ってくれないかなあ」を期待するベンチウオマー。

でも、共通の悩みもありますね。野球人気にカゲリが出てきて、観客席に空き席が目立つ……。



でもまあ、もともと、投げて、打って、走るのが面白くて始めたこと、観客の数は気にせず、好きなように続けましょうよ。

花も実も 小さいながら 二十年

(東京・中野区 ますのきよし)

◆二十年間の「あごろ」の歴史は現状に甘んじない多くの日本の女たちと共に歩んだものと思います。

「あごろ」イコール主婦というイメージがあって、私は経済的にだれかに頼るなんてとんでもないという性格から「専業主婦」は好きでなかったの、で、「あごろ」と必ずしも一体感を持っていませんでした。

けれど考えてみれば、現実には日本では主婦が女性の多数派だったわけで、その多数派が変わらなければどうにもならないということです。その意味で、「あごろ」の果たした役割はとても大きかったと思います。

これから二十一世紀に向かって女性の生き方もますます多様化する中で、女性が経済的に、精神的に、そして性的に自立して、差別のない日本にするために、「あごろ」が健闘して下さるよう期待しています。

それからもう一つ、平和を一貫して主張し行動してきた

ことに心から敬意を表します。

今、日本が経済大国から更に軍事大国として世界権力に参加しようと、平和憲法も危機に瀕しています。そのような危険な道へつき進むのを阻むために、私たち女性がどこまで身を挺することができるか、日本の女性運動が今ほど問われている時はないと思います。一緒にやりましょう。

(ジャーナリスト 松井やより)

◆社会党ですら、憲法や原発問題で「なしくずしの現実路線」に転換しようとしています。そうした今、人間や社会の本来のあり方に向かって、毅然と進む「あごろ」はとも立派だと思っています。みんながみんな、現実「に合わせたらどうなってしまうのでしょうか。戦争や差別の現実を、今こそ変えなければならぬのに、それに同調するのは本末転倒です。女の声が世の中の声になるよう、「おとなの「あごろ」」に期待します。

(住民図書館 丸山 尚)

◆七〇年代はじめに登場したこの雑誌は、学生気分を卒業してしまっただけの世代の女性にとって、フェミニズムをさぐる場所を提供してくれました。これを手掛かりに、人生を切り開いていった女性は少なくなかったように思い

ます。あれから二十年、現代は当時とは違った意味で見通しにくい時代になったようです。〈あごろ〉がその名前のとおり、女性たちが鋭い討論をたたかわす「ひろば」としての役割を果たしてくれることを期待します。

(名古屋市 水田珠枝)

◆最近、マスコミも「女性の時代」とあまり騒がなくなりました。でも着実に女たちは変わっています。『あごろ』も二十年の歴史を刻んだときいて感慨深いものがあります。「女のひろば」という名にひかれて講読を始めて、もう十年くらいのつきあいになるでしょうか。(熱心な読者ではなく支払ひも滞りがちで申し訳なく思っています。)時代にまっすぐに対峙し、生活地点での運動を担い、元氣な女たちの存在を伝え、勇気づけてくれる『あごろ』に感謝しています。これからどうぞ頑張ってください。

(武蔵村山市 宮寺有美子)

◆〈あごろ〉と知り合って十五年になります。

新聞で〈あごろ九州〉の例会内容を読み、大いに関心をさそわれて参加、入会しました。

そこに集まっていたのは、小島サカエ・豊子さん親子をはじめ、「女性の未来はここにある」ことを具現した

ような、輝いた女性たちばかりで、私も「そうになりたい」と希望に燃えたことを覚えています。

雑誌『あごろ』で斎藤千代さんの考えに賛同し、行動力に脱帽したのも事実です。読みながら、なぜか涙を流したりもしました。知人にもそのすばらしさを知ってもらいたくて、「聞いて、聞いて」と読み上げたりもしました。

その後数年、青年時代(二十代)の運動のほうにまた忙しくなって、今ではすっかりごぶさたしていますが、〈あごろ〉で、私はかろうじて「女」を支えられているようです。〈あごろ〉に出会わなかったら、きっと、悪い? 男性の見方に立っていたかもしれない、と時々おそろしくなります。感謝をこめて、ありがとう〈あごろ〉!!

(あごろ九州 森崎民子)

◆二十歳代半ば、結婚して、子どもができて、コンクリートの大都会で一人苦悶していたあの頃。〈あごろ〉があるよ、と教えてくれたのは、誰だったろう? 捜しに捜して初めて手にした時の感激は、今でも忘れない。

厚くなったり、薄くなったり、なかなか出なかったり、面白くたためなくて、そうかなあなんて時には疑問に思ったり……私の生きる道に何か似ている〈あごろ〉。という

より、私がへあごろに似ているのかな？

あれから十数年、私、四十二歳。下の子はもう高校生。仕事も活動もネットワークも少しずつ広がって、今でも苦悶は苦悶だけれど、一人だけの苦悶ではない。人と出会える楽しさもあるし、時には余裕すらある。

御成人おめでとう。そして心よりありがとう。

(大阪市 森屋裕子)

◆お誕生と同時にきびしい道を過労に耐えて二十年、基本を貫いて歩んでこられた「へあごろのお姿」は、ほそぼそとした私の人生にはあまりにも立派すぎますが、大きな励みでありました。

毎号を手にしては、貴重な真実の情報や、読みながら考えるのしみに接することができ、ありがとうございます。あちらこちらでへあごろの芽が元気に育っている……と思うことも多くなりました。私自身は *ageism* に関心をよせる歳になっています。成人したへあごろはいっそう体力をつけられ、元気に、ときにしたたかに歩んで下さいますように。くたびれたら、どうか息抜き(そんな場面が想像できないのですが……)もなさって下さい。

国際婦人年宣言から二十年目も近くなりました。私なり

の角度からじっくりとこの間を振り返ってみよう、そんな思いで切り抜き特集号のページを繰りました。

(東京・中野区 山岸汐子)

◆支えたなどと言われては、それだけのことを何もしていないのにお恥ずかしいことです。ただ、真面目に行動し、闘う斎藤さんたちに、尊敬の中にチョッピリうらやましさを感じながら、心の中で応援しているだけなのです。

最近の女性等がお仕着せでない自分の言葉を精一杯使って社会とコミュニケーション出来るように思えて嬉しいことです。本音を言い易い社会にするためにへあごろの存在は有形無形の働きをしたのではないのでしょうか。

(川崎市 山里倫子)

◆自分がほんとうに生きていると実感できるなにかを求めて試行錯誤を繰り返していた時、友人の紹介でめぐり合ったのが、へあごろでした。心がのびやかになり、自分の進む道が見えてきました。その頃、幼かった四人の娘たちが、今、女として人生の途上にあります。

へあごろの存在が次の世代の心の灯ともなりますように！二十年おめでとう！

(名古屋 山下智恵子)

◆今どき希ではありませんが、「古希」を迎えて私も人並みに年をとってしまいました。

成人式を終えたばかりの血氣盛んな〈あごろ〉に一言をと言われても、皆様に波長を合わせるだけの元氣はもはや出て参りません。年のままに聴力や視力も衰えて参ります。その現実を受け入れて、

平和に、楽しく、平等に、

と暮らしていける社会をと願っています。

それぞれに特長があり、捨てがたい、しかし溢れるばかりの情報誌・紙を前にして、身に合った記事をつまみ食いしながら栄養源にしています。

しかし年老いても受け身だけに終始するつもりはありません。自分を生かす、社会を生かす、という観点から、かつて差別を聞いた複数の元原告たちと一つの発信を計画中です。

四、五十代が主力と思われる〈あごろ〉のライターたち、そのエネルギーな活動に感嘆しながら、いまだ少し薄手なものと願う私です。

(鈴鹿市 山本和子)

◆「何かしたい主婦のために」こんなタイトルが目飛び

込んできて、思わず手にした『あごろ』。二十年前のことでした。当時わたしは、共同生活のつもりで学生結婚し、その後自分の意志とは無関係に、(相手の家の嫁という存在の)家制度に取り込まれているのに疑問を感じていました。その後書類上、離婚、結婚し、自分本来の姓を名乗って現在に至っています。社会全体として、とりあえず夫婦別姓が選択できる日が、一日も早くくることを願っています。身近なところで、学校、町内会、子ども会、そして冠婚葬祭等、右倣いが眼につきすぎます。

〈あごろ仙台〉にかつて集まった仲間は今どうしているのでしょうか？ なつかしいですね。

(仙台市 横田ゆり)

◆二十年間、多くの困難を克服し、障害を乗り越えて「成人式」を迎えられましたことに心から拍手をお送りします。〈あごろ〉を通しての素晴らしい女性たちとの出会いが、どんなにか私を勇気づけ、私の拙い活動の支えとなったことでしょうか。私自身の足どりは、まだまだおぼつかず、「成人式」を迎えるのは、まだ先になりそうですが、今後、よろしくお力をおかし下さい。

(仙台市 横林洋子)

◆「へあこら」成人式とのこと——ひと口に「成人」と言いましても、その歳月の中にはいろいろなことがあったろうなあー、ほんとにごくろうさま。そして、その時の積み重ね、たくさんの方がたのエネルギーの集まりに、敬意と感謝の気持ちをあらためて抱きました。

地方の小さな町に舞い戻って、手探りしている頃、私は「へあこら」を知りました。あの頃まとわりついてた子どもたちも大きくなり、上の息子は、今年成人式を迎えました。私もおかげさまで大人になり、試行錯誤しましたが、昨秋独立しました（社会保険労務士・行政書士事務所）。四十過ぎてから資格をとり、駆け出しですが、まだまだこれから……かな？と、自分で自分を楽しみにしています。こんなふうに、自分の人生を切り開いてくれたのも「へあこら」はじめ、いろいろな女の人たちの力を支えにしているのだなあ、とあらためて女に生まれたことに誇りをもつ思いです。どうぞこれからもよろしく願います！

（鹿児島県 横山雅子）

◆20周年おめでとうございます。振り返ってみると、この二十年、折々に「へあこら」が近くに在ってくださいました。七二年（私はリブ新宿センターというところにいまし

たが）優生保護法改悪阻止に国会へも行きました。

・八〇年頃BOCから版下のお仕事をいただいていた。  
・八二年（再び優生保護法改悪阻止を……）。

・九〇年にはちょっと私事ですが、友達が「へあこら」の場をお借りして陶芸展を開かせていただきました……。

・最近では、リブ新宿センターの資料保存と公開について呼びかけ文を誌面であつかっていただきました。

新宿通りを通して「へあこら」の看板を見ると、あつあるなどホッとします。続けるということは本当に大変な貴重なことです。

30周年も40周年も看板の健在を願っております。

（東京・中野区 米津知子）

◆一九八〇年、デンマーク世界女性会議のNGOデモで、斎藤千代さんと「へあこら」のスタッフの方が「白い大きな布」に日本からの平和メッセージを書いて行進されていたのが印象に残っています。

よく見たら、ホテルのバスタオル！ リンキオーヘンさが「へあこら」のパワーです。今後とも、日本のフェミニズムのバイオニアとして活躍下さい。

（東京・杉並区 渡辺晴子）

## 二十周年の集いに参加して

私たちは、入院されたという斎藤さんの様子を一目見た  
いと、広島から三人で、あこら二十周年記念の集い“に駆  
けつけた。しかし市ヶ谷駅で乗ったタクシーが迷い、道行  
く人に尋ねたところ、二度とも「自分たちも探している」  
というのだ。結局、会場に着いたのは開会挨拶終了直後。  
肝心の斎藤さんのあいさつは聞くことができなかった。

続いて講演、演者は田嶋陽子さん。『たけしのTVタッ  
クル』で一躍注目を浴びている人だ。

女の問題に視点を据え、頬づえをついたまま率直、明快、  
爽快、痛快にスバツと語る彼女をテレビで見た時はとても  
新鮮だった。しかし彼女はこのテレビに出演した途端、勤  
務先の大学やフェミニストの友人から強く非難されて胃痛  
で苦しんだという。女だけで明るく楽しい自己表現（反戦  
・反核・反原発）を試みている広島の私たちが受ける批判  
に底通する現象に思わず身を乗り出したが、それでも彼女  
は、たった一人の反乱をあきらめない。女はパン（経済  
的自立）、男はパンツ（家事的自立）と言いつける彼女の  
誠実な態度に感動した。私にはたった一人で反乱する勇氣  
はないけれど、地方で女たちと手をつなぎ、自己主張の経

験を重ね、一票を有効に使ってガレー船の船底から甲板に  
出る用意をしているよと、心でエールを送った。

さて、会議のテーマは「マスコミの限界・ミディコミの  
限界」。下村満子・増田れい子・奥川 睦さんたちが各々  
の立場から問題を提起された。これを受けて会場発言とな  
ったのだが、途中で司会のしまさんの二、三人一緒にどう  
ぞとの呼びかけに思わずのって、浜村さんと壇上につけあ  
がった。私はここで決められたテーマは終了したと早トチ  
リしてしまったのだ。見晴らしのよい壇上で二人は東京佐  
川急便に関する決議要請のため、広島議会へ行った話をし  
た。宮澤総理の地元県、かつ平和都市ヒロシマの市議会と  
して早急に決議を、と意見を述べ始めたあなた、副議長に  
「あんたらから説明を聞く必要はない」と怒鳴られたこと。  
その後、市民の強い要請で意見書が採決されたこと等を思  
いっきり喋らせてもらった。後で司会の方から今のテーマ  
は……とやんわりたしなめられて愕然。私は問題提起を見  
事にあらぬ方向へそらしてしまったのだ。ごめんね、皆さ  
ん。あやまりついでにテーマに一言。「限界」をいくら議  
論しても進めないし、横へも抜がらない。自分に引き寄せ  
て考えるのも難しいと思ったのは、私の理解不足なのかし  
ら。

三十分のディナータイム（お弁当だった！）の後は夜の  
部。みんなで語ろう！ いま言わずにはいられない——女  
と男の言いたい放題。まるで私のためにつけられたような

ネーミングだけど、会場は昼の部と同じ。備え付けの椅子に座って前方を向いたままの意見交換じゃ学校の授業みたい、ドツと疲れがでてしまった。ところが高橋ますみさんのユーモラスな司会が功を奏し、金住典子さんたちの問題提起を受け、パート労働、お茶汲みなど身近な問題に真剣に取り組んでいる女たちの熱のこもった発言が続いた。国会議員の外口玉子・鈴木喜久子さんも平場からPKOや東京佐川急便の最新情報やその活躍ぶりを話されるなど、たくさん素敵な女たちの意見に耳を傾けているうちに疲れが吹き飛んでしまった。真宗大谷派の女性差別と闘っておられる羽向喜久子さんから「今、疲れて羽を休めているけど、今日は元気をもらったわ」と話しかけられたが、私も集いに参加してよかったと満足の笑顔を返すことができた。

この集いの主役の一つは三百本のバラの花だったと私は思う。真紅、黄色、オレンジと色とりどりの花がかすみ草で囲まれ、卓上や壇上のおちらこちらに飾られていた。活け方にどんな工夫がなされているのか知らないけれど、グループにまともめられたバラの花は、一本、一本の美しさがかえって映えることを初めて知った。へあごろ二十年の集いを象徴するような見事な演出だ。へあごろ九州の皆さんの創意と心くばりに敬服。すっかり元氣を取り戻した私たち三人は翌朝、高橋さんたち宿泊グループと楽しい交流も果して帰広。へあごろの皆さん、元氣でまた会いましょう。

(広島 畠山裕子)

まさか自分が壇上に立つとは思ってもみなかった。あごろボトム会議で会場からの発言になった時、同行の畠山さんが「ねえ、この前市議会に行ったこととか言おう！行こう！行こう！」。例の強引な誘いに抗しきれず、ほとんど「かけ合い漫才」をやる羽目になってしまった。

「マスコミの限界／ミディコミの限界」という真面目なテーマは私の頭からも消えていたので、言いたい放題、広島市議会の副議長の大悪口を皆に聞いてもらった。あれだけ言う、ズッキリする。私たちの後、発言者は続出し、皆さんテーマにこだわらない話をされたように思う。畠山さんは帰りの新幹線の中でも恥ずかしがっていたが、誘ったのは畠山さんだと思うと、私の責任は軽い。

それにしても、斎藤さんが言われた「ミディコミの限界は何といってもお金。志を裏付けるお金がないと、どうしようもない。エネルギーの九五％を金集めに使ってしまった」という言葉は凄かった。それを二十年間も続けてこられたのだから、ほんとうに人間ワザとは思えません。

田嶋陽子さんの「男はパンツ、女はパン」という名セリフは、どうにでも歌えそうで痛快そのもの。私には先見の明があったのだ！と意を強くした。というのは、むかし高校教員をしていた二十歳代の頃、生徒たちに「理想の男性は？」と聞かれるたびに「①髪を七三に分けていない人 ②貧乏ゆすり、歯ぎしりをしない人 ③パンツを自分で洗う人」と答えていたからだ。「男はパンツ」の部分を、既

に四十年前、私は次の世代に語っていた……。幾年月を経て今、私はそのとおりの男と暮らしているが、自分でパンツを洗う男と暮らすのは確かに快適だ。

しかし、「快適だ」と思えるまでに、四十年かかった。

十年近い一人暮らしの後の二人暮らしで、私は完全に精神的土台を崩し、動けなくなり、二週間入院した。それまでの私の中では「自分」か「非自」かしかなく、彼は私の人生で初めて向き合う「他者」だったのだらうと自己診断している。一人の「他者」を何とか受け入れるのに、四年かかった。あの悲惨でどん底の時、「仕事とかも辞めて、少しゆっくりしてみたら」と助言してくれる人がいた。「嫌だ。自分の食べる分は自分で稼ごう」。反射的に答えると、「その考え方は、たくさんの人を切ることになるよ」と言われた。高校の頃から「女はパン！」と固く信じて疑わなかったのに、今も深く心に残っている。

田嶋さんの話や夜の部の、経済的自立を模索する人たちの話を聞きながら、あの時の言葉を思い出していた。女はパン。そうなんだけど、それだけでは割り切れない一人一人の人生、私の中の要素があるなあと考えていた。

広島で私も関わっている「デルタ・女の会」には、小さな花柄の布に「女たちが手をつなぐ」と書いた横断幕がある。女たちが手をつなぐとはどういうことか、改めて考えさせられる今回の東京行きでした。

（広島 浜村匡子）

「あこら」二十年周年記念の集い……ウーン。

『We』を編集・発行し、十年間で幕を引いてしまった私。恥ずかしいなあ。——でも、午前と夜の用事の間を縫って、せめて午後の部だけでも、と馳せ参じたのでした。

ステージに輝く真紅のバラは、「あこら九州」の女たちの情熱と歓喜を象徴します。「あこら」の種子は、各地に豊かな花を咲かせているのです。それが二十年の歳月の重みです。

夫と永別した後、私の心の景色のかわりように本人が驚いています。「元氣というもの」が潮の引くように退き、「しみじみと共感できるもの」に、ひたひたと満たされていたのです。だから、

「厚くなったり、薄くなったり、質も量も千変万化、皆様をハラハラさせ続けた『あこら』ですが、

不戦 不差別 不暴力

の「あこら」流ジャーナリズムだけは、なんとか貫き通したのではないかと思います」の文章は、私のハートにびつたりきました。これに続けて「経済的には大ピンチの「あこら」！」の呼びかけ。そうです。これこそが、ミディコの最大の泣きどころなのです。

田嶋陽子さんの勢いそのものの語り。「フェミニストが、フェミニストにだけ通じる言葉をどんなに連ねても、乾ききった大地をうるおすことはない」と……。フェミニズム雑誌の草分け『あこら』が、フェミニズム運動の先輩、田



中寿美子さんに感謝状を贈り、マスメディアの超売れっ子、田嶋さんを招いたところに、『あごろ』が継承し、さらに発展させたフェミニズムを見ました。

「ボトム会議」とは、見事な命名。マスコミで大活躍の下村満子・増田れい子のお二人が、「ミディコミは話しかける対象が明確だ。その手応えをもつのが強み」「ミディコミを読まなければ真実のことはわからない。またミディコミが伝えたものは古くならない」と話されたのは印象的でした。これを受けて斎藤さんが、「何をやっても、ごまめの歯ぎしり」だが、女の情報が管理されたものでしかないのを何とかしたかった。マスコミは整理された情報を伝えるが、ノイズを拾うことが大切と、カネなし、権力なしで二十年やってきた」と語られたのは、胸に響きました。

司会のしま・ようこさんが、「どんな女の運動にも害がある」と率直に発言し、ソフトにリラクスマードで運ばれるのもへあごろ流。私は、何よりも斎藤さんに「ありがとう。ご苦労さま。お身体が悪い時はどうぞ休んでね。重い荷を一人だけでかつがないで、皆にも分けてね」と言いたかった。そして、会場にかけつけた方たちには「どんなに高い志があっても、ミディコミを持続させるのはお金志を共有するなら、お金をだして！」と訴えたかった。でも『We』を十年でやめてしまった私に、言う資格があるだろうか？ 忸怩たる思いをふっくらせて下さったのは、しまさんの（そしてたぶん斎藤さんの）さりげないお誘いで

した。

最後に、思い切って壇に登りました。そして、言ってもよかった。私流のささやかな形でへあごろ二十周年に参加できた、いま思っています。しみじみとした歓びに、ひたひたと潤っています。ありがとう！

（東京 半田たつ子）

へあごろ——私たちの頭上に燦然と輝く星のようなもの……ワクワクしながら会場へ。

「あれ?! 意外にこじんまりとした会なんだなあ」と思っている、あの田嶋陽子さんの迫力ある講演。とても一時間では物足りず、先生も私たちも消化不良気味だったのは残念ですが、あの元気を分けて戴いただけでも貴重なものでした。

その後、次々と発言される女性のたくましさや迫力に、「こじんまりとした」という印象は吹き飛んでしまいました。と同時に会が進行するにつれへあごろさんは私たちからだんだん遠くなっていきました。自分たちの勉強、行動不足はさておき（今後の課題として）「誰でも参加できる」というわけにはいかない様子。

二十歳になって、へあごろはどういう方向に進んでいくのか、注目しながら、今のところ、私たちはずいぶん後からでも私たちなりにへあごろの一員として歩んでいくと思っています。

（松山 西中美佐子）

# ●●あごらメイト●●

みどりの  
風のように  
生きたい――

斎藤千代さん



きて  
白井博子  
前林則子

とにかく年齢と学歴によって、「人間」を決定づけようとする日本人社会。そんな決定づけに反対なのが斎藤さん。でも、斎藤さんを前にして、やっぱり「おいくつですか」と聞いてみたくなってしまう。

えーと、『あごら』をはじめたのがン才で、それから二十年ということは……ムニャムニャ。こんなムニャムニャを押さえながら、背筋をのばしてインタビューをはじめた。

\*

『あごら』をつくられた動機は？

会場でお話したように「情報」に対する思いが基本でしょうね。

世の中にフェミニズムを広めようとか、そんな大それた気持ちは全くあり

ませんでした。『あごら』を出す八年前から〈BOC〉を続けていましたが、毎月のハガキ通信『BOC通信』に代わる雑誌を……という思いはずっとあり、それが『あごら』になった、というところでしょうか。

〈BOC〉は、女の人の職域の拡大や、オルタナティブな働き方を目指して始めたのですけれど、その中で、女の人たちの「働きたい」という思いと「働く」現実のギャップに悩み続けました。この問題をいっしょに考える仲間がほしい、というのが一番の動機だったかと思っています。

この気持ちを十五周年号で、「壮大な求人雑誌として出発しました」と表現したところ、かなり誤解を受けましたが、創刊号のとびらのことばが、一番、創刊の心を表していますので読んでください。

小さなあこらが生まれました

あこらは あなたを待っています

AGORAは ぎりしあのひろば

ぎろん・ざわめき・かいもの・ゆうべん

そこからぼりすのぼりしーが生まれました

この小さなあこらには

学者もなく、市場もなく、

ただ、あなたを待つ心だけがあります

全国ちりちりにはたらき

全国ちりちりに考えている皆さん

あこらに声をお寄せください

小さな点が線となり面となって

働く女性のしあわせにひびいてくる日まで

あこらは あなたを待ちつづけます

〈あこら〉という名前は？

私はなんとなく〈あこら〉にしたくて、私の第一案として出してみたのですが、大不評でした。「わけがわから

ない」と。でも、それに代わる名案もなく、結局、消去法で生き残ったのです(笑)。最近になって、「さすが国際化時代を先取りした」なんてほめられています(笑)。

斎藤さんが〈あこら〉を第一案になさった理由は？

学校の講義の中で最も印象に残った一つが、古代ギリシャ史の中のアゴラの話でした。村川堅太郎先生によれば、AGORAとは、「人と人が出会うひろば」。英語では一般にmarket placeと訳されていて、日本の市(いち)のようなものですが、れども、物資交換の場だけではない、情報交換の場、討論の場がAGORAだったのですね。AGORAで話し合う—AGORAZEINの中から、古

代ギリシャの *deemos* (民衆) による民主主義 *democracy* が生まれたという話も、ゼミでアリストパネスを読んで納得できました。ひとりひとりが実に生き生きと話し合っている。そんな場がほしかったのかもしれない。

ただ、古代ギリシャでは、AGORAは女性と奴隷には開かれていなかったんですね。私たちは、誰にでも開かれた〈あこら〉をつくらう、と。だから片かなのアゴラでも英語のAGORAでもない、ひらがなの〈あこら〉にしたのです。

だけど、たしかに、世間にはなじみにくい名前でした。初めはあこらという音さえ聞きとってもらえませんでしたね。「あぐら？」と聞かれるのはいいほうで、ゴジラやモグラと間違えられたり……(笑)。二十年たって、

やっと市民権を得始めたところでしょう。か。まだまだ知られていないし、理解もされていない存在ですね（笑）。

理解されにくいというのは？

一つは、非常に広汎な内容を含んでいる新しい運動だからではないかと思っています。「あごらってなんですか」と聞かれても、ひと口では説明できない。近頃は「ひと言で言えば、戦争や差別をなくしたいと思って、一生懸命生きている人たちのグループです」ということにしていますが……。

全くのノンポリだった私が、突然、運動を始めるようになったのは六〇年安保が契機ですけど、最初に取り組んだのが保育所づくり。これはいろんな苦労がありましたけど、結果的には地域に保育園が出来、その過程で、運動

することの楽しさも覚えしました。でも柳の下に、二匹目のどじょうはいませんでした（笑）。〈BOC〉と〈あごら〉では、全く大苦勞しました。保育所づくりのように、目的や意義が明確ではないので。

いま思えば、〈あごら〉よりは〈BOC〉のほうが「働く」ことに焦点が絞られていただけに理解されやすかったと思います。が、それでも、たとえば「働く」ということば一つにしても、私が思い浮かべるイメージと、労働の現場に立ったことがない主婦の方たちとは開きがありました。まして〈あごら〉となると、各人各様の理想郷を描かれる。そしてそれは、〈あごら〉に加われば、即、与えられると思ひ込む……（笑）。今にして思えば、どうしてこんなたいへんなことを始めたのだらうと、我ながらあきれかえり

ます。頭が悪かったから始めたのだとしか思えません（笑）。

それでも続けて来られるのは？

成功しなかったからではないでしょう。うか。うまくいったら、とっくに手をひいたと思いますよ。この仕事を継ぐ人も、まねをする人も、わんさと現れたでしょうね。

自分がやればうまくいくと名乗りをあげて、しばらくやってみた方もありますが、やはり夢と現実のギャップは大きかった……。

そのギャップは今もありますか？

もちろんあります。ただ、二十年も経つと、ギャップがあることを、それなりに一つの過程として人が認めてく

ださるようになった……とは言えるか  
と思います。

何度も投げ出そうとなさったそうですが、  
思いとどまったのは？

多分、苦勞を上回る愛があったから  
でしょうね。家族の愛、友人の愛、仲  
間の愛、会員のやさしさ。そのやさし  
さの総量のほうが大きかったのでは  
う。

この仕事をしながらたくさんすば  
らしい方にめぐりあいました。その一  
人に亡くなられた三森孔子（よしこ）  
さんがいらっしやいます。へお産の学  
校を始めた三森さんは、自然分  
娩に徹された。「十五分待てば会陰切  
開をしなくてすむんですよ」と、どん  
な時でもニコニコと「待って」おられ  
ました。苦しい時、困った時、いつで

もあの笑顔を思い出します。私も少し  
ずつ「待てる」人間になったような気  
がします。だから投げ出さなかったん  
ですね。私だけでなく、ほんとうにた  
くさんの方が、待ってくだいました。  
厚くなったり薄くなったり、出来不出  
来の激しい『あこら』にあきれた方も  
多かったと思いますし、退会者が相つ  
いだ時期もありますけれど、大部分の  
方が辛抱強く見守って下さった。だか  
らこそ続けられました。

あこらの二十年は、それぞれの会員の  
成長の過程でもあったと思うのですが、  
斎藤さんにとってはどうですか？

やはり私も、それなりに変わりもし、  
成長もしたと思います。女の問題から  
出発した私ですが、部落も、在日も、  
沖縄も、先住民も、「障害者」も、全

部女の問題と底がつかっているとい  
う思いが、一年一年深くなりました。

個人的に一番嬉しいのは、二十年前  
に比べて、ずっと自分を好きになった  
ことです。行動すること、言うこと、  
書くこと、そして現実の自分が、ほと  
んど横並びになった。そのことがとて  
もううれしい。思った時には体がスツと  
動けるようになったような気がします。

リブ、フェミニズムと、「女」の状況  
も、社会の状況も、少し変わったと思  
いますが、どうお考えですか？

まだ変わらない部分もたくさんあり  
ますが、この二十年間、社会はずいぶ  
ん変わりましたね。女の状況の改善は  
目を見張るものがあったと思います。  
それでも「二十年のつどい」の時も、  
創刊の頃と変わらない職場や主婦の状

況の話がたくさん出ましたね。まだまだ仕事は山ほどある、と改めて思いました。その一方フェミニズムは、全体的な状況の改善に対応してマチュアになってきたのではないのでしょうか。

ただ、どの時期でも、フェミニズムに初めて出会った人と、やや年を経た人では、考え方にどうしても違いがありますね。「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物学のことばをふっと思ひ出すことがあります。

それにしても、社会は「いいほう」よりは、どんどん「破滅の方向」に進んでいくようで、その流れにフェミニズムがどれだけ立ち向かえるか……。

これからが正念場ではないでしょうか。

「三号雑誌」ということはあります  
が、創刊のとき、何号くらいまで続く

とお考えでしたか？

「続く」という考えも、「続ける」という考えも全くありませんでした。

『あこら』が必要でなくなる社会が創刊の志でしたから、「初めから、滅ぶことを目的にした雑誌」と言ったほうがよいかと思っています。

ただ一つの火花を打ち上げられれば、それでよい、と。

女性の仕事を持ち、子育てをするだけでもたいへん。へあこらはさらに運動も加わるわけですから、そのへんのバランス感覚は？

バランス感覚なんて考えたら、「仕事と子育て」も両立しないのではないのでしょうか。よく「子育てしながら仕事ではたいへんだったでしょう」と聞

かれます。たいへんでなかったと言え  
ばウソで、いま振り返っても、あれは  
網渡りではなくて「糸渡り」だったと  
ゾッとしますが、子育てがあったから、  
仕事も続けられたと思っています。

家に帰ればほんとにおもしろい、楽しいことが待っている。職場で仮りに右脳だけを働かせていたとすると、家では左脳が働く、そんな感じで疲れがとれる。運動も、よく働く人ほど、よく活動しますね。働くことによってエナジーが生まれ、活動することでまた別のエナジーが生まれる。「子育てと仕事」の関係とよく似ているような気が、私はします。

へあこら二十周年で、一番の「苦労  
は？ 喜びは？

苦労と言えば、目に見えるかたちで

は資金づくりでしょうね。本を出すのには、どうしてもお金がかかりますから。

でも一番つらかったのは、心ない中傷、罵詈雑言でした。面と向かって言われるのはまだしもですが、陰口というのはイヤですね。だから私は、ぐちと言いわけと陰口だけは言うまいと思っています。へあごろへは、さんざん言われましたが、へあごろへのほうでは他の非難は一度もしていません。これは、今後とも心がけたいと思っています。

小さいことでは、退会のご通知が届く時はガックリします。せっかく入ったと思う方がすぐおやめになる時も残念ですけど、長くかかわって下さった方がお退きになる時は複雑な気持ちです。ああ、やっぱり私たちに何か足りないものがあるのだなあ、と。

うれしかったことは苦勞と同じくらいたくさんありますが、やはりこの二十年で、深い友情が育まれたことでしょね。特に、何度も押し寄せた大波を、共に手をとりあってぐりぬけた仲間たちとは、姉妹以上といってもいいくらいの深い心が通い合うようになったと思います。

そして、直接お目にかかったことのない方も、各地でしっかりと根を張り、しなやかに、でも勁く生きていらっしゃる。湾岸のスライドとビデオを持って全国各地を歩き、そういう方々にお会いして、ああ、へあごろへは素晴らしいグループになったなあ、と、ほんとにうれしく思いました。決してことごとしくないけれど、自らの心と意志と感性を持って生きている女（ひと）たち。私は今まであまりへあごろへの自慢をしたことはなかったのですが、

この頃は、「へあごろへって、ほんとにいいグループですよ、いい女がいっぱい……」と、大自慢しています。

これからのへあごろへは？

どうなるか、というご質問ですか？ 遠未来はわかりませんが、仮に私が明日、世を去っても続いていると思います。そして、一年一年、ますます良いグループになる、と信じています。

今後のへあごろへに望むこと……。

メンバーの一人ひとり希望が違っていると思いますが、私は、ますます一人ひとり個性豊かになってほしいと思っています。バイオリンもピアノもチェロもコントラバスも、それぞれがそれぞれの音を響かせた時に一番美しい弦楽四

重奏になる。管楽器や打楽器が加わればもっと豊かなシンフォニーになる。ほんとうの個があつてこそ、ほんとうの和音は生まれるのではないでしょう

か。

いまメンバーは十代から九十代まで。出身も学歴も職歴も生い立ちもみんな違う。シンフォニーは、とてもむずかしいことのように思われますが、だからこそ夢を描いてしまいます。むかし

見た『未完成交響曲』という映画で、シューベルトが教室に入る前に、教室から美しいコーラスが響いてきたシーンがありました。誰が棒を振るでもなく、色彩豊かな音が響いてくる、そんな日が来るといいですね。

そのためにも、一人ひとりが積極的に考え、発信し、それを『あこら』に寄せてください。決して遠慮なさらずに。

\*笑顔を絶やすことなく、次から次へとあふれるような言葉と表情。人間はやっぱり学歴や年齢によって決まづてはならないと思う。

ひとくちに二十年といっても、その道のりは変化にとんだものだったろうし、一人だけでは決してたどれなかつただろう。そのたいへんさを背負い、「継続は力なり」を実践した斎藤さんに拍手。

十月末まで、在庫本半額特価セール！

発行資金づくりのため、在庫既刊を会員の方に限り半額で、また78年1号—170号までのセット（途中、欠番あり）は、総額六万三、六六四円のところ、二万五千元でお頒ちします。

地域・出身校・PTA等の図書館にもどうぞ。

（在庫数のごくわずかなものもありますので、お申込みはお早めにどうぞ）

東京都新宿区新宿一—九—六 あこら事務局



## あごらブックリスト一覽

(A 5判)

創刊号	( 72. 2)	特集	女が働くこと	200 円 (品切れ)
2 号	( 72. 6)	特集	女性の進出のために	200 円 (品切れ)
3 号	( 72. 11)	特集	主婦の解放をめぐる	200 円 (品切れ)
4-5 号	( 73. 6)	特集	何かしたい主婦のために	300 円 (品切れ)
6-7 号	( 74. 3)	特集	運動をすすめよう	350 円 (品切れ)
8 号	( 74. 8)	特集	子殺しを考える	380 円 (品切れ)
9 号	( 74. 12)	特集	働く女と主婦の接点を求めて	430 円 (品切れ)
10号	( 75. 3)	特集	女と法	700 円 (品切れ)
11号	( 75. 6)	特集	女と教育	750 円 (品切れ)
12号	( 75. 10)	特集	メキシコ会議と世界行動計画	750 円 (品切れ)
13号	( 76. 1)	特集	国際婦人年を考える	750 円 (品切れ)
14号	( 76. 4)	特集	女の記録	750 円 (品切れ)
15号	( 76. 9)	特集	職場の中の女性差別	750 円 (品切れ)

〔 77 年1月『あごらミニ』(B 5判) 発刊〕

77年1号	( 77. 1)	快談怪談=マンリブ・ウーマンリブ	150 円 (品切れ)
2号	( 77. 2)	快談怪談=夫についてホンネを語る	150 円 (品切れ)
3号	( 77. 3)	快談怪談=スタイリストはなぜ死んだ	150 円 (品切れ)
4号	( 77. 4)	快談怪談=転勤を考える	150 円 (品切れ)
5号	( 77. 5)	ぽ=ほんとうに女たちが期待できる政党は?	150 円 (品切れ)
特集	16号	( 77. 5) 女と結婚	750 円 (品切れ)
	6号	( 77. 6) 女の代表として立ちまーす!	100 円 (品切れ)
	7号	( 77. 7) ルポ=新・女時局大演説会	100 円 (品切れ)
	8号	( 77. 8) 展望=参院選を終わって	100 円 (品切れ)
	9号	( 77. 9) 問題=化粧品は顔の農薬	100 円 (品切れ)
	10号	( 77. 10) 主婦の再就職アタック失敗談	100 円 (品切れ)
	11号	( 77. 11) 座談会=結婚についてホンネを語る( 続)	100 円 (品切れ)
特集	17号	( 77. 11) 女と生涯教育・生涯学習	780 円 (品切れ)
	12号	( 77. 12) あごら全国集会報告	100 円 (品切れ)
78年1号	( 78. 1)	女が働くこと	100 円
	2号	( 78. 2) おくれている都道府県の行動計画	100 円
	3号	( 78. 3) しあわせの総和は一定か	100 円

	47号 ( 81. 2)	自分をみつめる眼	100 円
	48号 ( 81. 3)	結婚の“現場”から	100 円
	49号 ( 81. 4)	私、どんな仕事ができるのかしら	100 円
	50号 ( 81. 5)	待つ女から創る女へ	100 円
特集	24号 ( 81. 5)	女と戦争	1500 円
	51号 ( 81. 6)	私たちにとってボーヴォワールとは…	100 円
	52号 ( 81. 7)	戦争への道を許さないために	100 円
	53号 ( 81. 9)	女・子ども・障害者—家族・地域—	100 円
	54号 ( 81.10)	「フェミニスト・セラピー」を聞いて	100 円
	55号 ( 81.11)	「主婦とおんな」を読んで	100 円
	56号 ( 81.12)	「87歳の青春」を上映して	100 円
特集	25号 ( 81.12)	女と情報	1500 円
	57号 ( 82. 1)	おめでとう! ことしも翔ぼう	100 円
	58号 ( 82. 2)	私にとって老いとは	100 円
	59号 ( 82. 3)	エコロジー運動とフェミニズム運動	100 円
	60号 ( 82. 4)	本音を語る=あれから、五年	100 円
	61号 ( 82. 5)	討論=女と組織	100 円
	62号 ( 82. 6)	選び取れない姓	100 円
	63・64号 ( 82. 7)	あごら10周年記念全国大会を前にQ&A	100 円
特集	26号 ( 82. 7)	いま女がモノを言うということ	1500 円
	65号 ( 82. 9)	いま、私は言いたい	200 円
	66号 ( 82.10)	とにかく仕事を始めた三人	100 円
	67号 ( 82.11)	私にとって戸籍とは	100 円
	68号 ( 82.12)	いま、なぜ「平和か」	200 円
特集	27号 ( 82.12)	いま平和を支える	1500 円
	69号 ( 83. 1)	優生保護法改「正」をめぐる地方議会の動き	200 円
	70号 ( 83. 2)	今、男と女は	200 円
	71号 ( 83. 3)	優生保護法から見えてきたもの	200 円
	72号 ( 83. 4)	女どうしが連帯したら強いだろうけど	200 円
	73号 ( 83. 5)	「らしき」の順送り	200 円
	74号 ( 83. 6)	あなたにとって家事ってなあに	200 円
特集	28号 ( 83. 6)	産む・産まない・産めない	1800 円
	75号 ( 83. 7)	女と政治	200 円
	76・77号 ( 83. 9)	私・「障害者」そして……	300 円
	78号 ( 83.10)	“からだを考える”	200 円
	79号 ( 83.11)	座談会=いま旭川で思うこと	250 円
	80号 ( 83.12)	はたらく女性の選択	100 円

	4号 (78. 4)	結婚についてホンネを語る( 続続編)	100 円
	5号 (78. 5)	痛みの共有をともなった女性解放運動を	100 円
	6号 (78. 6)	体験記=自立への摸索	100 円
特集	18号 (78. 6)	いま女性解放は	1300 円 (品切れ)
	7-8号 (78. 7)	しあわせの総和は一定かをめぐって	100 円
	9号 (78. 9)	絵本の中の性差別を調べて	100 円
	10号 (78.10)	働くことだけが“翔ぶ” ことか	100 円
特集	19号 (78.10)	女にとって子どもとは	800 円 (品切れ)
	11号 (78.11)	調査=子どもの目が見た働く母	100 円
	12号 (78.12)	〈あごら京都〉の一年を振り返って	100 円
	24号 (79. 1)	平等と保障の確立の年に	100 円
	25号 (79. 2)	峠=私たちの男女雇用平等法を作る大集会	100 円
	26号 (79. 3)	アピール=地方選こそ女の出番	100 円
	27号 (79. 4)	出口がないということ	100 円
特集	20号 (79. 4)	ひろがる女性解放と男女雇用平等法	1300 円
	28号 (79. 5)	主婦の再就職は可能か	100 円
	29号 (79. 6)	細胞分裂開始	100 円
	30号 (79. 7)	家庭の日ってなァに	100 円
	31号 (79. 9)	第二回全国あごらの集い報告	100 円
	32号 (79.10)	私の出産から	100 円
特集	21号 (79.10)	子と母の関係を問う	1100 円
	33号 (79.11)	自分が変われば社会が変わる	100 円
	34号 (79.12)	家族のゆくえ	100 円
	35号 (80. 1)	出産を考えるⅡ	100 円
	36号 (80. 2)	80年代を我が胸に	100 円
	37号 (80. 3)	実現された長時間保育	100 円
	38号 (80. 4)	自己解放とセクシュアリティ	100 円
	39号 (80. 5)	語り明かして	100 円
	40号 (80. 6)	ななかまどの町から	100 円
特集	22号 (80. 6)	男女平等と母性保障	1200 円
	41号 (80. 7)	女たちの映画祭上映を終えて	100 円
	42号 (80. 8)	松井やよりさんの講演によせて	100 円
	43号 (80.10)	リブって何?	100 円
	44号 (80.11)	私には有効な男女雇用平等法をつくる札幌集会	100 円
	45号 (80.12)	女と主婦的状況を聞いて	100 円
特集	23号 (80.12)	女たちは、いま変わる	1500 円
	46号 (81. 1)	老後の問題は私たちみんなの問題	100 円

113号 ( 86.11)	佐世保の街と私たち	400 円
114号 ( 86.12)	下関に人工島が出来る!	400 円
115号 ( 87. 1)	「実践的女性学」に学ぶ	400 円
116号 ( 87. 2)	“女のネットワーク”	400 円
117号 ( 87. 3)	フェミニズム運動のない国	400 円
118号 ( 87. 4)	国家秘密法に反対する	400 円
119号 ( 87. 5)	女たちの'87地方選レポート	400 円
120号 ( 87. 6)	「母子健康手帳の様式改定」に疑問!	400 円
121号 ( 87.7.8)	ごまかされまい労基法改悪	400 円
122号 ( 87. 9)	性と生 生き方の交差点	400 円
123号 ( 87.10)	がめ煮	400 円
124号 ( 87.11)	女たちは行動する	400 円
125号 (87.12)	特集33号 新聞切抜きに見る女の16年 I	1800 円
126号 ( 88. 1)	美鈴選挙を振り返る	400 円
127号 ( 88. 2)	「夫育て」をめぐるって	400 円
128号 ( 88. 3)	女性の地位 (資料)	400 円
129号 ( 88. 4)	真宗大谷派における「女性差別」資料	400 円
130号 ( 88. 5)	真宗大谷派における「女性差別」II	400 円
131号 (88. 6)	特集34号 有縁の女・無縁の女・選択縁の女	1800 円
132号 ( 88.7.8)	全国ミニコミ特集 I	400 円
133号 ( 88. 9)	なあにこれー配偶者特別控除を考える	400 円
134号 ( 88.10)	女が働くこと、自立すること	400 円
135号 ( 88.11)	ミニコミ特集 II	400 円
136号 (88.12)	特集35号 新聞切抜きに見る女の16年 II	1600 円
137号 ( 89. 1)	天皇報道に驚く	400 円
138号 ( 89. 2)	続天皇報道に驚く	400 円
139号 ( 89. 3)	女にこだわる女たち	400 円
140号 ( 89. 4)	運営会議・拠点間交流会議報告	300 円
141号 ( 89. 5)	アジアの女と日本の女	400 円
142号 ( 89. 6)	女が動くとき日本が変わる I	400 円
143号 ( 89.7.8)	女が動くとき日本が変わる II	400 円
144号 ( 89. 9)	女が動くとき日本がかわる III	400 円 (品切れ)

以下の号より『月刊』を増ページし、ブックレット (☆印) を随時発行する。

145号 ( 89.10)	女たちは怒っている	400 円
146号 ( 89.11)	☆沖縄を犠牲にした安保の上に眠れますか	680 円

以下の号より『ミニ』を『月刊』と改称。A5判にする。

この号より第3種郵便物となり、以降は「特集」も通巻番号となる。

81号 ( 83. 12) 特集29号 子どもがあぶない	1400 円
82号 ( 84. 1) 女から女たちへ	350 円
83号 ( 84. 2) 85年へ向けて私たちはいま	350 円
84号 ( 84. 3) 人間の自由と「戸籍」	350 円
85号 ( 84. 4) 平等法上程を急ぐ労働省	350 円
86号 ( 84. 5) 「奇怪禁等法」にわかに浮上	350 円
86号号外 「禁等法」はとん詰問案に閣議決定国会へ	
87号 ( 84. 6) 「禁等法」原文	350 円
88号 ( 84. 7) 野党提案「平等法」全文	350 円
89号 ( 84. 8) 特集30号 均等・平等・保護	1600 円
90号 ( 84. 9) 「禁等法」の周辺で	350 円
91号 ( 84. 10) 実効ある平等法の請願を	350 円
92号 ( 84. 11) フェミニストドラマ「ある日花子は」	350 円
93号 ( 84. 12) 女が働くということ	350 円
94号 ( 85. 1) 十歳となったくあごら東海>	350 円
95号 ( 85. 2) 山口県青少年保護育成条例改「正」をめぐって	350 円
96号 ( 85. 3) 生命の流れを見つめて	350 円
97号 ( 85. 4) 女から男から<柏>	350 円
98号 ( 85. 5) 女から男から<湘南>	350 円
99号 ( 85. 6) ドイツ・青ざめた母—そして、私たち	350 円
100号 ( 85. 8) 特集31号 均等法・派遣法・そして……	1600 円
101号 ( 85. 9) 私たちが見たナイロビ会議	350 円
102号 ( 85. 10) 売春調査は必要と思うか	400 円
103号 ( 85. 11) 指紋押捺を考える	400 円
104号 ( 85. 12 ) 特集32号 ナイロビが語りかけるもの	2000 円
105号 ( 86 . 2) <あごら札幌>の十年	400 円
106号 ( 86. 3) 歩き出した主婦たち	400 円
107号 ( 86. 4) 高木葉子さんを惜しむ	400 円
108号 ( 86. 5) 自立のおしゃべりに風穴をあける	400 円
109号 ( 86. 6) 指紋押なつを考える	400 円
110号 ( 86. 7) みんないっしょに生きたいね	400 円
111号 ( 86. 8) <東海BOC>の七年	400 円
112号 ( 86. 10) 幌延問題と私たち	400 円

147号 ( 89.12)	セクシュアル・ハラスメント福岡報告	400 円
148号 ( 90. 1)	90年代わたしは	400 円
149号 ( 90. 2)	☆天皇の法的地位 I	680 円
150号 ( 90. 3)	もうひとつの山が動いた	300 円 (品切れ)
151号 ( 90. 4)	☆女の視点で衆院選を考える	795 円
152号 ( 90. 5)	☆セクシュアル・ハラスメント	680 円
153号 ( 90. 6)	☆あなたもライターになれる	700 円
154号 ( 90.7.8)	いま戦争を問う	440 円
155号 ( 90. 9)	中東への自衛隊派遣を許さない	400 円
156号 ( 90.10)	☆女性と天皇制	680 円
157号 ( 90.11)	☆中東—そして私たち	680 円
158号 ( 90.12)	小倉千加子さんと私たち	412 円 (品切れ)
159号 ( 91. 1)	私にとっての平和協力	412 円 (品切れ)
160号 ( 91. 2)	即時停戦——私は行動する!	680 円
161号 ( 91. 3)	ポスト湾岸・女の力で流れを変えよう!	515 円
162号 ( 91. 4)	国際平和を考える	412 円
163号 ( 91. 5)	ピース・プログラム 一民間人が見た戦後の湾岸	412 円
164号 ( 91. 6)	☆戦い終わって夜が明けて	680 円 (品切れ)
165号 ( 91. 7)	☆ふるさとが壊れる! リゾート法と私たち	680 円
166号 ( 91. 9)	ベトナムを旅して	515 円
167号 ( 91.10)	☆たかがPTA・されどPTA	680 円
168号 ( 91.11)	女性と冤罪・女性と人権	515 円
169号 ( 91.12)	☆湾岸戦争から未来へ	680 円
170号 ( 92. 1)	出歩く<あごら九州>	515 円
171号 ( 92. 2)	☆衣装を替えれば意識も変わる?	680 円
172号 ( 92. 3)	いのちを見守る	515 円
173号 ( 92. 4)	今、輝く女たち	412 円
174号 ( 92. 5)	☆「従軍慰安婦」問題が突きつけるもの	980 円
175号 ( 92. 6)	☆男という病・女という病理	980 円
176号 ( 92. 7)	☆変わる・変える・変わった!	680 円
177号 ( 92.8.9)	☆沖縄から発信	680 円
178号 ( 92.10)	☆PKOの背後にあるもの	980 円
179号 ( 92.11)	特集36号 新聞切抜きに見る女の16年Ⅲ	2575 円
180号 ( 92.12)	☆冠婚葬祭とフェミニズム	880 円
181号 ( 93. 1)	☆私のライフワーク	680 円
182号 ( 93. 2)	☆激動する渦のなかで	880 円
183号 ( 93. 3)	☆あごら20年 女の20年	1545 円

## 〈あごら〉の方向性（★プログラムから★）

〈あごら〉には“規約”はありません。ゆるやかな“方向性”の合意で運営しています。

- 1 自分も他人もかけがえのない存在として尊重し、人権を侵害するあらゆる差別・戦争・公害・暴力に反対する。
- 2 イデオロギーを先行させず、現実扎根し、地域に密着した運動を行う。
- 3 個人の意識変革を中心に、着実に持続的な運動を。
- 4 ゆるやかな連帯。ゆるやかな方向性。
- 5 「人はすべて可能性を持つ」を信条に、女性の可能性の開花に力をつくし、社会的活動と結びつける。
- 6 フェミニズム運動の中で、特に情報部門を専門的に受け持つ。
- 7 どの政党・企業・団体とも関係なく、自主独立を続ける。
- 8 会費・基金および事業収益を資金とする。
- 9 会員は、自分の状況と、さき得る時間や力に応じて運動する。絵を描く人は絵を、歌を歌う人は歌を……。『病床でもできる運動』が基本。
- 10 どの部門にも「長」は置かない。運営の最終責任は、運営会議とする。

● 〈あごら〉には旭川から沖縄まで、全国17の拠点があり、各地の事情に応じた活動を続けています。月刊『あごら』は、拠点の持ち回り編集を原則としていますが、それぞれの拠点の現状に応じて無理のない範囲で組み立てています。どの号も、皆様の自由なご発言・ご投稿をお待ちしています。会費は誌代とも1か月600円、入会金は不要。1年分または半年分の前納制となっています。



【編集後記】あんまりほめことばかり頂いて気恥ずかしい……。でも、このほめことは、個人に向けられたものでも、事務局に与えられたものでもない、〈あごら〉を支え続けてくださった数えきれないほどたくさんの方々に寄せられたもの、と、そのままを掲載させて頂きました。めげることも多かったけれど、こんなに喜ばれていた〈あごら〉だったのか……と、すべての苦勞も吹き飛ぶ思いがします。ほんとうにありがとうございます。

考えてみますと、こんなに喜ばれる仕事も少ないのではないのでしょうか？ 「私など役に立つのかしら……」などとお思いにならず、ますますたくさんの方にかかわって頂きたいと思います。宛て名書き、封筒貼り、電話等々、よくもこんなに仕事があると思うほど、いつも大忙しの事務局、そして各拠点です。一人離れている方でも、できる仕事も、たくさんあります。ご連絡をお待ちしています。

---

あごら20年／女の20年 1993年 4月20日初刷

●編集 あごら事務局

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-3354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 〈あごら〉企画会議 定価1545円（1500円＋45円）

---

この　ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その　大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして　あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに　たいせつに　しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが　だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ　生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

（あーらー）

人と人の出会いひろは

（あーらー）

人と人の共に生きるひろは

（あーらー）

人と人の共に生きるひろは